

メディアさん奮闘記

メイベル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づけばコルキスの王女メディアに生まれ変わっていた。そして女神に意志を縛られ人生を弄ばれ非業の死を遂げた。

それから長い年月が経ち、英霊の座で眠りについてた彼女を呼ぶ声が聞こえる。声に従い現世へと舞い戻った彼女は、そこが前世の知識にある聖杯戦争と呼ばれた争いが起こる地だと思い出す。

キャスターのサーヴァントとして現世に戻った彼女は誓う。

聖杯を使い神への復讐を。

※TS要素は薄めかもしれませんが。

目次

第九話	187
第八話	171
第七話	154
幕間 遠坂凜 後編	125
幕間 遠坂凜 中編	108
幕間 遠坂凜 前編	93
第六話	81
第五話	69
第四話	57
第三話	43
第二話	32
第一話	1

第十話	211
閑話 冬の日 逢瀬 前編	224
閑話 冬の日 逢瀬 後編	232
第十一話	241
幕間 セイバー 前編	257
幕間 セイバー 中編	276
幕間 セイバー 中編②	290
幕間 セイバー 後編	308

第一話

小雨降る闇夜、山門へと続く石段の入り口に座り私は待つていた。

私を召喚した下種な魔術師の束縛を解き街を彷徨い、ようやくここへ辿り着いたがそろそろ限界だった。現界する為の依り代となるマスターが不在の影響で、自分の存在が薄くなつていくのを感じる。

知識通りならあの男が来て助けてくれるはずだが、現実には都合よくはいかないようだ。私の運命を弄んでくれた神へ復讐をしたかったが残念だ——そう思い諦めかけた時、傘をさした長身の男が歩いてくるのが見えた。

その男は私の前に立つと黙って此方を見据えた。雨が降る夜に傘もささずびしょ濡れ。さらに纏う服は見慣れぬ異国の物で、髪色は紫に耳は物語に登場するエルフが如く尖っている。自分自身でも呆れるほどに怪しい。だと言うのに男は警戒する事無くただただ立つていた。

お互いに相手を見るだけの時が過ぎる。

目的の人物と出会えたと言うのに、私はすぐに言葉が出なかった。彼の纏う空気に気圧された訳でも、言うべき事を決めていなかった訳でもない。自ら選び決めた行動だと

言うのに、今更ながら彼を巻き込んでいいのかと言う逡巡。自分の欲望の為に無関係な人間を危険に晒す事に躊躇いを覚えた。

しかし私は自分の為に彼を巻き込む覚悟を決める。捨てられない願い。自らの欲望。そこに正義は無く、大儀も無い。それでも私は願いを捨てられない。けれどせめて真実を伝えておこう。

「私は人外の者。関われば死地へ赴く事となりました。その上で頼みます。私を助けて下さい」

傘をさしたまま此方を見据えていた男、葛木宗一郎は悩む様子も無く返答してきた。感情を窺わせない平坦な声でたた一言——わかった——と。

葛木宗一郎ならばそう答えるだろうと『知っていた』私は微かな罪悪感を感じる。この罪悪感を忘れぬように心しよう。欲望に囚われて自分を見失わない為に。私が私である為に。

「私の名はメディアと申します。マスター」

さあ始めましょう。私の聖杯戦争を。

柳洞寺の葛木の自室に案内され、マスターとサーヴァントの主従契約を行い、その後

に聖杯戦争について説明した。その間彼は一切口を挟む事無く、説明が終わってからも私の目的を聞く事も無かった。質問してきた内容は「私はどうすればいい」だけであった事に、知識で人柄を知っているとは言え驚いた。

「マスターは私が聖杯を求める理由を聞かないのですか？」

「聞く必要があれば聞こう。だがお前が言う必要が無いと思うなら、私から聞く気はない」

あまりと言えばあまりの物言いにさすがに呆れてしまう。

「それで、今後どうする？」

呆れる私を置いて話を進められ、慌てて考えていた戦略を話す。すると出会ってから初めて彼が悩んだ。とは言え慌てる様子は無く、発する言葉も平坦で悩んでいるのか疑問ではあるが。

「魔力とやらを集めるのに適した柳洞寺を拠点にするのは理解した。しかしその場合、寺に住む他の者に対してお前を連れてきて住まわせる理由を考える必要がある。親類と言えばよいか？」

「マスター、私の見た目ではそれは無理があると思います」

「ふむ。では婚約者という事にするのはどうだ？」

腕を組み私を見る姿には、特別な感情が一切見受けられない。特に異性に興味を抱か

れたいとは思わないが、興味の欠片も見受けられないのは多少プライドが傷つく。だから返答は少しトゲのある言い方になってしまった。

「マスターが良ければそれで構いません」

異性として好きなのではないけれど、扱いはちゃんとして欲しいと口調でアピールする自分の対応に内心で頭を抱える。これから英雄達が争う血みどろの戦争へと参加すると言うのに、私は一体何をやっているのか。

目的の人物をマスターに出来て気が緩んでいるのを自覚する。反省を籠めて自分が何故ここに居るのか、英霊になる前の生きていた時の事を思い返した。

私は元々21世紀の日本に生きる一般人だった。スポーツやゲーム、マンガやアニメ等を娯楽にしつつ普通に生きるどこにでもいる平凡な一般人。

それが気づけば神々が存在し、魔法がある異世界の国の王女に生まれ変わっていた。国の名をコルキスと言い、自分の名前はメディアだった。

日本人としての記憶があった私は自らの境遇をすぐには受け入れられなかった。自分の常識とはかけ離れた世界に転生した上に、男から女になったのだから。

だから現実から逃げるように魔術の習得に勤しんだ。神々が使う魔法は人の身で

は扱えなかつた為、魔法の下位互換とも言うべき人が扱える魔術を学んだ。本体を見た事はないが、女神ヘカテーが魔術の師であつたからか魔法に近いほどの魔術を習得する事が出来た。

逃避で学んでいた魔術だったが、その腕前が一流になつた頃にはメデイアとしての自分を受け入れる事が出来た。魔術を修めてこの世界で生きる自信が持てたからかもしれない。しかし何よりも女神ヘカテーや家族が私に氣を使い、優しくしてくれたからこそだろう。

前向きになつてからは王女としての作法や女性としての身嗜みを進んで勉強した。おかげで周りから立派な王女と褒められる事もあり、悪い気はしなかつた。

だがそんな平和な時間も終わりを向かえた。一人の男が王宮を尋ねて来たのだ。彼の名はイアソン。女神ヘラの加護がある野心もつ男性だつた。

そこから私の人生が狂う。王女の自分を受け入れはしたが、私は決して男性に恋心など持たなかつた。しかしイアソンを加護する女神が私を洗脳し、彼の為に尽くすようにしたのだ。それからの私の人生は悲惨だつた。イアソンの為に愛する弟を殺し、他国の王を謀略で殺し、彼に近寄る女性も殺した。そして最後はイアソンに裏切られ捨てられる。

洗脳されてからの人生は悲惨なものだつた。抗う事も出来ず、私は女神を恨みながら

非業の死を遂げた。

そんな死した私に何か語りかけてきた。死の眠りの中にあつた私は『ソレ』の誘いを受け、再び現世へと舞い戻る。舞い戻る過程で聖杯戦争に関する知識を与えられ思い出した。メディアになる前の世界に存在した Fate というゲームやアニメ、小説の事を。

現世へと戻つた私は、令呪を持つた魔術師を目の前にして決めた。聖杯を手に入れ、私の人生を弄んだ神へ復讐すると。

マスターと打ち合わせをして今後の方針を決めた翌日、夜間にある場所へ向かつていた。目指す場所は言峰教会。第5次聖杯戦争の黒幕である男が居る場所。

現代風の服装に身を包み、教会へ続く坂道を歩いて進む。動きやすさを優先してホットパンツに黒いニーソックス姿なのだけど……なんとなく遠坂凜と被っている気がする。あちらはスカートではあるのだけど。

「こんな夜更けに女の一人歩きは感心しねえな」

サーヴァントどころか魔術師にすら見えないような格好で歩いていると、頭上から男の声がした。声のした方向——電柱の上を見れば赤い槍を肩に乗せた男が居た。

「そうですね。貴方のような女性への声の掛け方も知らない男に目をつけられるようですし」

「言つてくれるな。セイバーやアーチャーつて訳じやなさそうだ。ライダーつて所か？」

電柱から降りて槍を構える事無く、世間話をするかのようにランサーが問いかけてくる。歩く動作からセイバーやアーチャーではなく、会話したからバーサーカーではなく、あまりに堂々と歩いていたからかアサシンやキャスターでもなく、消去法でライダーだと思われたようだ。

「ここでランサーと出会う予定は無かったのだが、さてどうするか。」

「そういう貴方はわかりやすいわね。ランサー。それで何用かしら？」

「ハッ、決まってるんだろ。こうしてサーヴァント同士が出会ったんだ。やる事は一つだろうよ」

殺る気満々のランサー。それに対し私は両手を動かさず――

「降参するわ」

――白旗をあげた。

「ライダー、てめえ何を考えてやがる」

ギロリと睨まれ槍を構えられた。降参する前より、降参後の方が警戒を露にされる。

さすがアイルランドの光の御子。警戒心だけの殺気ですら恐怖を感じる。本気で怖いので偽りではない本音を言いましょうか。

「貴方と戦う気はないわ。それと私はライダーではなくキャスターよ」

戦う気はないと言ったのに構えを解かれない。これにはさすがに焦った。

「ちよ、ちよつとランサー、貴方、戦う気が無い女相手にやる気なの？」

「サーヴァントつてのはそういうもんだろぅが」

よく見れば槍は構えたままではあるが、先程に比べ殺気が小さくなっていた。ついでに声音が不服だと言わんばかり。だと言うのに決して引こうとしない。

ああ、確かランサーは言峰の情報収集目的で令呪で『全てのサーヴァントと戦い、一度目は倒さずに生還しろ』と命令されていたのだっただけかしら？　すると彼自身の意思では引くに引けないと。

クー・フリーンと言えばヘラクレスにも劣らぬ大英雄。魔力が充実していて飛行状態からの大魔術を使えば、私でも何とか戦えるが『突き穿つ死翔の槍』を使われればきつい相手。手加減されていても戦いたくは無いけど仕方ない。

「ではランサー、あちらの墓地でやりましょうか」

ため息混じりに教会へ向かう道ははずれ墓地へと向かう。おそらく近い未来にセイバーとバーサーカーが戦うであろう場所へと。

ランサーと別れて教会前へと辿り着いた。

折角戦つてあげたと言うのに、別れ際の青き槍兵はとても不服そうだった。簡単な攻撃魔術を一発だけ撃つて降参したからだろうか。戦う前以上に私に不信な目を向け、気に食わないとはつきり言われた私こそ不服だ。令呪の縛りがあり全力を出せないくせに戦いたがる気持ちはわからない。

教会の入り口の扉をゆっくりと開く。

ランサーのマスターである人物に文句の一つも言いたいが、今回の目的を考えると気持ちを抑えなくてはいけない。気分を入れ替えるつもりで開いた扉から教会へと入る。

「これはこれは。まさか最初に我が教会を利用するのがサーヴァントとはな」

出迎えてくれたのは黒い神父。元代行者にして人在らざる力を持った存在。

「何を求めてきたのかわからぬが歓迎しよう。我が教会はどのような者にも扉を開いている。それが例えサーヴァントだとしても」

神父らしい口上ではあるが、裏を知っているだけに良く言うと感じてしまう。歓迎すると言うのは本心だろう。話す内に私の心の傷を切り開き、気に入れば好意として悪意を向けてくるのでしょうか。そう分かっているので無視して一方的に此方の用件を伝

える。

「ウルクの王に謁見しにきたのだけれど、彼の方はどこかしら？」

「ほう……」

言峰の表情が見るからに変わる。驚きと言うよりは興味を持った感じか。

「残念ながらギルガメッシュは今は居ない」

「そう。なら少し待たせてもらいましょう」

とぼけたり否定するかと思っただけど、あっさり英雄王の事を認められて少しだけ驚いた。言峰綺礼はもつと腹黒いかと思っていたのだけれど。彼と会話をする気はなかったが、つい聞いてしまう。

「英雄王の事をそんなに簡単に認めて良かったのかしら？」

「聞かれたから答えただけなのだが、何か問題があったかね」

聞かれたから答えた。そのシンプルな返答に困惑してしまう。最後まで衛宮士郎や遠坂凜を騙していた腹黒い人物のイメージだったのだけれど、私の思い込みだったのだろうか。

「此方からも質問があるのだが構わんかね？」

「どうぞ。答えるとは限らないけど」

「どのようなしてギルガメッシュの事を知った？」

「最初から知っていただけよ」

「なるほど。英霊に成るほどのキャスターと言うのは伊達ではないという事か」

返答に納得した様子の言峰綺礼。私の事をキャスターと言ったのは彼らしくないミスに思える。今の所私をキャスターだと知っているのはランサーだけなので、自らランサーのマスターであると自白したようなものだ。もしかしたらミスではなく、私にバレていると考えて情報を出して反応を見る為かもしれない。

気軽に話が出来る相手ではないと知ってはいるが、実際に話すと油断ならぬ人物だとよく分かる。

「悪いけど貴方と世間話をしにきた訳ではないの」

「ふむ、教会の家主として待ち人が来るまでの間の歓待をしたつもりだったのだが」

白々しい。言峰綺礼がまともな善意で行動するはずがないではないか。彼のサーヴァントではあるが、自由に行動している英雄王が教会へ来るかも怪しい。それを伝えずにいるのは私から情報を引き出す為か、或いは愉悅の対象にでもされたか。

ここに留まっついてはあまり良くない気がした。元々反英霊である私と、神の祝福の場である教会の相性は悪い。退出を決めたが、無駄に気分を害されたお礼に最後に皮肉を言う事にしよう。

「言峰綺礼、悪意を尊ぶ人間なんて珍しくもないわよ」

「何?」

「愛するが故に相手を害する。そんな物語は昔からいくらでもあるでしょう? それに好きだから意地悪をする。それは子供が行う純粋な好意。何も変な事ではないわね」

「キャスター、お前は好意による悪行を善しとすると言うのか」

「人の趣味嗜好はそれぞれと言っただけよ。行き過ぎれば問題でしょうけどね」

「……ふむ」

「存外、似た者は居るものよ」

自分は他人とは違う。人が持つべき喜びを持っていない。と、自分の事を悪い意味で特別だと思っているはずの男に対する皮肉。お前は特別ではないと突きつける。

「今日は帰らせてもらうわね」

「そうか」

背を向け出て行く私に掛けられた言葉は平常の声音だった。元から皮肉が通じるとは思っていなかったから予想通り。でも教会を跡にする寸前、予想外の出来事に驚いた。扉が閉まる前に聞こえた小さな一言に。

「感謝する」

もう少しで教会の敷地から出るという時に突然の威圧を受ける。神々に匹敵するのではと思わされるような絶対者が発する気配。ソレを感じ動けぬ私の前に彼は現れた。

「雑種、綺礼が言う客人とは貴様の事か？」

髪を下ろし現代風の衣服を纏う彼は、紛う事なき英雄王ギルガメツシュ。古代メソポタミアのウルク王朝の王にして人類最古の英雄。神に生み出され神を廃した断罪者。

「は、はい。ギルガメツシュ王へ謁見の榮譽を賜りたくお伺い致しました」

間違いなく最強のサーヴァントの気分を害さぬよう、すぐさま跪く。

「珍しく綺礼めが指示をしてきたかと思えば、貴様のような雑種に会えとはな」

いきなり英雄王が現れたのはあの外道神父の差し金であるらしい。感謝すると聞こえた気がしたが、これがあの男の感謝する気持ちの結果なのだろうか。正しくそうだといい切れる気がする。帰る気満々で歩いていた為に動揺している今の私の心情を鑑みて。

跪き下を向いたまま顔を上げずに耐える。臣下の礼を尽くし、英雄王から許可が出るまでは決して声を出さない。相対するだけでもランサー以上の恐怖を感じるが、必死に耐える。

「多少は身の程を知っているようだが」

認めるような発言だが、それでも尚頭を上げない。コルキスの王宮で王女をやつてい

たのだ。するべき態度は良く知っている。

私が臣下の礼を崩さずに居ると、英雄王がつまらなそうに「話せ」と呟く。その一言にホツと息を吐き、英雄王に会いに来た目的を果たす為、緊張を押さえ込みながら口を開く。

「まず、此度の聖杯戦争への参戦の許可を頂きに参りました」

「すでにサーヴァントとして召喚された貴様が、今更参戦の許可を我に求めると？」
「現界し陛下の存在を知れば、それが正しい行為であるかと存じます」

英雄王ギルガメッシュ。古今東西の価値ある物は全てが自らの財産だと言つて憚らない存在。その根源は、財宝だけではなく人も須らく自身の所有物で、その末裔である者達が生み出した物さえ自分の物だと思つているからだろう。

故に冬木の聖杯さえも彼の所有物。ならば、それを巡る戦争に参加するのなら所有者である英雄王の許可を貰うべきである。

物凄い我様理論に屈しているのは自覚しているけど、これは必須事項だと思つている。彼に許可を得なければ、無礼な敵対者として宝具の群れに串刺しにされる自信がある。私はとてもか弱いのだ。

大体英雄王は格で言えば間違いなく神霊級だ。その彼が、神霊を呼べないはずの冬木の聖杯に何故呼ばれているのか。神々にすら喧嘩を売れる相手と戦うとか正気じゃない

い。ついでに言うとはラクレスやメドゥーサも神格を持つてはるはずだ。ヘラクレスは生前出会った事があるが、Fateの内容を思い返すとかなり弱体化されている。その辺りが神霊すら呼べた理由かもしれない。

威圧的なギルガメッシュのプレッシャーから逃避気味に思考していると、愉しそうな含みを持った声音で質問される。

「雑種、貴様が聖杯を求める理由は何だ？」

「神への復讐の為に」

私が即答すると途端に強烈な威圧感が。あ、怖い。あまりの怖さに薄っすら涙が出てくる。私は前世が一般人だし、生前も王女であり魔術師だった。戦士系列の英霊ではない私には、この威圧はきつ過ぎる。

しかしこの場で何もしないで居れば死ぬ予感しかしない。私は涙を堪えつつ必死に口を開いた。

「な、名乗りが遅くなった無礼をお許し下さい。私が名はメデア。生前はコルキスの王女でありました。此度の聖杯戦争ではキャスターのクラスで召喚されております」

私は死の気配に押され混乱しつつ饒舌になっていく。

「生前の私は神に意志を弄ばれ、望まぬ行為の果てに死にました。ですから神への復讐を望んでおります」

「それは今が神居らぬ世と知つての事か？」

「だからこそ出来る復讐がございます」

話していく内に感情が溢れてくる。それをあえて止めず、感情に流されるままに一番の目的を口に出した。

「陛下にもう一つお願いがございます。此度の聖杯戦争で、自由に行動する許可を頂きたいのです」

本当は敵対しないで欲しいと言いたい。だけどそれは英雄王自身の行動を制限する事になる。それはさすがに出すぎた行為。なのでせめて自由に動いて良い裁可を得たい。それさえ得れば、万が一気分を害すような行為をしても敵対しないで済む可能性があるから。

言うべき事を言い終わり、伏したまま英雄王の言葉を待つ。すると徐々に威圧が消えていき、静かな夜の気配だけが残った。

「臣下の礼を尽くす者を無碍にも出来ぬか。良いだろう。下らん争いに参加し自由に行動するがいい」

「あ、ありがとうございます」

そう言つて英雄王は私の横を通り過ぎ教会へと入つて行つた。彼が去つた後も、私は恐怖と緊張から解放された安堵で暫くその場から動けなかつた。

けれど動けぬ私は心から笑う。完璧ではないとは言え、最大の障害が取り除かれたのだから。

英雄王との謁見が終わり、私はルンルン気分で冬木の街を歩いていった。さすが神戸市をモデルにしただけはある。綺麗な夜景は私の心を豊かにしてくれそうだ。

「この設定も完了つと。ふふ、順調順調」

晴れやかな気分で、周辺の人間から魔力を収集し柳洞寺へと送る魔術陣を刻んでいく。原作のメディアがやっていた物を街の各所——ではなく、ほぼ街全体に設置した。

マスターが魔術師ではない私は、基本的に食事などの自然回復分しか魔力が補充されない。それではもしもの時に戦う事すら出来ない。なので一般人から魔力収集は必須である。柳洞寺の地脈の魔力は別の用途に使うしね。とは言え原作同様に昏睡事件でも起こせば、真つ先に赤い悪魔に目をつけられる。

なので広く浅く、ちよつと疲れたかなあ程度の魔力を奪うのだ。一般人の魂を傷つける気はないのです。念の為に未来ある子供や生い先短いお年寄り、生きる為に頑張つてる病人などからは収集しないようにしている。

本来ならそんな方法では収集量が微々な量になる。しかし冬木市のモデルである神

戸市の人口はなんと約150万人。冬木も当然同等の人口と考えて、それだけの人数から毎日集め続けられれば馬鹿に出来ない量の魔力となる。

真夜中にラフな格好で街を徘徊し魔術陣を設置していく。今の時期は冬木にいるサーヴァントはギルガメッシュ、ランサー、私だけなので気を張る必要も無い。

「ふっふっふん♪」

鼻歌交じりに市内中に陣の設置を済ませ、ついでとばかりに双子館で死にかけていた魔術師の治療をし、動けぬように仮死状態にしておいた。英霊を打倒するような余計なイレギュラーは御免です。

気分よくやる事をやったと意気揚々と柳洞寺へ帰り、マスターと共用の自室へと入ると――夜中の3時だと言うのにマスターが正座して待つていた。

「あの、マスター？ 何故起きてらっしゃったのです？」

「お前が帰宅するまで門を開けておくように頼んだのだな。帰宅後すぐに閉じれるように起きていた」

「あ、そうですか……」

そう言えば真夜中にもかかわらず山門は開いていた。明日、というか数時間後には教師として学校に行かねばならないだろうに。思わぬ所でマスターに迷惑をかけてしま

う。

「お待たせして申し訳ありませんでした」

「気にするな。助力するといった以上、当然の事だろう」

なんと誠実な人だろう。言つたからには守る。当たり前前の事かもしれないが、ここまで徹底できる人は稀だろう。生前もマスターのような人が居れば、神の呪縛があつたとしても——と、無かつた過去に思いを馳せても仕方ない。

「ではせめてもの恩返しに、朝になつたら起こしましょう」

サーヴァントたる我が身は睡眠も必要ない。寝たほうが精神的に良い事は良いのだが、今日くらいは我慢しよう。

色々な事が上手く行き前向きな気持ちの私だったが、朝方にぐったりする事態に陥る。

「宗一郎兄の許婚ともあろう方が、夜間帰宅とは何事ですか！ しかも紹介され寺へと住み込む初日に！」

「そ、その、慣れない街で迷子になっちゃつて……」

「ならば連絡の一つでもして、迎えを待てばよかつたでしょう」

「それは迷惑かなあと……」

「その無駄な気遣いこそ迷惑です。貴方ではなく宗一郎兄の評判を悪くする行為に他なりません。それに宗一郎兄の為でしたら、この柳洞一成、女人を迎えに行く覚悟は十分あります」

小姑な柳洞一成君に叱られるはめに……。

「聞いているのですか！」

「は、はいっ」

その後、学校へ行く時間までたつぷりとお叱りを受けました。

鬼の居ぬ間にと言う訳でもないが、昼間に認識障害の魔術を使い寺の人達に警戒されぬように陣地構築を進める。私が使いやすいように魔力の流れを整理し、外敵用のトランプも仕込んでおく。

一通り陣地作成が終わると、夜にするつもりだったアサシンの召喚を準備する。

「本当は夜の月光の魔力も利用して行うつもりだったのに」

ぶつぶつと文句を言いながら魔法陣を書き進める。昼間にアサシンを召喚するのは非常に不本意だ。しかし夜を待つとその前に小姑が帰ってくる。帰ってきたらきつと私に小言を言うに決まっている。それを聞いた後のイラついた気持ちでは、冷静に行う

自信がない。

「正論でチクチク言われたら、弁解のしようもないじゃないの」

マスターとは許婚の関係だとは言っても、それは仮の姿だ。だと言うのにあの小姑は！ 許婚に相応しくない。大和撫子には程遠い。日本男児の鏡である宗一郎兄につりあわない。日本料理の一つも出来ぬのでしよう。などなど……チクチクチク責めてきた。

「料理の一つくらいできるわよっ！」

絶品な料理は作れないが一応は作れる。卵焼きや味噌汁くらいは作れるはずだ。卵焼きが日本料理かは疑問だし、和食の基本らしい鰹節から出汁を取った味噌汁を作った事は無いが。

憤りのままアサシン召喚を行った。原作どおりに山門を依り代とし聖杯の認識を誤魔化した。貴重な令呪は私の手元に来るように細工するのを忘れない。

呪文を唱え、眩い光が消えると陣の上に一人の侍が立っていた。

「怪訝な呼びかけに応じてみれば、呼んだのは異国の女人か」

「初めまして、佐々木小次郎。召喚直後で申し訳ないけど、聖杯戦争についての知識はあるかしらっ？」

「うむ、聖杯、サーヴァント、マスターたる魔術師、それと今の時代の知識か。不思議な

ものだ。知らぬはずの事を知っているというのは」

例外的な召喚なので少しだけ不安だったが問題ないようだ。無事小次郎を召喚できて、朝からのイラだちが解消される。すっきりした気分以小次郎に話しかけると、困った返答をされた。

「佐々木小次郎、貴方には山門の守りにについてもらおうと思っているわ」

「断る。生憎と女人の指示に従って剣を取る気はない」

正直困った。召喚すれば原作同様に門番してくれるわよね。と気軽に考えていた。それがまさか断られるとは。しかも理由が女の指示は嫌だと言う。待遇改善なら検討の余地も在るのだけど、私が女だから嫌だと言われてしまうと改善のしようがない。

「ふっ、何をそんなに悩んでいる」

「召喚したサーヴァントが言う事を聞かない事に悩んでいるんですけど」

「何故悩む。簡単な解決方法があるではないか。甚だ不本意ではあるが、令呪を使い命じれば良からう」

「それは嫌よ」

女神に洗脳され自由意志を奪われた事を恨む私が、令呪を使い自由意志を奪う。それは何の冗談だろうか。復讐の為に聖杯を求める身ではあるが、自分が恨む女神と同じ事をする気は無い。

「出来れば貴方には自分の意思で協力して欲しいのよ」

「ふむ……。ならばお願いしてみてもどうだ」

何を言ってるんでしょう、この歌舞伎侍は。女の指示は嫌だとボイコット宣言した癖に。訳がわからずに居る私に対し、何故か小次郎は私のお願いを待っているようだった。よく分からないが試しにお願いの言葉を言ってみる。

「えーと、山門の守りをして欲しいなあ？」

「女の頼みを断る無粋は出来ぬな。とするなら、ここで門番をするのもやむなしか」

「つまり私に協力してくれると？」

「うむ。頼まれたのでは仕方あるまい」

無事に山門の守りに就いてくれるようだけど……。私は今も日本人的感覚は持ち合わせているつもりが、どうやらこの男とは別物のようだ。指示がダメでお願いなら良いという小次郎がわからない。

「まあ守りに就いてくれるならいいわ。じゃあ今後の打ち合わせをしましょう」

「断る」

「……今後の打ち合わせをして欲しいなあ」

「そうか。ではまず伝えねばならぬ事がある。本来の名は思い出せぬが私は佐々木小次郎ではない」

お願い効果で無事に打ち合わせが始まった。原作同様に正体は佐々木小次郎ではなく、伝承された小次郎の技が使える為に小次郎として召喚された農民らしい。本人は農民と言っていたが、本当は豪族か武士なのだろう。何故そう思ったかと言うと、ちよくちよく挟む断りとお願ひ要求、そして何よりもニヤニヤした顔で私をからかって遊んでいるのがわかったからだ。

腕も人柄も信用に値するが、面倒な人を召喚してしまった気がする。

「守衛の為の戦闘に關しては全てを任せろわ。で、貴方から何か要望とかあるかしら？」
「そうさな。時たまこうやって他愛無い雑談にでも付き合ってもらえば十分よ」

大切な打ち合わせをしていたはずが、雅な劍豪にとつては雑談だったらしい。深くため息をついた私をニヤニヤと楽しそうに見ている。

これからもからかわれる気がするのは、気のせいではないのでしょうか……。

魔力収集も予定通りに進み、アサシンの召喚も終わった。後は7騎のサーヴァントが揃うまでのんびりと待つだけだ。待っているだけで戦力が上がる状況に私は浮かれていた。

聖杯戦争とは関係ない事に情熱を燃やすくらいに。

「一成君、どうかしら？」

小姑を負かす為に料理を作り、今まさに打倒するべく挑んでいた。

「玉子は焦げていて苦いですな。味噌汁に至っては出汁が入っておらずスカスカな味です」

「そ、そんな馬鹿な……」

玉子焼きが焦げてるのは半分意図的なので良いとしても、味噌汁がまずい訳がない。出汁を取る為にお湯に鰹節を入れて、生臭くならないように一分ほどで取り出すという、うろ覚えの知識だが完璧なはずなのに。

「これなら同輩の衛宮の料理のほうが上ですな」

「うぎぎぎぎ」

家事全般に有能な無駄に女子力が高い英雄と比べられてはぐうの音も出ない。

反論できず悔しきでエプロンの裾を噛んでいる私に、別の意見を言つて下さる人物が居た。

「確かに焦げているが十分食べれる。味噌汁にしてもたまには薄味なものもよからう」

「ああ宗一郎様、ありがとうございます」

なんて素晴らしいマスターなのでしょう。小姑と違い人を喜ばせる事が出来る方です。人は褒めることで成長していくのよ。そこが分かっているマスターは、小僧っ子

とは大違い。

「宗一郎兄、甘やかすだけでは人は育ちませぬぞ」

こゝ、この小姑は。内心できいいと怒りを噴出しながら、表面では笑顔を維持する。頬がひくつき笑顔が崩れていそうではあるけれど。

「宗一郎様、一成君、そろそろ時間ですよ」

「そうか。では行つてくる」

「はい、いつてらつしやいませ」

朝食を食べ終わつた二人を笑顔で見送る。小言を言つた小姑は無視してマスターにだけ向ける笑顔。

見送りが終わると食器の後片付けを行う。水を使いすぎないように節水と、洗剤を無駄に使わないように気を使う。あの小姑は片付けや掃除関連でも色々といつてくるのだ。その際に家事の英霊を例えに出すので反論も出来ない。あの完璧な家事スキルを知っているだけに。

「今に見てなさいよ。エミヤシロウ！」

アーチャーが現界したら散々文句を言つてあげましょう。親友の教育が成つていないと。

怒りを動力にし食器類の片付けを終えた。そして一息ついてから残っていたご飯を

おにぎりにする。手に塩をつけてむにむに握る。サーブスで海苔もまいてあげましよう。

何個かのおにぎりを作ったらタツパに入れる。それとカップラーメンと沸いたお湯が入っているポットを手に持つ。タツパとカップ麺とポット。誰かに見つかると怪しいと言うより恥ずかしいので、認識障害の魔術を使い移動を開始。

通りすがりに会う寺の人達に挨拶をしながら山門へと辿り着く。

「アサシン、朝ごはんを持ってきたわよ」

呼びかけると霊体化していたアサシンが姿を現す。

「毎回律儀に持つてこなくとも構わんのだがなあ」

「それはどういう意味かしら？ 私の作るご飯がまずいとでも？」

下手なのを自覚しているからこそ、しよっぱいだけで済むおにぎりにしてあげているのに。口直しのカップラーメンまで添えて。

「怒るな怒るな。そうではなく、わざわざ毎食用意するのは大変だろうと言っている」

「山門から動けない貴方は、敵が来なければ暇でしょう？ 山門から動けるようにして

あげたいけど、聖杯戦争中は難しいわ。だからせめて娯楽も兼ねて食事の提供をするのが、呼び出した側の義務じゃないかしら」

退屈は意外と耐え難いものだ。ならばそれを出来る範囲で解消させるのが、山門に縛

り付けた私の義務だと思う。サーヴァントはただの使い魔ではなく人格があるのだから、相応の礼を尽くすべきでしょう。

「中々変わった御仁だな」

「貴方に言われたくはないわね」

暇だからと戯れに燕を斬る為に技を磨き、ついには魔法の領域にまで達した変人。皮が佐々木小次郎なので日本においては知名度補正が最大だとは言え、バーサーカーやラッサーにセイバーすら退ける自称農民。アーチャーも大概だけれど、アサシンも何かおかしい。

「いつものおにぎりとかツップラーメンを持ってきたから、食べなさいな」

「ふむむ」

「はあ、食べてくれると嬉しいわあ」

「では心遣いありがとう」

石段に座り、アサシンの食事中ぼくと景色を眺める。

「キャスター、毎回そこで待つのは何故か」

「ん、一人の食事って味気ないでしょ。だから一緒に食べるわけじゃないけど居るだけよ。不満なら戻るけど」

「不満なぞあるまいよ。しかしお主、本当に変わっているな」

下手に反応してからかわれないように景色をぼけくと見る。ああ凄く平和だわあ。特にアサシンがずずーと麵をすすする音が、まるで平和の象徴のよう。

チュンチュン鳴く鳥の声を聞いてうつらうつらと夢幻を彷徨っていたら、いつの間にかアサシンが食事を終えていた。食事を終えたアサシンからタツパ等を受け取り山門の中へ入ろうとしたら声を掛けられる。

「馳走になった」

「お粗末様でした」

私の日常になりつつあるやり取り。聖杯戦争が本格的に始まるまでの偽りの日常。そののなんと心地よい事でしょう。h o l l o w a t a r a x i aで私ではないキヤスターが、アヴェンジャーに関わらずに居た理由がよく分かる。

偽りの日常の心地良さに身を浸し、笑顔で山門を通り抜ける。すると私の歩みを邪魔するかのよう季節外れの一匹の虫が目の前を横切った。

「ああ、まったく。折角の気分が台無しね」

今日は殺虫剤を作ろうと決める。特大の虫でも始末できる特別製の物を。

日々せつせと下準備をする中、間桐邸に放った使い魔から動きがあったと連絡が入

る。詳細を調べる為に戻らせ、鳥型の使い魔から付けていたデジカメを外す。

現代の魔術師達が基本的に電子機器を馬鹿にする傾向があるのは、Zeroの話でよく知っていた。その為、魔術的な防備は私でも面倒だと思うほどな間桐と遠坂の屋敷ではあるが、電子的な警戒は無いに等しく、実に簡単に監視できた。

ただこのデジカメ、手ブレ防止、長時間稼働可能バッテリー、画質最高度、コンパクトサイズ、対衝撃、防水、耐熱その他諸々のとても良い物を、それも2個も購入したので、あの寡黙なマスターが「高いな」と呟く位の費用がかかってしまった。申し訳なさいでいっぱいなので、必ず有効活用せねばならない。

生活臭のする家計簿を横におき、自室の机の上で映像を確認すると。

「やはり間桐はメドゥーサね」

映像の中に眼帯をした紫の女性が写っていた。

「これで残すはアーチャーとセイバーのみ」

ランサーは直接会ったし、バーサーカーはインツベルンが召喚済みだろう。後は原作で物語の鍵を握るアーチャーとセイバーが召喚されれば、本当の意味で聖杯戦争が始まる。

「ふふ、楽しみだわ」

アーチャーやセイバーを直に見るのは楽しみだ。とは言え、その二人こそ私の邪魔を

最もしそうなのが問題ではある。

まあどちらか能力を知っているので恐れる必要はない。正面から戦えばどちらにも余裕で負けるけど。アーチャーには家事でも負けるけど。

アーチャー戦を脳内で妄想していると柳洞寺のお坊さんに呼ばれる。

「は〜い、今行きま〜す」

たぶん洗濯かなあと思いながら腰を上げて小走りで向かう。とりあえず、来るべき日までは居候として頑張りますか。

第二話

ある夜、遠見の魔術で監視していた衛宮邸でセイバーの召喚を確認した。とうとう第5次聖杯戦争が始まったようだ。不安と希望を胸に、かねてよりの計画を開始する。

まずは行動する許可をマスターに取り、次に一成君に見つかり夜間外出を窘められ、山門でアサシンに心配と同時にからかわれた。

石段を降りた頃にはちよつとだけやる気が減った。そんな自分を奮い立たせてからキャスターとしての姿に成り、急いで衛宮邸へと向かう。セイバーやアーチャーに不意打ちされては怖いので、魔術で気配遮断をするのを忘れない。

程なくして武家屋敷——衛宮邸——の入り口に辿り着く。

「屋敷内にサーヴァントの気配が二つ、か」

と言うことは、衛宮士郎は令呪を使ってセイバーを止めたのだろう。これで貴重な令呪が1画消失した事になる。価値を知らぬとは言え、衛宮士郎は勿体無い事をしたものだ。

「でも同級生の女の子を助けたと思えば、人として好感は持てるわね」

咄嗟の出来事なのに令呪を発動させた事から、心からの願いだったのだろうと推測で

きる。まだ特別親しくも無い遠坂凜を助けたいと思う気持ちは、彼の善性を表しているのでしょうか。正義の味方ですしね。

開かれている門を通り抜けると微かな結界の気配を感じた。魔術の結界にしては緩やかであつてないようなものではあつたが。確か敵意に反応する防犯装置の役目くらいしかなかつたのだつたか。

他人の屋敷ながら、開け放たれた門に警報にしかならない魔術結界。それらは防犯的にどうなのかしら？ と、詮無き心配をしてしまう。

玄関まで来たので横の呼び鈴を押すとピンポンと音が聞こえた。

私は気配遮断の魔術を使っているし、アーチャーもセイバーもお互いに警戒してて余裕がなかつたのかもしれない。が、まさか呼び鈴を押す事になるとは思っていないなかつた。外壁に達した段階でセイバー辺りがくると思つただけだ。

耳を澄ませば複数の話し声がある。「こんな時間に来客？」「マスター、私が」「大丈夫だつて、セイバー」と言つた感じの会話が聞こえる。遠坂凜とセイバーは警戒しているようだが、衛宮士郎は予想以上に暢気と言うかお人よしと言うか、現状を理解してないと言うか。アレが将来アーチャーになるのだから信じられない。

少し玄関前で待っているとガラガラと入り口が開かれた。

「あゝ、どちら様、でしょうか？」

出てきた少年はフードを被った見知らぬ相手に戸惑っているようだ。戸惑う位なら出る前に警戒心を持って欲しい。年長者としてこの少年の将来を、アーチャーとは別の意味で心配になってしまう。

普通に玄関で出迎えられるのを想像してなかった私も、実は対応に悩んでいた。もっとこう「何しに来たキャスター！」みたいなやり取りを想像していたのに。それをちよつとだけ楽しみにしていたのに。

仕方なくフードを脱いで顔を露にして、少年——衛宮士郎へと向き直る。

「私はキャスターのサーヴァントよ。セイバーのマスター、アーチャーのマスターを含めて話し合いをしたいから、中へ入れてくれるかしら？」

出された湯飲みへと手を伸ばし、熱が残るお茶で喉を潤す。ホツとする日本のお茶の味に感心し、ふうくとゆっくり息を吐く。

「セイバー、アーチャー、いつまでも睨まないでくれるかしら」

衛宮士郎に居間へと案内されてからずっと、2騎のサーヴァントは私を睨みつけている。セイバーのほうは自らのマスターが迎え入れたからか多少はましなのだけど……。アーチャーが射殺さんばかりの視線で見ってきます。

見た目は平然としている私に警戒しているのは分かる。でもそんなに睨まないでもいいと思う。私が冷静に策略を巡らしに来たとも思っているのだろうか。現在進行形で内心ビクビクしているのを誤魔化す為に、お茶を飲んだだけなのよ。

ピリピリした空気の中、返答したのはサーヴアントの二人ではなかった。

「何言ってるのよ。睨まれるのが嫌なら敵地に来なければいいじゃない」

「あら、何故貴女が我が物顔で言うのかしら。ここはセイバーのマスターの拠点であつて貴女の拠点ではないでしょう？　セイバーのマスターと敵対していない以上、ここは敵地ではないわね。違うかしら？　アーチャーのマスター」

「お生憎様、セイバーのマスターとは同盟を結んでいるから、ここは私の拠点でもあるのよ」

「俺と遠坂つて同盟を結んだっけ？」

「さつき令呪を使ってセイバーを止めてくれた借りは返すつて言つたでしょ。録に知識も無い衛宮君に、同盟つて形で返してあげるわよ」

「待て凜。こんな半端な小僧と同盟など」

私を蚊帳の外にして話し合いが始まった。切っ掛けは私への売り言葉に買い言葉でしようけど、どうやらアーチャー陣営とセイバー陣営は同盟を結ぶ事になったようだ。マスターの知識不足を認めているのか、セイバーに否はないようね。アーチャーは盛大

に不満を言っているが。

途中から話し合いと言うか、アーチャーと高校生二人の言い合いになっていた。拒否したのは理解できるが、アーチャーは年長者としての態度ではなく大人気ない気がする。とは言い衛宮士郎の事に関しては冷静でいられないか。

暇になった私は同じく暇そうなセイバーを見た。絹糸のような流れる金髪に、陶器のような白い肌、整った顔は少女の面影を残しつつも完成された女性の美貌。さすがメインヒロイン。警戒したままの鎧姿ではなく、可愛い服装をさせたいわ、と自然と思わせられる。

そんな感じで、ついじつくり見ていたらセイバーに再び睨まれた。反射的に視線を外す。セイバーの視線は明らかに「何を企んでいる」と探るような物だった。黒やピンクのドレスを着たセイバーの姿を想像していたとバレたら、斬りかかられる気がする。

「さて、同盟も決まった事だし、後は貴女の目的をキリキリ吐いて貰うわよ。キヤスター」

どうやら話し合いは赤い悪魔の勝利で終わったようだ。当然と言えば当然か。アーチャーが遠坂凛に勝てる訳はないわよね。

セイバーに直感で妄想がバレない内に私が来た目的を話そうと思うが——その前に。

「セイバーのマスター、先に血だらけ泥だらけで穴があいた服を着替えたらどう？」

「ん？ あ、ああ、そう言えば色々ありすぎて気にしてなかったが、酷い格好だな。悪い、ちよつと着替えてくる」

見た目の酷さを指摘すると、ランサーに襲われた姿のままだった衛宮士郎は立ち上がり着替えに行こうとした。制服の上着は穴が開いている上に血がたっぷりついている。あれでは学校へ着て行けないでしょうね。

「ちよつと待ちなさい。セイバーのマスター」

「ん？」

「上着をよこしなさい」

「な、なんで」

「いいから」

立ち上がり、どうしてか見るからに動揺した衛宮士郎から制服の上着を受け取る。その上着に修復の魔術をかけ新品同様——とはいかないが、ランサーに襲われる前の状態へと戻した。予備はあるのでしようけど、制服つて地味に高いから直せるなら直したほうがいいわよね。

「これでいいわね。はい」

「あ、ああ、ありがとう……」

上着を受け取った衛宮士郎は居間を出て行った。簡単な修復の魔術になんとか驚い

ていたが……。そうか、彼は現在は強化しか祿に使えない素人同然の魔術師だったわね。あまり見た事も無い他の魔術に驚くのも当然か。

衛宮士郎が驚いた理由に納得して座ろうとしたら、なんとも奇妙な目で3人から見られてる事に気づく。

「な、何よっ？」

問いかけても返事は無く、衛宮士郎が戻るまで居心地の悪い不思議な視線に晒され続けた。

家主が着替えて戻ると、遠坂凜がさあ話せと詰め寄ってきたが問題が残っていた。セイバーのマスターである衛宮士郎の知識不足。ランサーに襲われ、セイバーを召喚し、同級生が尋ねてきて、怪しい女性までやって来た。現状に魔術師が関わっていると認識してはいるようだが、実態は聖杯戦争とはなんぞや？ レベルの状態。そんな彼に話をした所で無駄であると判断。

「まずはセイバーのマスターに聖杯戦争について説明する事からかしらね」

「いや、その前にやる事がある」

外道神父の代わりに教えてあげようとしたのだが、当の本人から待ったがかかる。

「まずは自己紹介からだろ」

「あ、衛宮君、貴方が本当に聖杯戦争について知らないってわかったわ」

「どういう意味だ。遠坂」

顔に手を当てため息をつく遠坂凜。最優のセイバーを召喚した癖にあまりの無知っぷりに呆れ、危機感のない人の良さにさらに呆れたと言うところか。

彼女が呆れるのもわかるけど、まあそれはそれとして。

「生前はコルキスの王女であったメディアと申します。此度の聖杯戦争ではキャスターのクラスで現界しました。以後お見知りおきを」

「あ、これはご丁寧に。えっと、この家の家主でセイバーのマスター？ の衛宮士郎です」

「ちよつと！ 衛宮君はまだしも何であんたが自己紹介してんのよ！」

「自己紹介は対人関係の基本でしょう？ 何かおかしかったかしら？」

「おかしいでしょ！ サーヴァントが自分から正体バラしてどうすんのよ！」

礼をして自己紹介すると赤い悪魔がキレた。

「遠坂、何を怒ってるんだ」

「何を怒っているかですって！ いいわ！ 無知な衛宮君にもわかる様に教えてあげる

わよー！」

そこから遠坂凜が聖杯戦争についての説明を始めた。私が説明しようと思ったが、彼女に任せていれば良さそうだ。怒鳴られながら説明されて怯えている衛宮士郎が、若干可哀想な気もしたが気にしない事にしよう。

それよりも先程からセイバーがそわそわ落ち着きなく視線を彷徨わせているのが気になる。睨みや警戒の威圧が消えているので声を掛けることにした。

「セイバー、何かあったのかしら？」

「む、キャスター、貴女が名乗った以上、私も名乗るのが礼儀かと思いい悩んでいました」「ふん、下らんな。勝手に一方的に名乗ったのだ。礼儀も何もあるまい」

「そうね。アーチャーの言うとおり私が勝手に名乗ったんだし、気にしなくて良いんじゃないかしら」

「む……」

「しかし……」

意見に同意すると顔を顰めるアーチャー。皮肉のつもりだったのでしょうけど、言った事を相手が認めて後悔するなら言わなければいいのに。根が善人なのが透けて見える。

セイバーはセイバーで未だ悩んでいるようだ。名乗った返礼に名乗ろうとするような良い子で、良くもまあ冷徹な王を演じてたわね。部下に人の心がわからないと言われ

たらしいが、悩む姿は可愛くてとても人間らしく見える。

名乗った事で警戒を解かれたのか、アーチャーからの威圧感もほとんどなくなった。おかげでこの家に来てやつと落ち着いてお茶が飲める。あゝ、美味しい。

「ちよつと、何寛いでんよ。聖杯戦争中に敵地で寛ぐサーヴァントが居るなんて信じられないわね」

説明を終えたららしい遠坂凜が、首を横に振りお手上げのポーズまでして感想を述べてくれる。この娘、何気にリアクションが大げさで面白い。

「それで、セイバーのマスターは現状を理解したのかしら？」

「ああ、聖杯戦争について一応理解はした。だから先に言っておく。俺を助けてくれたセイバーが聖杯を望むなら手助けをしたい。けど殺し合いをして聖杯を奪い合う。そんな事は認められない」

実にらしい事を言う。聖杯を求めるセイバーの助けはしたいが殺し合いは認めない。聖杯を『普通に』顕現させるにはサーヴァントを殺す必要があるのだけど、そこまで説明されていないのかもしれない。どちらにせよ良い所だけを取った理想論。アーチャーに「甘ちゃん」などと馬鹿にされている。

まあ突然巻き込まれた彼に、すぐに清濁全てを理解しろとは思わない。ランサーに襲われて数時間しか経っていないし、きつと時間が必要でしょう。

「セイバーのマスターの考えはわかりました。今の言葉を聞いても、アーチャーのマスターは同盟関係を維持するのかしら？」

「ええ、とりあえずの同盟関係とは言え反故にする気はないわ」

遠坂凜の返答は人としては及第点。けれど魔術師としては落第点。この娘は優秀だけど、やはり甘すぎる。父親が亡くなった影響で魔術師の常識に歪まされる事なく、一般的な道徳心を持ちながら模範的な魔術の修練を積んできたのだろう。彼女の師でもあり兄弟子の言峰綺礼は、意外と人を育てるのに向いているのかもしれない。

「そ、れ、で、キャスター、一体何しに来たのか話してもらおうわよ」
「もちろん構わないわ」

遠坂凜が仕切っているのに疑問は感じるが、言ってる事は当然の要求である。なので私は彼らへと改めて向き直り、ここへ来た目的を口にする。

「セイバーとアーチャーに、私と同盟を結んで欲しくてきたのよ」

両手を重ねて顔を少し斜めにしつつ、笑顔で言った私の言葉に4人が4人とも驚いた顔をした。敵意なく他者の陣営に来てやる事なんて、同盟を結ぶくらいのもものだろうに。予期されていると思っていた言葉に驚かれて、内心で私まで驚いてしまう。

残念な物を見るような視線で、どうして驚いているのかしらね……？

第三話

夜の街を静かに駆ける。

衛宮邸での同盟の交渉が決裂し、すぐさま私は別の用件で行動していた。『予定通り』の交渉決裂だったので心中に思う所はなく、むしろ微かな笑みを浮かべながら。

元々セイバーやアーチャーと現時点で同盟を結ぶ利はない。召喚されたばかりの聖杯を強く欲する今のセイバーと、復讐の為に聖杯を求める私では同盟が成り立つはずがない。

決裂を決定的にしたのも、個人的な欲望で聖杯を欲していると言った私の発言だった。それにセイバーが反応し「大義すらなく、己の欲望を満たす為に聖杯を求める貴女とは相容れない」と拒絶された。

あの時の真つ直ぐ私を見たセイバーの揺るがぬ瞳。それを少しだけ哀れに思う。彼女が望むのは過去の改変。故国の救済。その想い自体は素晴らしい物だし、否定する気はない。けれどカムランの丘で死に囚われている彼女は理解しているのだろうか。過去を改変すると言う意味を。

個人の欲望で聖杯を求める私が、彼女の願いの良し悪しを言う資格はないわね。彼ら

に顔を見せ話し合いを行った事で良しとしましょう。セイバーを救うのは私の役目ではないのだから。彼女の事は正義の味方達に期待しましょう。

セイバーに対する思いを心の中から追い出し、思考を冷静に沈ませ表情を消している。ここからはあの子達に合わせた善人ではなく、策謀巡らすキャスターのサーヴァントとしての時間の始まり。

身の程を知らぬ愚者に鉄槌を下さなくては。

市内に展開させていた魔術陣は収集する対象を選別する。それは同時に策敵の役割も果たし、先程サーヴァントらしき者がそれにかかったのだ。

感知した現場近くでビルの上から路地裏を見れば、意識がない女性を持ち上げている紫のサーヴァントが目に入った。傍らには本を持った高校生の少年が居る。

「やはり魂喰いを始めたわね」

人払いの魔術も使わず——正確には使えず——魔術の秘匿を考えない愚かな行為。最低限の魔術師としての心得もなく、さりとて人としての倫理の欠片も見受けられない行い。

紫のサーヴァント、ライダーが抱える女性を下卑た視線で見ながら楽しそうに嗤うマ

スターらしき少年。その姿は、遠坂凜や衛宮士郎に比べなんと醜いことか。

ライダーの強化のついでに自分の趣味を満たそうとしているのだろう。狙うのはか弱き女。弱い者を自分ではない者の力で屈服させ悦に浸る。女を下に見ている、いえ、自分を愉しませる道具くらいにしか思っていないのでしょうか。最低な気分にしてくれるわね。

私が使った人払いの魔術で路地裏に繋がる大通りからも人が消えたのを確認し、死を恐れぬ兵士の群れの召喚を行う。

「お出でなさい。魂無き戦士達よ」

遠隔魔術により路地裏に多数の骸骨の戦士達が出現した。それを見た瞬間、慌てふためくライダーのマスター。その様子を詳細に知る為に集音の魔術を使い、彼らの声を拾う。

「ライダー！ そんな奴どうでもいいから僕を守れ！ ちくしょう！ 折角これからつて時に！」

ライダーは抱えていた女性を落とすと返事もせず、竜牙兵達をなぎ倒し始めた。さすがと言うべきか、壁を跳躍して杭と鎖を使い舞う姿は見事なものだ。

「ふ、は、あははは、なんだ、数だけ居て大した事ないじゃないか。良いぞライダー。僕の遊びを邪魔してくれた奴が後悔するようにどんどん倒せ」

彼らを囲んでいる竜牙兵が脅威ではないと思つたのか、少年——間桐慎二は笑い声をあげる。突如現れた竜牙兵に動揺し、ライダーの脅威とならぬとわかれば安心する。彼の反応は実にわかり易く滑稽に見えた。

そもそもあの竜牙兵はモドキとも言うべき存在。現代では竜の牙は手に入らず、本来の竜牙兵ではない。それでも武道を修めた一般人はもとより、数が居れば魔術師や代行者にすら脅威となるのだが、英雄達から姉妹を守り続けたライダーの脅威にはなりえない。

路地裏に居た竜牙兵もライダーによつて倒され残り数体となる。

「ビビらせやがって、もう終わりか。おい！ 何処のどいつだか知らないけど、そろそろ姿を現したらどうだ。奇襲した癖に返り討ちに遭う雑魚サーヴァントが」

奇襲のつもりも返り討ちに遭う予定もないのだけれど、中々に面白い事を言ってくれる彼の要望に応え、追加の竜牙兵を作成し彼らの周辺へと出現させる。

出現した竜牙兵は再び同じようにライダーに蹂躪されるが——。

「ど、どンドン増えてるじゃないか。ライダー！ 手を抜くんじゃない！」

1体倒されれば2体、2体倒されれば4体。倒す以上に数を増やしていく竜牙兵の群れに向かつて叫ぶ間桐慎二。恐怖からか、背後も見ずにライダーから離れ下がった彼の背中を漆黒の剣が軽く掠めた。ライダーが彼の動きを察知して、すぐに対応したので傷

は負っていないようだけれど。

「ラ、ライダアアア、何をやってるんだ！ 僕を守れ！ この役立たずが！」

「シンジ、ここは狭くて危険です。脱出します」

半狂乱になって叫ぶ間桐慎二を無視して、ライダーが淡々と喋り伝えた。彼をマスタールと呼ばない辺りに、彼女の在り方がよくわかる。彼女にとつて所詮彼は本に写した偽りの令呪を持っているだけの、本来の主を危険から遠ざける為のデコイに過ぎないのでしょうね。

ライダーは間桐慎二を抱え跳躍し、壁を飛ぶように蹴つて路地裏を脱出した。そして路地裏の先、人払い済みの大通りに出たが。

「これは……」

ライダーが大通りの空いた場所で呟いた。その目に映るは道を埋め尽くす骸骨の大軍。進む先はなく、背後の路地裏からも溢れ出る意思無き兵達。

「な、なんだよ。なんなんだよこれは！ ライダー、お前がのろまだからこんな事になつたんだぞ！」

逃げ道など最初からなかった事に漸く気づいたのでしよう。痲癩を起こした間桐慎二が罵詈雑言をライダーに浴びせている。その口汚さに、私は息を吐いて自分の体を抱きしめる。思わず壊したくなるのを我慢する為。

ライダーが襲い来る竜牙兵から守る間も、間桐慎二はわめき散らしている。自らを守護するサーヴァントに感謝の念が一欠けらも無いのか、それとも自分とは比べ物にならぬほどの力を持つライダーを下にでも見ているのか、彼のブレない姿に少しだけ感心してしまふ。良い意味ではないけど。

踊る道化を見ているのも飽きてきた。そろそろ私も動く事にしましょう。程よく竜牙兵が倒されたおかげで空いたスペースへと転移し、二人へと声を掛ける。

「ふふ、ライダー、随分と愉快なマスターのよう——」

正面に現れた私の言葉が終わる前に、ライダーは迷う事無く飛び込み私の胸へ杭を突き刺した。言葉を中断された無礼よりも、その躊躇しない容赦のなさに惚れ惚れする。

杭を突き刺された私は、そつと彼女だけに聞こえる声で囁き、その後光の粒子となつて淡雪のように姿を消す。

「は、はは、馬鹿が、有利だからつてわざわざ出てくるからやられるのさ」

「誰がやられたのかしら？」

「なっ!!? なんて居るんだよ、お前! 今死んだじゃないか!」

消滅したはずの私が後ろから声をかけると、間桐慎二が口やかましく叫びだす。ただの実体を持った幻影だっただけの話なのだけど、魔術師ではない彼には理解できないのだろう。その彼を守るようにライダーが私と相對した。

「シンジ、退路を開きます。私はここであのサーヴァントを抑えるので先に撤退を」

言うが早いか、ライダーは眼帯を外し私とは正反対の後方へ向けて魔眼の力を解放した。彼女の宝具である『自己封印・暗黒神殿』で封印されていた石化の魔眼・キュベレイは、悉く竜牙兵達を動かぬ石像へと変えていく。

ライダーが作った石の道を、命欲しさか間桐慎二は脇目も振らず走りぬけ逃げて行く

——訂正、しつかり脇目を振って走っていた。

「ライダーア——！ そのムカツクサーヴァントを絶対に倒せ！ ズタズタにして苦しめてからな！」

逃げる最中にすら戯言を言う彼の姿に、つきたくもないため息をついてしまう。恐怖を感じているはずだろうに、それでもめげずに遠吠えを残すとは。

間桐慎二が歪んだのは彼自身の問題ではなく、育った環境が何よりも問題だったからでしょう。人ではない下劣な蟲が居る家で育ったのだから歪まないはずがない。己が血筋の者でも弄び喰らう絶対的強者が居るからこそ、彼は自分より弱い者へと心の闇を向けていたのだろう。

同情はするが、だからと言って被害者を思えば許せる訳もない。だから命の危機を感じさせ恐怖を与えた。これに懲りて聖杯戦争に参加するなどと言う馬鹿な考えを放棄し、命の大切さを知って少しでも他人に対して優しくなってくれと嬉しいのだけれど

……。走り去る彼の背中を見ると無駄に終わりそうで、ため息が再び出てしまう。

世の無常を感じる私の耳に ジャリッツと鎖が擦れる音が聞こえた。間桐慎二から眼を離し、眼帯をつけ直したライダーへ意識を向ける。

「ライダー、少し待っててくれるかしら」

警戒したままのライダーに背を向けて、こつそり竜牙兵に保護させていた女性のもとへと歩いていく。軽く状態を調べると身体の傷はなく、魔力欠乏症に陥っているだけだとわかる。これなら簡単に治せそうね。

「すぐにこの娘の治療をするから、終わるまで待ってて頂戴」

重く感じる体に鞭打ち、柳洞寺へ続く石段を登る。聖杯戦争初日から慣れない事をした影響か、肉体的疲労よりも精神的疲労で消耗している感じが。

「随分と疲れているようだが、童達との交渉はそれほど苦労したか」

山門へ辿り着くと実体化したアサシンが労ってくる。

「坊や達との話し合いは最善の結果ではなかったけれど、予定通りだったから苦労はしてないわよ」

「それはめでたい。魔術の腕だけではなく子守の才能もあつたと言う事か。大した多才

ぶりよな、キャスター」

労つてくれたと思つたのは勘違いだった。いつも通り、平時と変わらずに私をからかう気のような。疲れている時にからかわれると、さすがに少しだけイラつとする。

「自分のマスターに軽口を叩けるほど暇で良かったわねえ。アサシン」

「いやいや、今宵は珍しく客人が訪ねて来てな」

アサシンの一言にふざけていた雰囲気改める。

「バーサーカー………だったら貴方が無事だとは思えないから、ランサーかしら？」

「おおよ。見事な槍捌きの武士だった。『お互い』に全力が出せぬとは言え、気持ちの良
い斬り合いであつたな」

整つた顔を目を引くような笑顔にして、斬り合いとやりに思いを馳せるアサシン。人
外の技であろうランサーの槍捌きを楽しそうに語り、おまけに斬り合いが気持ち良いと
のたまう。

私の知つている侍ならば、己を殺し主に仕え、もつと謙虚な態度で報告しそうなもの
のだけれど。まるで好きな物を語る子供のような報告を聞いて、体から力が抜けてい
く。

「はあ、貴方が斬り合い大好きなのはわかつたわ。報告はそれだけ？」

「うむ」

攻めて来たランサーは良くやるものだ。今日だけでアーチャー、セイバーと戦った後にアサシンとまで戦ったのだから。きつとアサシンと同じく戦闘大好きそうなランサーも、今頃は良い死合いだったとか思っていそうだ。

「お主が疲れていた理由は後ほど聞こう。先に宗一郎に報告するのであろう?」

「そうね。その前に一つ忠告するわ。私のマスターの事を呼び捨てにはしない事ね」

「おお、怖い怖い。女の嫉妬は恐ろしいものよ」

「アサシン」

私が睨むと「冗談だ」と笑いながら返してくる。冗談なのは最初からわかっているのに、何一つ弁明になっていない。何時でも私をからかおうとするこの男には何を言っても無駄なのかもしれない。

そう諦めてアサシンを放置して山門を通ろうとすると、やや軽い口調ではあるが真剣な声が聞こえた。

「慣れぬ事で疲れているのやもしれぬが、今のよういつもの調子で行く事だ。宗一郎を心配させるのはお主の本意ではあるまい」

聖杯戦争が始まって初めての本格的な戦闘行為。ライダーとのいざこざで精神的に少し参っているのを悟られていたらしい。

私は王女であり魔術師だった。けれどセイバーのように軍を率いる王族ではなかつ

た。アーチャーのように魔術を使い戦う戦闘者でもなかった。女神の洗脳中に戦いに巻き込まれた事はあつたが、生来の私は戦いに向いているとは言い難い。

そこを見抜かれアサシンに心配をかけてしまったようだ。いつも私をからかう不真面目な男に心の中で感謝を――

「魔女と伝わる女狐が、実は初心な生娘であつたと知られては色々とまずかろう」

――するのは見送る事にしましょうか。

自室の扉を静かに開けると、案の定マスターが起きて待つていた。姿勢よく正座をする姿は、まるで瞑想をしているようだ。

「戻つたか」

「はい、マスター」

無駄な事は言わない最低限の言葉だけの会話。それが嫌ではないのは、葛木宗一郎と言う人が持つ不思議な魅力なのだろう。

「まずはセイバー、アーチャーとの同盟ですが、予想通り決裂しました」

「ふむ」

「ですが敵対する意志を示さず話し合いをした事で、彼らのマスターは『キャスターの陣

「營』に対して戦闘での排除は行わないでしょう。最良ではありませんでしたが上々の結果かと」

自分の手を汚した事がない遠坂凛と衛宮士郎は非情に成り切れない。サーヴァントの二人がもし自分のマスターの許可なく私やマスターを排除すれば、お人好しの彼らとは決定的に関係が破綻するだろう。なので大丈夫だとは思うが。

「ただ状況次第ではセイバーやアーチャーが暴走し、狙ってくる可能性もあります。ですので、私が渡した護符を手放す事はないようお願いします」

「わかった。確認だが、衛宮や遠坂に関係者だと疑われた場合はお前のマスターだと話して構わんのだな？」

「はい、包み隠さず話して下さい」

彼らに対しては話し合う事が最も安全な対策になる。安全と言う意味ではマスターは柳洞寺に籠る手もあるが、下手に今そうしてしまうと、自分から怪しいと言うのと変わらない。敵対する企みがあると疑われるおまけつきで。

セイバーとアーチャー陣営との交渉の結果を報告し終えたので、次の報告を行う。

「それと今夜ライダーと接触しました」

「そこらは当初の予定通り行うのだな？」

「はい、時が過ぎれば危険が増すので、明晩行おうかと」

ライダーと言うより間桐慎二の行動がまず過ぎる。逃げる時の様子からしても懲りた気配は無い。それに私の望みを叶える為にも『間桐』は放置しておけない。最悪、遠坂凛に衛宮士郎と敵対する事になったとしてもだ。

「私からの報告は以上ですが、マスターからは何かございますか？」

「いや、私からは特別何かは無い」

報告が終わり静寂が訪れる。その静かな間は私の心の罪悪感を刺激した。言う必要はなかったかもしれない言葉。言った所で現状が変わる訳でもないのに言ってしまった。

「私の都合で巻き込んでしまったマスターの生活は可能な限り守ります。ですので、マスターは普段通りの生活を続けて下さい」

私に好都合なマスターの当てがなかったから巻き込んでしまったマスターの為に、私が出る事は出来得る限り変わらぬようにマスターの日常を守る事だけ。勝手な自己満足の自己弁護だったのだけど、意外にもマスターから色好い言葉が返ってきた。

「それは助かる」

「助かる、ですか？」

「うむ。今進路の相談を何人かの生徒から受けていてな。それを早めに解決させておきたい」

自分の身命の問題よりも生徒の進路の心配をする事に普通ならば驚くのでしよう。けれど葛木宗一郎と言う人は殺人鬼の成れの果て、抜け殻だと知っている私は驚かなかった。彼は自らの命に然したる価値を見出していない。そんなマスターの在り方に寂しさを覚える。

根底にある理由に目を瞑り、誰よりも誠実なマスターへ精一杯の笑顔を向ける。

「そうですね。マスターは変わらず教師として過ごしてください。生徒を導き守る教師として」

もしも私が討たれたとしても、せめてマスターだけは変わらぬ日常を送れるように祈りを籠めて。

第四話

懐かしい情景。

国を追われてから何度も見た景色。

余計な記憶があるせいで、王女の立場や女性としての振る舞いが出来ず苦悩した。

そうした私の境遇を知り、加護と魔術を授けてくれた女神ヘカテー。

良い姉ではなかったろうに、それでも私に優しくかった弟。

苦労はあつたけど楽しかった日々。

しかし一人の男の姿と共に、その光景が崩れ壊れていく。

全てを捨てて、私は血塗られた道を進む。

見たくもないモノが目の前を通り抜ける。

それは正しく悪夢で、忘れられぬ過去の出来事。

女神ヘラの呪いは、人ならざる英霊と言う名の世界の奴隷になった今も私を離さな

かった。

休日だと言うのに学校へと向かうマスターを見送り、その後には日中にするべき事をこなししていく。具体的に言うとは掃除に洗濯等の家事をしなくてはいけない。居候として出来る範囲で、マスターの生活を支える重要な事ではあるのだけれど。

「なんかこう、こんな事してて良いのかしら？　って気分になるのよねえ」

「だからと言って、日中まで気を張っていても仕方あるまい」

「そうなんだけど」

早々に家事を終えてアサシンに愚痴を漏らす。私は柳洞寺の居候なので家事手伝いくらいしかやる事が無い。神祕の秘匿を考えると聖杯戦争関連の行動は日中には行えない。準備くらいは出来るが、それにも限度がある。つまり有り体に言えば暇なのだ。

「山門付近から動けない貴方の気持ち、なんとなく分かるわね」

「気持ちが変わると言うなら、即刻その態度を改めてほしいものだが」

「良いじゃないの。貴方がお望みの他愛無い雑談でしょう？　付き合いなさいな」

マスターに愚痴を言つて余計な負担をさせる訳には行かない。かと言つて一成君や零観さんはもちろん、他の柳洞寺の人達に愚痴を言える訳が無い。彼らは一般人なのだから。

「はあ、気軽に愚痴を言える相手が貴方しか居ないのよねえ」

「ため息をつくほど暇なら街へでも散策に出たらどうだ。ここで何もせずに居るよりも

良かろう」

陣地作成を行い有利な神殿内に籠るのが定石のキャスターのサーヴァントに、散策に出るとは何を言ってるんだか。でもまあ、今は日が高く昇っているし。

「そうねえ。生活用品で欲しい物もあるし、新都にでも出かけてみましょうか」
疲れている雰囲気のアサシンを、愚痴につき合わせても可哀想ですしね。

柳洞寺付近のバス停で待っていると時間通りに新都行きのバスが来た。やって来たバスへと乗り込み、車内の椅子に座り流れる景色を眺める。

情緒と歴史を感じさせる建物が建ち並び、合間に見える木々が自然との調和を感じさせる。私の古い記憶にある懐かしい日本そのもの。当たり前的事ではあるが、人が住んでいる事を実感させられ暖かさと少しだけの寂しさが湧いてくる。

何個かのバス停に停車した後、バスは大きな川の上を通る橋へと入る。冬木大橋——
——人の営みが続き、技術が継承され磨がれ、奇跡に頼らずに作られた巨大な橋。力強く深山町と新都を繋ぐ大橋は、今を生きる人々の偉業のように思える。

場所を深山町から新都へと移したバスからの眺めは、綺麗な装飾がされた街並みに変わった。大地から生えるビル群は見事な物で、これはこれで人の生活を感じさせる。強

大なる自然にすら負けぬと言うような、頼もしきすら覚える新都の風景。似て非なるそれに懐かしい日常を思い出す。

バスが新都の中央付近に辿り着くと、私を含めた乗客すべてが降車する。

車内から外に出ると雑多な街の空気が鼻腔をくすぐる。古代には感じられなかった機械的な匂い。これを穢れと嫌う魔術師は少なくないでしょうけど、私は嫌いではなかった。別の場所だとわかつていても、心のどこかで帰ってきたと思えるから。

「気晴らしに来て感傷に浸っては本末転倒ね」

傷を癒す望郷の想いに耽るのは魅惑的だけど、その先に得る物は無いと思考の外に退ける。折角アサシンに勧められておしゃれをして、寒さにも負けずにスカート姿なのだ。諸々の感傷には蓋を閉じ、今を楽しもう。

「良いお店があるといいんだけど」

ふうと息を吐き気分を変えて、見知らぬ懐かしい街中をブーツで靴音を鳴らしながら歩き出した。

新都でショッピングを堪能して買った戦利品を揺らし、散歩がてら徒歩で帰路についていた。正午を過ぎ時計の短針が右に傾いた頃、マウント深山商店街へと足が伸びた私

の眼に奇妙な光景が目に入った。

「なんであの娘がここに居るのかしら……?」

商店街の中を物珍しそうに歩く銀髪の少女。商店街の人達と軽い談笑をしつつ、楽しそうにお店を見て回っていた。注視すればわかるが、傍らに霊体化した巨軀の男を引き連れて。

場違いなモノを見てどうしようかと迷って居たら、銀の少女はあるお店のディスプレイを熱心に見ていた。じくとガラスの先の商品を見る姿は見た目相応の可愛い少女に見える。

見てしまったものは仕方がないので、とりあえず声を掛ける事にする。彼女には話した事もあったので丁度良い機会かもしれない。そう思う事にした。

霊体化してても存在感があり、既に私を警戒しているバーサーカーに軽く頭を下げ手を振り警戒を解く。……警戒、解けてるわよね? 一応生前の知り合いなのだから大丈夫だと信じたい。

ゆつくり歩き無事に少女の近くまで来れた私は、意識して大きく息を吸ってから声を掛けた。

「ソレに興味があるなら一緒にお茶でもいかがかしら? バーサーカーのマスター、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

私に気づかぬほど熱心に見ていたのか、振り返った少女は実に可愛らしく驚いていた。

「感謝するわ。キャスター」

喫茶店に入って席に座り注文を終えたイリヤスフィールが、優雅にお礼を言ってきた。冬木の街を観光に来た彼女はどうかやらお金を持つてなかったらしく、興味はあつたが払う対価が無く困っていたようだ。

「どういたしました。でも良かったのかしら？ バーサーカーを下げてしまつて」

「問題ないわ。仮にも魔術師のサーヴァントの貴女が、場を弁えず愚かな真似をするはずが無いもの。それにバーサーカーが居たら貴女が怖がつてしまふでしょ？」

イリヤスフィールは私をキャスターのサーヴァントだと一目で見抜き、お茶の誘いを受けると敵意が無い証明としてバーサーカーを自分の傍から遠ざけた。私が魔術師だから日中は大人しくするだろうと確信している——と言うより、これは余裕でしょうね。自分のサーヴァントがキャスター風情には負けないという。

いざとなれば令呪で呼べばよいし、自身も小聖杯の魔術師としての自信があるのでしよう。事実、今回の聖杯戦争での最高のマスターであるのは間違いない。

侮られているのでしようけど、バーサーカーことヘラクレスを知っているので納得してしまふ。何せ生前の彼は大地を動かし山を砕き、魔獣を素手で屠るような人だったのだ。私のような現代と比べ物にならぬ魔術師が居た時代の英雄。知っているからこそ苦手意識というか、生前よりは弱体化されていたとしても勝てる気がしない。

「気を使っていただいて感謝するわ」

「素直に認めるの？ バーサーカーに敵わないって」

「ええ、彼の相手は私では分が悪いわね」

余裕ある笑みからポカンとした表情に変わる。私が認めないでも思っていたのかしら。1対1であれば、セイバーやアーチャーすら圧倒して屠る相手なのだ。虚勢を張る気も起きない。まあ対策が無いわけではないけど。

「ふくん。なら貴女は後回しにしてあげるわ。セイバーのマスターを殺した後にしてあげる」

「後回しなのは嬉しいけど……」

やはりイリヤスフィールは憎しみをもつて衛宮士郎を殺そうとしているのね。

雪に包まれた古城で帰らぬ両親を待ち続けた少女。愛を知らぬホームクルスであったなら憎しみを抱かなかつたでしょう。でも彼女は知っている。幼き日に一緒に遊んだ父の愛を。夫と娘の為に命を捨てた母の愛を。

私が何もせずとも、雪の牢獄から出て冬木の町へ来た彼女は時を経れば自然と優しくなっていく。自らの母のように家族の為に、義弟の為にその身を犠牲にするくらいに。そんな彼女だからこそ伝えたいと思う。ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンによって歪められた情報ではなく、私の知っている二人の本当の想いを。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。貴女に伝えたい事があるわ」

「何かしら？ 命乞いなら——」

「貴女の両親についての真実を」

言葉を飲み込み黙った彼女は何を思うのか。怒りも悲しみも見せない無表情。それは両親を拒絶する顔ではなく、自分の心を守る無貌の仮面に見えた。

「知って欲しいの。衛宮切嗣とアイリスフィール・フォン・アインツベルンがどれだけ貴女を愛していたかを」

銀の姫君に語りましょう。娘を愛する夫婦が命をかけて挑んだ戦い。Zeroの物語を。

聖杯の穢れを含め、知る限りの第4次聖杯戦争での衛宮切嗣の事を話した。戦いが終わった後の衛宮士郎との出会いも。愛する娘に会う為に、アンリマユの呪いで蝕まれる

体を引き摺りながらアインツベルンに挑んだ事も。

母親のアイリスフィールが聖杯と化す苦痛の中であっても、娘の為に身を犠牲にする事は躊躇わなかった事。娘が幸せになれると信じて死んでいった事。

衛宮士郎が衛宮切嗣の後を継ぎ、正義の味方を目指している事も話した。彼が当時の出来事の影響で自分の幸せを考えられず、自己犠牲ですらない意識で他人の為に動く事も。幸せの中に居ても幸せを感じられないであろうと。

途中で注文した品が届いたが、それには一切眼をくれなかった。イリヤスフィールは最後まで特に言葉無く、感情を表に出す事無く聞いていた。

話し終わる頃には太陽は西に傾き、時刻は夕暮れへと移っていた。

「私が知っているのはこんな所かしらね」

「……」

「多少私の主観は入っているでしょうけど、偽りではないと保障するわ」

「別に嘘かどうかはいいわ。でも一つだけ。どうして私にその話を？」

どうして、か。

「私にもね、弟が居たのよ。良い子だったわ。だから義理とは言え姉弟の貴女達には仲良くして欲しいから、かしらね」

自分に来れなかった事をして欲しい思いもあるかもしれない。聖杯の器としての運

命を他人に押し付けられ、偽りの情報を与えられた彼女に同情したのかも知れない。でも何よりも単純に思ってしまう。

「それにね、真実を知らず誤解したまま姉弟が殺しあうなんて悲しいじゃない？ 嫌なのよ、そういうのは」

誰かが不幸になる様を見たくない。

最後に彼女は短く「そう」とだけ返事をした。銀の少女が何を想うのかはわからない。けれど出来れば彼女には私と違った道を進み、仲良く笑い合う未来を期待したい。

例えその身が聖杯の器であり、私が聖杯を求めているとしても。

夕暮れの中、柳洞寺の石段をゆっくりと登っていく。そして山門に辿り着くと案の定アサシンに色々と言われた。やれ何を買ってきたかの、女の面白い物は長いだのと。

そろそろ慣れてきたアサシンとの会話の途中で異変を感じた。マスターへ渡した護符、その中で身体を魔力で強化する護符の発動を。

私はすぐにローブ姿になり、柳洞寺に蓄えていた魔力を幾分か使い転移の魔術を展開させる。

「む、宗一郎の身に何事があったか」

「ええ、おそらく」

転移しようとする間にも別の護符が効力を発揮したのを感じた。身を守る為の守護の護符。先の護符とあわせて考えれば、マスターが戦闘を行い傷を負った可能性が大きい。

焦った私は強引に複数の魔術を発動させ、魔法にも等しい長距離の転移を擬似的に行った。

気をつけて行け——と転移間に聞こえたアサシンの声を耳に残し、転移後すぐに周りを見渡す。飛んだ先は閑散とした冬の雑木林。見通しが良いと言えない場所で、すぐにマスターを見つける事が出来たのは僥倖か。

しかしマスターの状況を知り顔を顰める事となる。何故なら上半身を雑木に預け、右腕を真っ赤に血に染め、頭からも血を流し意識を失っているようだったから。

「キャスター?」

マスターの様子に驚愕していた私の背に声がかけられた。声のする方へと振り向けば、マスターと同じように腕を負傷した様子の衛宮士郎と、彼を庇う様に立つ鎧姿が見えぬ何かを持つセイバーが居た。

それを見て私の感情が爆発する。

「セイバー、よくもマスターを！」

瞬時に複数の立体魔術陣を展開しセイバーへと向ける。

彼らの人柄を、願いを、在り方を知っているからこそ敵対しようとは思わなかった。出来れば手を結びたい、共に過ごしてみたいとさえ思っていた。だがそれが甘かったと思ひ知る。共に聖杯を求めめる存在。ならば敵対するしかなかったという事か。

自分の甘さに対する憤りを表すかのように、展開させた魔術陣から光が迸る。

「待て！ キャスター！ 私——」

魔力で彩られた破壊の奔流は、セイバーの言葉を遮り彼らへと襲い掛かった。

第五話

加減を考えずに放った魔力の光は一直線にセイバーへと向かう——が、光は彼女に当たると前に見えない壁に弾かれ、破壊の意志を示さずに露と消えてしまった。

今の攻撃で怯んだ様子しか見せないセイバーに思わず齒噛みする。

セイバークラスのサーヴァントは高い対魔力を誇り、並みの攻性魔術ではダメージを与えるどころか届きさえしない。大魔術級ではない咄嗟に放った魔術だったとは言え、目の当たりにすると知識以上の脅威を感じる。

しかし効果が無かった攻撃ではあったが、その光景を見て多少頭が冷えたので無駄ではなかった。魔術が利き難いセイバーと戦うと言うのに、激昂したままでは勝負にもならない。

冷えた頭で対策を考え実行する。

先程よりも格段に弱い魔術を複数同時展開。そして威力よりも数と速度を優先した魔術群を、直線的にはなくセイバーを避けるように曲げて彼女の背後へと狙い撃つ。するとセイバーは剣と体を盾に全ての攻撃を迎撃し始めた。

セイバーにとっては無視しても良い威力の攻性魔術だが、背後に居る衛宮士郎はそう

もいかない。強化と投影しか出来ない彼では防ぐことが出来ず、怪我を負っている今の状態では避けることも難しいはず。

私の意図通りにセイバーは自分のマスターを守る為に迎撃に徹する事になる。とは言え、これは彼女の行動を防御に専念させるだけの言わば牽制だ。倒す事は出来ない。けれど私の目的は別にあるので問題はない。セイバーが守りに徹している間にマスターへと近づき撤退するのが目的なのだ。

牽制を行いながらゆっくり後退してマスターへ近づく。本当は牽制などせず一息で近寄りたいが、セイバーが攻撃へ転じられる隙を作れば、それこそマスターか私が一息で斬られてしまう。今以上に下がる方へと意識が向けば、セイバーは『風王結界』を利用して加速で距離を詰めてくるだろう。

「待つてください、キャスター！　そこに倒れている男性が貴女のマスターだと言うのなら、私に戦闘の意志はありません！」

「戯言を！」

現にセイバーは私の魔術を防ぎながらも話す余裕がある。対して私はセイバーが襲つてこないか警戒して一言発するのが限界だ。

それにしてもセイバーの言葉に腹が立つ。マスターが怪我を負い気を失っている状況で戦闘の意思がないなどと。反射的に黒い気持ち湧き上がり、本気でセイバーを討

どうかと考えてしまう。1対1なら私が勝つのが難しくとも、お互いのマスターが傍にいる2対2の状況なら話は違う。セイバーを現状のように抑えつつ、魔術的に隙だらけの衛宮士郎に致死性の呪いでもかければ……。

黒い渴望を抱いていると、その対象である衛宮士郎が痛みに顔を歪ませながら立ち上がった。血が滴る右腕は激痛だろうに、そんな状態で何をするのかと警戒していると。「キャスター、葛木先生をやったのは俺達じゃない。それにセイバーが言うように戦うつもりが無いのも本当だ」

真っ直ぐ私を見てはつきりと敵対の意志がないと口にした。彼の言葉を聞いて私は戸惑ってしまう。状況を考えればマスターを傷つけたのは彼らだと思うが、それ以上に『あの衛宮士郎』が虚言を弄するはずがないと思ってしまった。そのせいで魔術の攻撃が途切れ致命的な隙が出来たのだけれど——セイバーは襲い掛かってくる事無く、敵意が無いのを示す為か腕を下げ鎧すらも消し去った。

それでも油断しないようにしていたが、衛宮士郎はあろう事かセイバーを一步下がらせ前に出た。色々と腑に落ちないが、その姿を見てさすがに私も警戒心を緩める。

「そう、貴方達に戦闘の意思がないのはわかりました。でも貴方達がマスターを傷つけたのではないとしたら、マスターは何故怪我を負っているのかしら？」

聖杯戦争に積極的なセイバーが、葛木宗一郎がマスターであると知って勝手に戦闘で

もしたのかしらね？」と、いくつかの可能性を考えていたら衛宮士郎は予想外の答えを返してきた。

「葛木先生は俺を助けてくれたんだ」

「……は？」

思ってもいなかった事を言われ間の抜けた声を出してしまう。にも関わらず、私を見る二人の眼はどこまでも真剣だった。

何故マスターが怪我をしていたか。衛宮士郎は余す所なく語ってくれた。

まず転移先の現在地だけれど、どうやらここは穂群原学園の裏の雑木林らしい。マスターは仕事なのでわかるが、何故衛宮士郎が休日なのに学校に居たかと言うと。

「あく、藤ねえ……って言ってもわからないか。とにかく知り合いに頼まれて弁当を届けに来たんだ」

だそうだ。きっと藤村大河に昼食の配達でも頼まれたのだろう。セイバーは一人で出歩くのは危険だと言う事で共をして、届けた後に校内が安全かどうか二人で見回っていたらしい。

そうしたセイバーの学校見学中に間桐慎二に出会い、二人きりで話したい事があると

言われてセイバーと別れ雑木林へと来た。そして自分がライダーのマスターである事を告白され、手を組まないかと誘われたのだそうだ。

結果的には間桐慎二の誘いは断つたらしい。理由が学校に仕掛けたライダーの『他者封印・鮮血神殿』の効果を説明され、使えば自分がどれだけ有利になるか自慢されたからと聞いて微妙な気分になる。

衛宮士郎が誘いを断ると間桐慎二は態度を一変、ライダーをけしかけてきたと言う。そのままライダーと戦闘になり、短剣で腕を貫かれ命の危機に陥った時に現れたのが宗一郎様だったと。

宗一郎様とライダーの戦いは初めこそ宗一郎様が押していたのだが、短剣と鎖で身を縛られていた衛宮士郎を庇ったせいで傷を負っていた宗一郎様は徐々に押され、蹴り飛ばされて木にぶつかり気を失っていたそうだ。

その後、二人に止めを刺そうとした所に異変を感じたセイバーが駆けつけライダーを追い払い、衛宮士郎と宗一郎様の命を救ってくれた。と言うのが事の顛末。

傷を治療し目覚めた宗一郎様に説明が正しいか確認したら、間違いないと言われたので真実なのでしょう。

全ての説明が終わわり、疑問に思った事を宗一郎様に聞いてみた。何故衛宮士郎を助けたのか、と。すると実にシンプルな回答を頂いた。

「教師の職務に生徒を守る事も含まれている」

間桐慎二がライダーの仮のマスターである事は伝えている。宗一郎様はその彼がセイバーのマスターである衛宮士郎と連れ立ち歩いているのを偶然眼にしたそうだ。それで眼にした間桐慎二の様子がどこかおかしい事に気づき、二人の後をつけていたら、ライダーを使い衛宮士郎を殺そうとしたので介入したと。

衛宮士郎と宗一郎様から聞かされた事を整理し推測すると……。

私が昨日恐怖を与えた影響で間桐慎二は危機感を抱いた。だから自衛の為にライダーの強化を企み、休日に学校へ来て『他者封印・鮮血神殿』の設置か調整を行い、大量の魂食いの準備を進めた。

同時にサーヴァントを堂々と連れている衛宮士郎を見かけ、マスターであると知って保身の為に手を組もうとした。けれど断られたので、聖杯戦争の恐怖を知っている彼は敵を殺せる内に殺そうとした。

そこで宗一郎様が生徒を守ろうとした訳だけど、そんな行動をしたのは私が昨日「生徒を導き守る教師として」なんて余計な事を言ったからな気がしてならない。

つまり私のマスターが怪我を負った原因の一端は私にあり、しかも勘違いしてライダーからマスターを救ってくれたセイバーに攻撃し、あまつさえマスターが守った生徒の衛宮士郎を危険な目に遭わせた。

自分の行動を振り返り冷や汗が出てしまう。

それにしても間桐慎二がこうも動くとは。私の予想の上だか下だかを行く彼は、私が思うよりずっと強いのもかもしれない。ある意味折れぬ心を持っているのではなからうか。

説明を聞き状況を認識した私は夕日を見て思う。ブリテン式の謝罪って、どうすればいいのかしらね……。

「悪かったわね。セイバーにセイバーのマスター」

どう謝ればよいかわからず、上手く謝罪の言葉を言えなかった。けれどそれを気にするような事はなく、二人は朗らかに言葉を返してくる。

「いや、あの状況なら仕方ないさ」

「そうですね。自分のマスターの危機と思ったのなら当然の行動でしょう」

衛宮士郎の反応は彼らしいと言えるかもしれないが、セイバーまで同意するとは。脱力しながら二人を見ると衛宮士郎の腕の血が目に入る。

放つておいても『アヴァロン』の効果で治癒するのでしょうか。だから無駄な行いではあるのだけれど、罪悪感に押された私は魔術師にあるまじき無駄な行いを決行する。

「セイバーのマスター、お詫び——になるかわからないけど治療するわ」

衛宮士郎は当然疑う事無く治療を受ける姿勢を見せる。しかしセイバーがすぐに動き衛宮士郎の傍に行きやすいように場所を空けたのは解せない。邪魔されても面倒なので困るのだが、同盟拒否をしたセイバーがこうも敵意を見せないのが不思議だ。

「セイバー、私が治療ではない事をする可能性を考えないの？」

「貴女ならばそれはない、と思いました」

不思議に思ったので治療しながら聞いてみたら迷い無く答えられた。回答を聞いてさらに疑問に思ったのが顔に出たのだろう。セイバーは少し間を置いてから続きを話した。

「先程の貴女との攻防ですが、私の行動を制限する為に貴女は私のマスター、シロウを狙っていました。あの時貴女はシロウを傷つけないように威力を抑え、且つ私が迎撃できる数であるように気を使っていたでしょう？」

「何を根拠に」

「攻撃を無視して前に出て貴女を斬つてもシロウは無事だろう。そう自然に思いましたので。翻せばそれは、貴女にシロウを害する気が無いと言う事かと」

セイバーの言い分に驚愕する。実際にセイバーが迎撃出来る数に抑え、万が一衛宮士郎に直撃した場合には致命傷にならないようにしていた。戦闘中にそこまで見抜かれ

ていたとは。直感スキルの恩恵か、それとも騎士王としての戦闘経験の賜物か。どちらにせよ見抜かれていた訳ね。

「だったらどうして私を倒さなかったのかしら？」

「自分のマスターを助けてくれた男性が貴女のマスターだとわかり、その直後に恩を仇で返すような真似は出来ません」

「……甘いわね」

「そうですね」

あつさり甘いと認めた事と、チラリと衛宮士郎を見た事から騎士道精神と言うだけではなく、自分のマスターとの人間関係も考慮した結果なのだろうと推察する。不本意だが倒しやすいであろう私を見逃し、今後を取った行動と言う事か。さすが円卓を続べた王。

「さて、治療が終わったけれど違和感はない？ セイバーのマスター」

「ん、凄いな。違和感なんてさっぱりない」

手をグーパーして感触を確かめている。治療した者の責任として衛宮士郎の手の動きを見ていると、セイバーが不意打ちを仕掛けてきた。

「同盟の交渉で真名を明かし、今と同じように当然の如くシロウの服まで直した貴女は、私を知るどの魔術師よりも人格者です」

裏切りの魔女と伝わる私に絶賛とも言える評価を言ってくる。聖杯を個人的欲望で求める事を差し引いても、彼女の中では人格者だと言うのか。

彼女が知る魔術師、私と比べたであろう相手をパツと思ひ浮かべる。彼女の後見人である悪戯好きのマーリン。第4次のキャスター、狂人ジル・ド・レエ。そしてマスターであつた魔術師殺し衛宮切嗣。私が人格者なのではなく、セイバーの知る特殊過ぎる魔術師達が問題な気が……。

「キャスター、そしてマスターの葛木宗一郎。剣にかけて誓いましょう。貴女方とはいずれ正々堂々と決着をつけると」

騎士王に相応しい清廉な誓い。殺し合ひは認めない衛宮士郎も感じ入るものがあつたのか、真つ直ぐなセイバーの誓いに口を挟む事はなかつた。

私の勘違いで始まつた戦闘での戦果は、誉れ高き騎士王から誇り高き騎士ティルムツド・オデインのような評価を賜る事となつた。

……正々堂々と戦うと、私は勝てない訳なのだけけれど。

日が完全に沈まぬうちにセイバー達と別れ、マスターと一緒に柳洞寺へと戻つた私は、自室で一人静かに精神を集中していた。今夜予定していた行動を起こす為に。

夕方の出来事を考えても、やはり間桐は放置できない。ならば行う事は一つ。

ゆつくり部屋を出て外の空気に触れ月を見上げる。魔術の師である女神へカテーは月を表す女神でもあつた。月が出ている夜は心強く、昼よりも強い意志を持てる気がする。

敵は悪意ある化け物。人の形をした人在らざる者。私は聖者でもなく荣誉ある騎士でもない。正邪を問わず自分の道を求める魔術師だ。相手が邪悪であるなら、同じく悪をもつて誅するのみ。

マスターの守りをアサシンに任せ、夜の闇を纏い街を進む。遠くもない場所なのでぐに目的の場所——間桐邸へと辿り着く。

人払いの魔術を使い何があつても人が来ないようしてから、招かれざる客人を拒む境界を一つ一つ解除し全てを剥ぎ取り敷地の中へと侵入した。すると誰も居なかつた場所に影が生まれ、それが小柄な老人の姿へと変貌する。

「ほう、無作法にも侵入したのが何者かと興味を抱き来て見れば、キャスターのサーヴァントか」

英霊たるサーヴァントの前に姿を現すのは、侮っているのか実力に自信があるのか。冬木の聖杯のシステム構築にも携わつた事で自惚れているのかもしれない。サーヴァントなど恐るるに足りずと。

「何用かと問うまでもないか。何やら昨日、不肖の孫と因縁が出来たそうだが、狙いはライダーか。となれば慎二めの命も風前の灯と云うところか」

愉悦を含む声音で他人事のように言う。間桐慎二の醜態でも想像したのだろう。自分の血縁者の苦しみすら享樂の対象にする事に虫唾が走る。

「確かにライダーにも用があるけど、でも本命は違うわ。間桐、いえ、マキリ・ゾオルケン」

聖杯戦争の裏で暗躍し人を苦しめ喰らう、500年を生きる虫の化け物に告げる。

「目障りな害虫を仕留めに来たのよ」

第六話

「ふむ、なるほど、儂を討ちに來たと申すか」

態度も口調も変化がないが周囲の気配が変わった。何かが周辺の闇に潜んでいるのを感じる。おそらく臓硯の操る虫達が集まってきているのでしようね。

「しかしマスターでもない儂を討とうとは。はて、ぬしのマスターは儂に恨みでもあるのかのう。既に隠居している儂を恨む者が居るとも思えんが」

疑問の言葉と声音はどこまでが本音かわからない。私からすれば恨みを買っていないはずはないと思うが。でも臓硯が言う事も真実なのかもしれない。恨みを持つ者を悉く始末すれば、恨む者が居ないと言える。

まあ臓硯が何を言おうがどうでもいい。私がやる事は決まっている。しかしその前に念の為、一つだけ確認しておこう。

「始末する前に一つ質問しましょう。あなたは、自分の為ではなく世界の為に聖杯を求めらる者をどう思うかしら？」

問いをすると臓硯は考える素振りをし、警戒があつた眼には強い興味の光が宿る。そして少しの間を置いてから返答がきた。

「自らの欲望ではなく世界の為……か。人間は欲望があればこそ生きられる。どのような願いと言えど結局は己が欲望に帰結する。ならばその願いも自己の欲望よ。それを世界の為などと言えば、偽善ですらなく独善であろう」

予想外の真つ当な返答に内心で驚く。今の返答だけを聞けば、彼をまともな人物と捉えてしまいそうだ。根本を忘れ歪んでいる事を知らなければ、だが。偽善ですらないと言いつけるのは、自分を悪として外道な道すら良しとしているからか。

「では例えただけど、『この世全ての悪の廃絶』を聖杯に願う者が居るとしたら？」

「クク、ハハハハ、この世全ての悪の廃絶だと？ キャスターよ、それがぬしのマスターか、或いはぬし自身の願いか？」

「さあ、どうかしらね？」

心底愉しそうに笑う臓硯。その姿は呆れすら通り越して嗤っているように見える。確かに子供が夢見るような実現するのは不可能な願い。人が人である限り叶わない願い。だからこそ、願った者は聖杯を求めたのだろう。

私自身は『この世全ての悪の廃絶』と言う願いに賛成は出来ない。けれど、その願いの根本が人同士の争いを憎み平和を望んだ心からだとすれば、その思いに共感はできる。

改めて考えて、それは尊い願いであると思った。だから返答にほんの少しだけ期待を

していたのだが――。

「そうさな。そのような願いを求める者に何か言うとするならば愚かと言うだけよ」

「そう、残念だわ」

会話の終わりを示す冷たく言い放った私の言葉の直後、私と臓硯は素早く動いた。

夜の影から現れ私へと襲い掛かってくる虫の群れ。それらに向かつて炎の魔術を放ち迎撃する。自分の周りをぐるりと囲むように放った炎は、飛び掛ってきた醜い虫達を悉く焼き殺した。

最初の攻防は私の勝ち……と言う訳ではなかった。

「さすがキャスターのサーヴァントと言うべきか。個としての力量では儂を上回るようだ」

負けを認める発言だけど、場の雰囲気は虫を焼かれる前と変わっていない。むしろ周囲のざわつく気配は先程よりも増えている。

「個ではなく数が貴方の力な訳ね」

「所詮儂はマスターにも選ばれぬ隠居者よ。か弱い蟲達を頼りにするしか手がなくてのう。出来ればぬしには大人しく蟲達の餌になって貰いたい。サーヴァントを喰らうのはこやつらも初めてで期待して居るようだな」

自分を卑下してペットを可愛がるような言葉だが、聞かされた私はおぞましい気持ち

になる。闇から溢れた虫の醜い姿が余計におぞけを増長する。

マスターに選ばれないなどと言っているが冬木の聖杯システムの設計者の一人なのだ。やり様によつては現存するサーヴァントを生贄にサーヴァントを召喚しマスターになる事も可能はず。イレギュラーな召喚をした為に現界の楔が弱い小次郎などは生贄にしやすいでしょうね。

英霊たる私を前にしての余裕は数による圧殺が可能だからか。セイバーやランサーならいざ知らず、マスターである私は魔術の発動と言う過程を経なければ迎撃が出来ない。多数の虫に近寄られれば、魔術師では無残に食い殺されるだけだろう。『普通なら』であるが。

さらにいざとなれば控えているライダーが居る。余裕があつて当然か。自らが出てそのまま私を喰おうとしているのは、言葉通りサーヴァントを喰らうのに興味があるからっぽいわね。私が女である事も関係していそうだけど。

「キャスターよ、覚悟は決まったか？」

現状を分析していると臓腑が聞いてくる。その声音は喰らうのを待ちきれぬと言つた快楽の感情が見えた。

「ええ、決めたわ」

醜い虫達に囲まれながら、私はその手に用意していたモノを召喚した。私の手の平の

上に現れたモノを見て臓硯が警戒するが既に遅い。大魔術でもない限り発動に詠唱など必要ない私は、手の平のソレを生贄に即魔術を発動させた。

手の中のモノが塵と化すと、場の空気が変わり異変はすぐに起こった。

「貴様、何をした!」

「ふ、ふふふふ、簡単な呪いをこの地にかけただけよ」

発動した呪いは狙い変わらず効果を発揮する。臓硯を守り、同時に私を喰らおうと囲んでいた虫達が共食いを始めたのだ。

「蟲共が言う事を聞かぬとは」

「蠱毒の虫を触媒に、お互いを喰らい合う呪いをかけただけよ。他者を喰らうあなたの虫とは相性が良かったようね」

「おのれ、女狐めが!」

間桐邸の敷地に掛けられた呪い。それはお互いを喰らい合わせ呪いと化す蠱毒の壺の呪いをベースにしたもの。生き残った最後の1匹を触媒にし、蠱毒の作成に欠かせぬ虫の共食いの概念をこの地に強いた。

ただの自滅の呪いなら効果は薄かったでしょうが、他者を喰らう臓硯の虫は『喰らう事』を受け入れやすい。加えて虫という共通の属性を持たせている。見える範囲ではあるが、思った以上に効果があったようだ。見てて気持ちの良い光景ではないので、見て

も良い気分にはならないけど。

「さようなら、マキリ・ゾオルケン」

虫をけしかける事が出来なくなって呆然としていた臓硯を、一面の虫共々炎が包み込む。烈火の業火が通り過ぎた後には消し炭と化した虫達の残骸が残るが。

「逃げた……か」

人の形をした虫の塊も焼け焦げてはいたが、話していた時と違い抜け殻だった。そもそも最初から抜け殻ではあるのだが。

「往生際の悪いことね」

逃げた窮鼠を仕留める為に、悠々と歩を進め屋敷へと入る。目指す場所は決まっている。追い込まれた虫が逃げた先、数多の人が犠牲となった虫の巣窟へ。

カツンカツンと足音が響く地下室。そこは工房と呼ぶには陰湿な雰囲気漂わせていた。壁に設置された穴倉からは虫が蠢く音がして、自然と嫌悪の感情が湧いてくる。

「上での事で凶に乗ったものよな。ここまで来て無事に済むと思わぬ事よ」

階下に居る臓硯が憎々しげに私を見つめる。

「ぬしの呪いも秘蔵の蟲には効かぬ。さらにライダーが居るこの場より、もはや生きて

帰れるとは思わぬがよい」

臓硯の言葉通り、虫蔵の底にはライダーが短剣を構えて立っていた。それだけではなく、間桐慎二に間桐桜も居た。彼らを守るように這いずる虫の集団の真ん中に。

私がかけた呪いに抵抗する虫がいるのは予想通り。そしてライダーと間桐桜が居るのは予定通り。もう1名は居ても居なくてもどちらでも良かったので問題ない。

「そうね。ライダーを正面から相手にするのは少々分が悪いかしら」

私がそう言うと、間桐慎二が手に持つ本を開き一歩前に出る。表情には怯えが見えるが、それでも尚私を直視していた。臓硯に対する恐怖もあると思うが、魔術師としての冷酷な雰囲気纏う今の私を前にしても崩れぬ彼の芯が強いのだろう。

「ハ、ハハハ、昨日はよくも邪魔してくれたな。ライダー、今日こそあいつを八つ裂きにしろ！」

ライダーが武器を手に持ち前が出る。それに合わせて虫達が壁を這いずり、天井や壁面を覆い私を囲う。敵の工房の只中に来て囲まれて絶体絶命と言った所か。

虫蔵の底へと続く階段の上からライダーを見下ろす。眼帯に遮られた彼女の表情はわからないが、事を起こそうとする重圧は伝わってくる。

そうして間桐のサーヴァントとして立っている彼女へ言葉をかけた。

「始めましょうか、ライダー」

瞬間、世界が赤い檻に閉じ込められる。

「クツ、カツ、グガツ、こ、これは……」

ライダーの結界により赤い粒子が舞う中、臓硯が見るからに苦しんでいた。同じように蠢く虫達も呻きながらのたうち回っている。

事態を飲み込めずオロオロとしていた間桐桜をライダーが気絶させ、そのまま抱えて私の横へ飛んできた。それを見て兄である間桐慎二が半狂乱で叫んでくる。

「ライダー！ なんだこれは！ なんなんだよこれは！」

「あら？ 自分のサーヴァントの宝具も知らないのかしら？ ブラッドフォート・アンドロメダ。結界内と外界を完全に遮断し、内部の対象者を融解し魔力へと変換する結界宝具よ」

ライダーの代わりに答えると、わなわたと震えて私を睨む間桐慎二。自分が学校へ仕掛けていた物が、今自分へ向けられていると知って恐怖しているようだ。実際は臓硯と使い魔の虫にしか向けられていないのだが。怯える彼を見ると、いけないと思いつつもゾクリとした快感を感じる。

「グウ、慎二よ、令呪をもってライダーを縛れっ！」

「あ、ああ、そ、そうか。よ、よし」

『他者封印・鮮血神殿』の対象にされているのに臓硯は喋る余裕があった。共食いの呪

いが掛かっていて、大部分の力を虫の制御に使って抵抗できないと思っただけだ……。そう言えば、今のライダーのマスターは間桐慎二か。彼がマスターの状態では、彼女の宝具は真価を発揮できないのだったわね。

臓硯に言われ間桐慎二が偽臣の書に移された令呪を用いてライダーを縛ろうとする。しかしその前に私は右手に短剣を具現化させ、迷う事無くそれを横に立つライダーの胸へと突き刺した。するとライダーから魔力が籠った風が立ち昇る。

「うわっ!? ほ、本が、僕の令呪が!?!」

「キャスター、貴様……!?!」

間桐慎二が持っていた偽臣の書は炎に包まれ灰と化した。呆然とする間桐慎二。縫える物が無くなった彼の代わりに、もう一人は窮地だと言うのに悪意が膨れ上がっていた。

苦しみながらも臓硯は鋭い眼光に憎しみを乗せて私を見てくる。私の呪いとライダーの宝具にまだ耐えられているようだ。死者への餞別ではないが、私は左手に宿った令呪を見せながら何をしたか臓硯に教える事にした。

「ルールブレイカー。私の宝具を使いライダーのサーヴァント契約を解除して、強制的に私のサーヴァントにしただけよ」

「ククツ、そうか、裏切るかライダー。ハハハハ、裏切りを見抜けなかった儂の不覚か。

よからう。ならば潔く散るとするか」

事前に私とライダーが手を結んでいた事を察したのか潔い発言をする。が、その眼はギリリと執念の光を放っており、大人しく散る気がないのを窺わせる。

何を考えているか正確な所はわからないが、ライダーが守ろうとしている間桐桜を道連れにするか、或いは間桐桜を乗っ取ろうとでも考えているのか。死の間際でも決して諦めていない意志の強さは驚嘆に値する。素直に褒められないが。

臓硯の思惑はわからないが、ライダーとの約束を果たす為に間桐桜へと向き直った。そしてライダーに抱かれている彼女の胸へと手を伸ばし、真っ直ぐその手を突き刺した。

「こんな場所にも害虫が居るのを忘れていたわね」

「なっ!?!」

間桐桜の心臓を手に持ち言うと、臓硯が驚きの声を上げた。間桐桜が心臓を抜かれたのに生きている事に驚き、そして心臓に虫が巣食っているのを知られていた事に驚いた。と言った感じか。

後者はまだしも前者で驚かれるのは不愉快ね。遠坂凜でさえ、魔力量のゴリ押しでゲイ・ボルクで穿たれた心臓を再生させたのだ。ならば無くなった心臓を再生させる程度、魔術師の英霊である私に出来ないはずが無い。『普通の心臓』の再生なんて造作ない

事。生きてさえ居れば、肉体が17分割されていたとしても生き返らせる自信がある。

「間桐桜に巢食う害虫の駆除も終えたし、ライダー、終わらせなさいな」

私が言うのと空气中を漂う赤い粒子が増え、空間内の禍々しさが明らかに上がる。マスターが私に代わった影響で『他者封印・鮮血神殿』が真価を発揮したのだ。吸精に耐えていた虫達がぼろぼろと崩れちり芥へと還っていく。

一気に崩壊を早める中で、手に持つ心臓から小さな虫が飛び掛ってきたが、それもライダーが短剣で始末した。そうして粗方の虫が消えいくと、虫倉の奥から人間大もある巨大な虫が這い出てきた。

「おのれ、おのれ、おのれええ!!!」

老人の形をした虫と巨大な虫の両方から怨念籠る憎悪の声が聞こえる。おそらくあの巨大な虫が臓硯の本体なのでしょうね。その形は人とは遠く、虫としても歪で正常とは思えない異形の存在。

「貴様らごときに、たかだかサーヴァントに、この儂がああ——」

言葉途中で投げられたライダーの短剣が巨大な虫を切り刻む。数瞬の時を置き、巨大な虫が動かなくなりポロポロと体躯を崩れさせていった。それに合わせる様に老人の形をした虫も衣服を残し塵へと変わる。

数百の年月を生きた虫の怪物の最後にしては、あっさりとした終焉。臓硯の消滅を確

信したのか、ライダーが『他者封印・鮮血神殿』の発動を止めた。

やるべき事をやり用の無くなったこの場を跡にする前に、一度だけ魔術師の残滓に目をくれる。悪を憎み望みを叶える為に自らが悪となつてしまった哀れな存在。彼の過ちはなんだつたのか。たぶん人である事を辞めた事だろう。

一欠片の同情を残して背を向けた。その時に見えた少年を無視し、マントで抱える間桐桜ごとライダーを包み転移した。

幕間 遠坂凜 前編

「やってくれるわね」

深夜、情報を集める為にアーチャーと一緒に新都を散策していた。その時にビルの屋上上がり街全体を見下ろしていたら偶然ソレを発見した。

屋上の死角に設置された自立型魔術陣。設置後に自動的に効力を発揮する厄介なソレの破壊を試みるが……。

「やっぱりダメか。壊してもすぐに修復されちゃう」

「凜、ここから見えるだけでも複数同じモノが見える」

修復時の魔力の流れから考えて、破壊したとしても近くと同じモノが修復をするよね。これを本気で壊すつもりなら、下手をすると街に設置されている全てを同時に破壊しなくちゃダメか。厄介極まりない。

「アーチャー、これを設置した目的は何だと思う?」

「君が考えている通りだと思うがね」

「チツ、やっぱりそうか」

この魔術陣は周辺の生物から精気を奪い、それをどこかへと送っている。私のような

魔術師なら防ぐ事が安易な略奪の魔術効果だけど、一般人はそうはいかない。

聖杯戦争が始まったこの時期に仕掛けられた目的は簡単に推測できる。サーヴァントの強化の為の魂食い。それしかない。

「集められた精気は……地脈を通してあっちへ流れてるわね」

目を瞑り魔術陣を通して精気の流れを調べる。すると思つた以上に簡単に判明した。これほどの魔術陣を設置する相手だ。探査に対する妨害を忘れたのではなく、隠す気がなかつたって事なんでしょうね。

「その先には柳洞寺があるな」

私が指差す方向を鋭い視線で睨むアーチャー。その眼は敵を捉えた狩人のようで頼もしい。

「ますます厄介ね。柳洞寺は霊地として優れているし、何よりも結界が張ってあってサーヴァントは正面からしか侵入できないわ」

「なるほど、籠るにはうってつけ。と言うわけか」

私が言いたい事を察したのだろう。柳洞寺は拠点とするなら優良であり、既に拠点として機能していて外からの魔力供給を自動で行う穴熊の陣容を示している。尚且つこれほどの魔術陣を設置する相手。籠る戦術に魔術を使った戦略。

「敵はキャスター、か」

「たぶんね。現代の魔術師じゃ、これほど自然に街に溶け込んで違和感を感じさせない癖に、ここまで強力な魔術陣なんて作れないもの」

「戦う準備万端と言ったところか。だとするなら、先日の同盟の話はやはりフェイクと考えるべきだな」

「ええ、断つて正解だったんでしようね」

キャスターが自ら名乗った真名、コルキスの王女メディア。裏切りの魔女と伝わる彼女の逸話は、まさしく裏切りの連続だった。自分の国や家族を、保護した他国の王を、夫や子供すらも裏切った。

「でも自分から名前を言うくらいだし、逸話と実際の人柄が全然違った気もするのよねえ」

「凜、裏切ると言う事はその前提として、信用されていたと言う事だ。ああいった表向き態度も意図的なものなのだろうよ」

アーチャーの言うとおりだとは思うが、どうにも引つかかる。真名を言えば信用は上がるが、キャスターの場合は信用よりも裏切りを警戒する。それを考えないほど馬鹿でもお人好しでもあるまいし。実態は裏切りの魔女と知っても善人に見えるほどの巧みな人心掌握術と言ったところだろうか。

話した時の人の好きそうな雰囲気は、やはりアーチャーの言うとおり演技と考えるの

が妥当か。街の人々から精気を集めるような手段を取っているのだから、魔術師らしい冷酷さが本質なんでしょうね。今は街に異変はないけど、キャスターが本気になれば魂食いで何人死人が出るかわかったものじゃない。

どうしても拭えないお人好しのイメージが恐ろしい。同盟を結んでいたら、どれほど酷い手の平返しにあつていた事か。

「現状、時間が経てば経つほどキャスターが有利になるわね」

「つまりキャスターには早々にお引取り願おうと言う訳だな」

「ええ、明日衛宮君と話してから、セイバーも連れて柳洞寺へ攻め込むわよ」

新都の空に最も近い場所から柳洞寺のある方向を見やる。敵は神代の魔術師。聖杯戦争に参戦するマスター、そして冬木のセカンドオーナーとしても、アーチャーとセイバーの2騎の戦力を用いて油断なく討たなくては。

翌日、昼休みに衛宮君と話そうと彼のクラスの前で待っているのだけど。

「遅い。遅いわね。なんでさっさと出てこないのよ。さり気なくクラスの前を通過する振りをして声を掛けようと思つてたのに。これじゃあ私が衛宮君と話したくて待つてるみたいじゃない」

つい小声で文句を言ってしまう。廊下で立つて待っていても一向に出てこない。明らかに私を見ている生徒が徐々に増えてきて苛々してくる。衛宮君のせいで優等生な私の評判が落ちたらどうしてくれよう。

『教室の入り口から顔を出して呼べば早いと思うのだが……』

『嫌よ。それじゃあ、まるで私が衛宮君に会いに来たみたいじゃないの。あくまでも、さりげなく、偶然を装って連れ出すのよ』

『既に手遅れだと思いがね』

『うるさいわねっ』

念話でアーチャーが色々と言ってくる。私だってもう目立つてるのはわかってる。さり気なく廊下で声を掛ける事が不可能だと理解している。多数の生徒、特に男子が教室から顔を出して私を監視しているのだから。

でもだからこそ私は平然と落ち着いて待つのだ。我が家の家訓にかけて。

表面上は澄ましたまま待っていると、ようやく衛宮君が教室から出てきた。他の男子生徒に背中を押されて私の前に。

「よ、よう遠坂、こんな所でどうしたんだ？」

何故か怯えた様子で私に声かける衛宮君。その彼に、私は精一杯の優しい笑顔でにつきり微笑み答えてあげた。

「こんな所で偶然ね。衛宮君、お昼まだでしょう？ 折角だから一緒にしない？」

言つた直後にワアアと周りから歓声が上がる。特に男子から。ついでにアーチャーから呆れた気配が伝わってくる。理由はわかるので余計な事は何も考えない。

「そ、そうだな。奇遇だな。うん。じゃあ俺は一成と生徒会室で食べるから——」

「衛宮君、一緒に、お昼を、食べましょう」

「は、はい……」

逃げようとした衛宮君の肩をしつかり捕まえて、わかり易いように丁寧に優しく言葉を区切って伝えてあげた。私の誠意が伝わったのか、衛宮君はしつかりと頷く。

さて、まずはどうやって苛めてあげましょうか。

冬の寒さで人気がない屋上で、お昼を食べながら昨夜の魔術陣の事と、そこから推測される事を衛宮君に話した。最後に今日柳洞寺に攻め入る事も話したのだが、何故か衛宮君は乗り気じゃない感じだ。

殺し合いや無関係な人を巻き込む事を嫌がる衛宮君が、一般人から無差別に魂食いをする可能性があるキャスターの討伐に乗り気ではない事に疑問を持ったが、その理由はすぐにわかった。

情報交換と言う事で聞いた衛宮君の話。昨日の出来事を聞いたから。

「間桐君に連れ出された。までは危機感が薄いで済むけど、その後に令呪でセイバーを呼ばずにライダーと一人で戦い、あけく葛木先生に助けられて、最後はキャスターと戦闘になったって……」

どこから突っ込めばいいのか。衛宮君の迂闊な行動は魔術師としてあるまじき事ではあるが、キャスター陣営の動きも理解できない。

どうしてキャスターのマスターである葛木先生が衛宮君を助けたのか？ 放っておけばライバルが一人減ったのに危険を犯し助けた事が理解できない。そこだけでも疑問が満載だが、ついでにキャスターが勘違いで戦闘行為をした事を謝り、衛宮君の傷を治したおまけつき。

利用する為に好印象を与えておく。そう考えられない事もないが、それにしても行動に計画性が見られない。そもそもその発端が間桐君の行動であるからだ。唯一、キャスターとマスターの葛木先生の行動を説明できる考えはあるが理性がそれを否定する。

「まあいいわ。キャスターのマスターが葛木先生ってわかっただけでもお手柄よ。柳洞寺に潜む相手がキャスターだって確信を得た訳だしね」

「それに慎二がライダーのマスターだってのもな」

「ああ、そうね。まさか間桐からマスターが出るとは思わなかったから、それもお手柄、

かしらね」

魔術師として廃れた間桐がマスターか。もしも間桐のマスターが居るとしたらあの娘だと思つてたけど。そんな風に思つたせいとか意識せずに言葉が漏れる。

「桜じゃなくて良かった」

小声で言つた独り言だったのだが、隣に居た衛宮君に聞こえてしまったみたいだ。うっかり零した私の言葉から話題は桜の話へと移る。

「遠坂は桜の事も知ってるのか」

「え、ええ、彼女つて弓道部でしょ。部長の美綴さんとは一応友人だから、たまに見学に行くのよ。だから顔見知り程度には、ね。衛宮君こそ、どうして桜——さんの事を？」

「うん？ ああ、慎二の妹だしな」

「なんだ、間桐君経由なのね」

「いや、今じゃどちらかと言うと桜との付き合ひの方が多し。俺が一人暮らしなのを心配して、ほぼ毎日ご飯を作りに来てくれるからな」

「へえ、そうなの」

年頃の娘に何をさせてる。あの娘がまさか毎日通い妻のような事をしてるのは予想外。気軽に話す様子から、たぶんあの娘の好意に気づいてない鈍感男に文句を言つてやろうと思つただけ、次の衛宮君の一言で思考が止まる。

「そう言えば、なんでか今朝は来なかったな」

一瞬の思考停止後、即座に頭をフル回転させた。

間桐がライダーを呼び出した。昨日ライダーとキャスターに因縁が出来た。キャスターのマスターは葛木。間桐の所在を調べるのは簡単なはず。キャスターは街中に魔術陣を仕掛け戦う準備は出来ている。

知っている情報を整理しながら、衛宮君に必要な事を聞いた。

「衛宮君、もしかして今日間桐君って学校を休んでる？」

「よく知ってるな。無断欠席だつて一成が怒つてた」

返事を聞いて急いで屋上から校舎内へ入る。後ろで慌てた衛宮君の気配がするが無視して1年生の教室へと移動した。

目的の教室——桜のクラス——の前まで来たら、クラスメイトらしき子を捕まえ質問した。「間桐桜は今日休んでるか」と。答えは予想通り「休んでいる」だった。

「おい、遠坂、どうしたんだよ急に」

事態を少しも飲み込めてない衛宮君の手を掴み、人気のない場所に移動して現状の予想を言葉にする。能天気な雰囲気、衛宮君に対する怒りを籠めて。

「ライダーのマスターである間桐慎二。それに妹の桜まで来てないのよ。昨日、衛宮君達とのいざこざの後に何かあったんだわ」

「何かつて、慎二の奴は俺との事があつたから来てないだけかもしれないし、桜は風邪とかかも知れないじゃないか」

「間桐君の方はそうかもしれないけど、普通の病欠くらいで桜があんたに連絡をしないとは思えないのよ」

桜の衛宮君への好意は軽いものじゃない。私と目をあわせさえしなかつたあの娘が、衛宮君と親しくなる内に笑顔さえ向けるようになったのだ。だからこそ家宝の宝石を使つても衛宮君を助けたのに、桜の方に何かあつたのではたまつたものじゃない。

「悪いけど衛宮君、私は午後は休むから担任に伝えといて。アーチャー行くわよ」
「ちよ、ちよつと待て。遠坂、どこに行く気だ」

「間桐の屋敷よ」

衛宮君に顔を向ける事無く返事をし、そのまま急いで昇降口へと向かう。上着や鞆は教室だけど、いちいち取りに行つてゐる時間も惜しい。そう思い急いでいた私にアーチャーが冷静に言葉を投げかけてきた。

『落ち着け、凜。おそらく何かあつたとしても、それは昨夜の事で今更急いだ所で手遅れだ。仮に現在も何かしらの異変があるとしたら、むしろ急がずに準備を整えてから行くべきだ』

思わず反射的に「そんな事はわかつてる！」と言ひそうになつたが、立ち止まり深呼吸

吸をして言葉を飲み込む。アーチャーが言う事は正論で何一つ間違っていない。私の中の理性が、彼の言うとおりにするべきだと告げている。

胸に手を当て再度深呼吸をする。自分が焦っている自覚はあるので意識してそれを押し込める。

『オーケー、アーチャー。おかげで冷静になれたわ』

『普段の君なら私が言わずとも問題はなかったろう。魔術師である間桐の家とは少なからず親交があったのだろうが、聖杯戦争の参加者である以上は』

『大丈夫。わかっているわ』

冬木のセカンドオーナーである遠坂と、冬木に住む魔術師の家系の間桐に親しい付き合いがあると思ったのか、アーチャーが勘違いの心配をするがあえて訂正しない。

私が心配しているのは間桐ではなく桜だ。遠坂家から出た妹を姉として心配していると知られたら、英霊に成るほどの戦士である彼からしたら甘すぎると評価を下げられかねない。最悪は主の器ではないと見限られるかもしれない。

ゆっくり息を吐き感情を沈める。

「遠坂、急に走り出すから驚いたじゃないか」

落ち着いた頃に、私を追いかけてきたらしい衛宮君が声をかけてくる。その眼には困惑が浮かんでいた。普段の私なら絶対にしない行動、廊下を駆けて階段を飛ぶように降

りた姿を見られたからか。

聖杯戦争の事で気が立っていて、一昨日から彼の前では優等生の演技が崩れているかもしれない。聖杯戦争について無知な事もあるのだろうが、どこか魔術師らしくない彼に対して気を許してしまっている。良くない傾向ね。

「悪かったわね、衛宮君。自分の知らない所で動きがあつたかもつて考えて、ちよつと焦つたのよ」

衛宮君に笑顔で謝罪してから、腕を組んで冷静になつた思考で今後の行動を考える。

焦つて間桐の屋敷に行くのは論外だけど、のんびりと放課後まで待つてから行くのも遅すぎる。事後だとしても行くなら早い方がいい。

夜にキャスターを倒しに行くとして、その前に出来る限りの情報は欲しい。もし私が考えたようにキャスターがライダーを襲撃したのだとして、結果がどうなつたかは知らなくてはいけない。

私をじつと見ている衛宮君に眼をやる。例えライダーが無事だつたとしても、アーチャーとセイバーの二騎居れば遅れを取る事はない。アーチャーはもちろん、セイバーもかなりの実力者だし。

考えが纏まつたので、学校を早退してアーチャーとセイバーを連れてこれから間桐邸へ行く事を衛宮君に話した。状況に寄る対応の質問や疑問、それと同盟中とは言え勝手

に行動を決めた事に対する何かを言われるかと思つただけだ。

「わかつた。桜や慎二に何かあつたかもしれないならすぐに行こう。俺は担任の藤——村先生に言うのと素直に帰らせてくれぬか。仕方ない。一成に言つて早退するつて伝えてもらうか。遠坂はどうする？俺と同じように一成に担任へ伝えてもらうようにするか？」

質問も文句も一切なく、どちらかと言うと今まで受身だつた衛宮君が積極的だつた。

「私は自分で言いに行くわ。私まで柳洞君に頼んだりして変な噂がたつたら困るもの」

「そうか。じゃあ俺は伝言を頼んだら、急いで自宅に居るセイバーを迎えに行つてくる。合流場所はどこにする？」

「私も一緒に行くわよ。校門を出て少し進んだ場所で合流しましょう」

「了解だ」

言うが早い衛宮君は走るように行つてしまった。私が提案した事なのだから、彼に遅れないように私も動かなくてはいけない。

職員室に行くとして、キャスターのマスターである葛木が居たらどうするか。昼間から仕掛けたりはお互いに来ないから、居るかの確認だけに留めよう。早退する事で何か勘繰られるかもしれないが、準備万端で待つているキャスターからしたら不本意ながら些事だろう。

職員室に向かう途中にふと立ち止まる。自分の行動に問題はないはずなのに違和感が拭えない。理由がわからずに居た私にアーチャーが念話で「どうした？」と言ってきた。その瞬間に違和感の理由に思い当たる。

先程の衛宮君は即断とも言える速さで了解し、早退する為の行動を的確に提示してきた。桜だけならまだしも、自分を襲った間桐慎二までも心配して、だ。友人だったからと言って、普通自分を殺しかけた相手を心配するだろうか？

衛宮君は『自分が死んでいたかもしれない』と言う事実を忘れ、昨日自分を殺そうとした相手を迷いなく気遣った。魔術師の割に人死にを嫌うお人好し、と言うには行き過ぎなような……。

『凜？』

『何でもないわ』

再度アーチャーに問いかけられ衛宮君に対する考察を中断する。今は言葉の綾と言っても良いような事を考えている場合じゃないわよね。止まっていた時間を取り戻すように早足で職員室へと向かう。

違和感を感じたと言っても大した問題じゃない。衛宮君がお人好しなのはわかった事だし、人死にを止める為に聖杯戦争に参加すると公言してるくらいだ。その一環なのだろう。そう納得した。

でも何故か、心に残る違和感はいつまでも消える事はなかった。

幕間 遠坂凜 中編

セイバーと合流後に間桐邸へとやってくると、敷地に入るまでもなく異常が見受けられた。在るべき筈のモノがなかったのだ。

「強力な人払いの魔術の残滓は感じるけど、結界の類が一つも感じられないわね」

魔術師の住む屋敷に結界の一つもないはずがなく、それが無いと言う事が昨夜に何かあった事の裏付けとなる。実体化したアーチャーに眼をやると頷きが返ってきた。

「衛宮君はセイバーから離れないように。行くわよ」

衛宮君とセイバーに付いて来る様に促し、人気のない間桐邸の敷地に入る。すると強烈な不快感に襲われ眩暈がした。

「遠坂!?!」

「あ、衛宮君スト——あゝ……」

顔に手を当てふらついた私を心配して衛宮君が駆け寄ってきたのだが……。敷地に入った彼も案の定同じ目に遭ったようだ。そうならない様に止めようとしたが、迷いなく私に駆け寄ってきたので間に合わなかった。

外からでは分からなかった何かしらの強力な魔術——おそらく呪詛の類——が敷地

内に掛けられていて、その影響で眩暈がしたようだ。受ける感じからすると対象が人ではないから害はないでしょうけど、それでも眩暈がするほどの不快感を受けるのは驚きだ。

自分が対象の魔術ではなかったからとは言え、気づかなかった事は反省するとして。

「衛宮君、良い？ 私とアーチャーが前衛、貴方とセイバーはバックアップ。それと今みたいに私に何かあっても考えなしに突っ込まない事。反論はなし」

迷う素振りも見せずに駆け寄ってきた衛宮君に注意はしておこう。

「でも遠坂」

「衛宮君」

口を開いた衛宮君を睨むように見つめ黙らせる。すると彼は渋々と言った感じでだけ口を閉じた。

力不足は自覚している癖に、それでも咄嗟に私を心配して駆けつける彼の善性は好ましい。しかしそれでは今後無事では済まない。同盟している関係上、衛宮君に何かあつては困るのだ。

ふと、同盟に反対しているアーチャーが衛宮君の行動に皮肉の一つでも言うかなと彼を見たのだが。

「アーチャー？」

「ん？ どうしたマスター？」

私達の事には目もくれず間桐邸をジツと見ていたアーチャー。敵が居るかもしれない場所だから警戒しているのは分かるが、同盟を反対し衛宮君に厳しい言葉を浴びせていたアーチャーが、先ほどの衛宮君の行動に対して何も言わないのは何故だろう。

私の知らない内に衛宮君と和解した……わけがないわよねえ。

「何でもない。慎重に進むわよ、アーチャー」

まあ今のアーチャーの態度のほうがサーヴァントとして正しい。マスターの意見に反対して、同盟関係の相手に皮肉を言ういつもの方がおかしいのだから、気にする必要はないか。

洋館の入り口に向かいながらチラツと背後の衛宮君を見る。衛宮君の桜を心配している真剣な雰囲気、誰かさんに似ているのは気のせいなのかしらね。

「お、お前らなんで来たんだよ！ 僕はもうマスターじゃないんだっ！ お前達とは関係ないんだ！ 帰れよ！」

屋敷に入り人の気配がすると言うアーチャーの先導に従い二階の一室のドアを開けると、そこには怯えた声で叫ぶ間桐慎二が居た。

「落ち着け、慎二。俺達は桜や慎二に何かあったかもしれないから心配で来たんだ」

「嘘をつくな！ サーヴァントを連れて僕に仕返しに来たんだろう！」

「違うって、話を聞いてくれ」

「うるさい！ くそっ！ くそっ！」

喚き散らし部屋の中の物を投げつけてくる間桐君。それに対して飛んでくる物を律儀に受けたり避けたりしつつ説得らしき事を行っている衛宮君。

その様子をサーヴァントの二人は見守っている。もしかしたら関わりたくないだけかもしれない。間桐君の醜態は見るに耐えないし、衛宮君の真面目っぷりはどこかずれている。聖杯戦争に関わる事態のほすがまるで喜劇だ。

事態を進展させるには私が動くしかないようだ。盛大にため息をついてから間桐君へ指を向ける。魔術刻印を起動させ指差しの呪いを発動させる。

「ひいひい！」

狙い変わらず喚く間桐君の顔を掠め、彼の背後の壁にガンツと黒い呪いの塊がぶつかる。と場に静寂が訪れた。静かになった部屋の中で、間桐君は自分の頬に手を当てながら後ずさり壁に背が当たると尻餅をついた。

目を見開き口を半開きにしてある彼に近づき、彼の顔の真横の壁に脚をドカンと叩きつける。

「間桐君、貴方は余計な事を喋る必要はないわ。羽虫の羽音は煩いもの。昨夜あった事を言うだけでいいの」

「は、羽虫……？ 僕が羽虫だって！ ひっ?!」

再び小うるさくなりそうだったので左足で再度壁を踏みつける。魔力も祿に感じさせず魔術師とは思えない彼は、マスターであるが一般人でもある。そんな間桐君に分かりやすい形の脅しとして。

立場を明確にする為に床に座り込む様を見下ろしていると、彼はゆつくりと口を開いた。

「き、昨日キャスターがうちに攻めて来たんだ。さ、最初は獲物が向こうからやってきたって喜んでいたのに、気づいたらライダーがあいつのサーヴァントにされて、偉そうな事を言ってたうちの爺さんもあつさりやられて……。あんなに偉そうにしてたのにあつさり死にやがった！ ライダーの奴も裏切りやがって！ 何で僕が！ 使えないライダーなんかがサーヴァントだったばかりにさ！ くそ！ ふぎげやがって！ くそ！」

下を向き誰を見ることもなく淡々と語っていたかと思えば、途中から半狂乱になって喚き散らす。キャスターに襲われ祖父を殺され、言うとおりなら頼りにしていたはずのライダーを奪われた。聖杯戦争に臨む魔術師としての覚悟がなかった彼は、今も混乱の

只中に居るのでしょね。

「慎二、桜はどうしたんだ？」

衛宮君が静かな声で問いを投げかける。その声音にはある種の思いが籠っていた。私も同じ思いを抱いて間桐君の返答を待った。

「ふ、はは、桜？　桜がどうしただつて？　死んだよ！　死んださ！　当然だろ！　あんな役立たず！　キャスターに心臓を抉り出されたんだからなあ！　あははははははは」

間桐君の話の途中から少しは覚悟していたが、言葉にされると思っていた以上にきつかった。胸の中の感情を抑え込もうとするが上手くいかない。悲しいのか悔しいのか分からずに、目の前の狂ったように嗤う間桐君に感情をぶつけてしまう、

「黙りなさい！」

「ひっ!?　ひ、ひひ、ひひひひはははは。サーヴァントが居なくなった僕と違って、お前達はキャスターに狙われる。そして惨たらしく殺されるんだ。ザマーしろ！」

ふざけた事を言う目の前の男に指差しの呪いであるガンダ撃ちを行う。ガンガンガンと壁を抉る音が響いた後に、込み上げる感情を無理矢理押さえつけた。

同情でも憐れみでもなく、魔術師としての義務感のみで口を開く。

「例えサーヴァントが居なくなってもね、マスターであつた事実は消えないわ。本気で聖杯を狙うマスターなら、万全を期す為にサーヴァントを失つたマスターだとしても始

末するでしょうね」

「は？ なんだよそれ。ふざけるな！」

「命が惜しかったら冬木教会に駆け込むことね。聖杯戦争の監督役が、戦いを降りたマスターの保護をしてくれるわよ」

言う事を言つて背を向け部屋を出る。背後で聞くに堪えない叫びが聞こえるか無視して進む。アーチャーや衛宮君達も続いてくるのを気配で感じ、顔を向けずに語りかける。

「屋敷内に遺体がないか探すわよ。遺体の状況を見ればキャスターの手の内が少しは分かるかもしれないし——」

「遠坂！」

私の言葉を遮り、名前を呼んで肩を掴み私を振り向かせた衛宮君が強い視線で見ているが、すぐに視線の強さが弱まっていく。

「何かしら？ 衛宮君」

「いや……悪かった。なんでもない」

「そう。じゃあ、すぐに行動するわよ」

キャスターの手の内を探る為に足を進める。遺体を見つけ、私達が有利になる何かを見つける為に。そう自分に言い聞かせて体を動かす。

その後、地上の邸宅部分だけではなく地下の魔術工房も見つけ搜索したが遺体はなかった。遺体ではなく、魔力を根こそぎ奪われ塵と化した何かの残骸は見つけられなかったが。

弔うべき妹を見つける事は出来ず、間桐邸を跡にした。

買い物物を済ませ、衛宮君の家に着いてすぐにキッチンへと向かう。男の一人暮らしにしては妙に綺麗で驚いた。掛けてあったエプロンを手に取って着込み、早速とばかりに調理を開始する。

「腹が減っては戦は出来ずってね。衛宮君、少し待っててね」

気軽な調子で声を掛けると、衛宮君は苦笑と共に言葉を返してくる。

「遠坂に作ってもらうのは、なんだか悪い気がするけど」

「同盟関係なんだし、場所の提供は衛宮君がしてるんだから料理は私が作らなきゃダメよ」

手馴れた中華料理を作っていく。帰宅中に中華は辛いと言っていた衛宮君の認識を改めさせる為に、辛い物を中心に。どこかの陰険な兄弟子が好む中華料理だけが中華の真髄ではない事を広めなくては。

大量に買ってきた材料を使い、気づけば数多くの品数がテーブルに並んでいた。衛宮君に作りすぎだと止められるまで気づかないのだから、自覚せずにかなり熱が入っていたようだ。

調理器具を軽く洗って片付け、居間へ移動すると何故か藤村先生が座っていた。私を見た藤村先生は見るからに動揺し、衛宮君に面白おかしく絡んでいる。「セイバーちゃんは仕方ないにしても、早退した上に遠坂さんまで連れ込んでるのはどういう事〜！」と雄叫びを上げていた。

「藤村先生、衛宮君は具合が悪い私に付き添って早退してくれました。おかげで体調も良くなったので、お礼に夕飯を作っているだけです。藤村先生は衛宮君が下心を持って女子を家に連れ込むと思っているんですね？」

「そんな事はないけど、でも士郎も一応男の子だし〜」

「一応って……。藤ねえ」

「ん〜、まあセイバーちゃんも居たなら大丈夫だと思っけど」

「ええ、誓ってシロウに不純な動機はなかったかと」

「そっかあ。士郎もまだまだ切嗣さんほどの甲斐性はないかあ」

「なんでセイバーの言う事なら素直に納得するんだ」

そんな風にちぐはぐな会話をしている内に落ち着いた藤村先生を含め4人で夕食を

食べた。食事中にも関わらずいたずらをする藤村先生。その先生のいたずらにいちいちリアクションをする衛宮君。そして食事が不要なサーヴァントの癖に一心不乱に大量の料理を食べ続けるセイバー。

いつも一人での食事ばかりな私には、騒がしい食事風景は新鮮に見える。知らずに笑って3人を見ていたら笑い返された。セイバーだけは顔を赤くして目を逸らされたが。

食事が終わると藤村先生は衛宮君に私を家に送って行くように言い、その後「葛木先生に頼まれた仕事があるのだ」と叫びながら原付に乗って去って行った。教師の割りには奔放な人だと思う。

突然の来訪者が去り、食後のお茶を飲んでしていると衛宮君が私を見つめていた。私が見返しても視線を外さずジッと見つめてくる。

何かしら——と聞こうとしたら先に口を開かれた。

「遠坂、俺は魔術師としては強化が少し出来るくらいの人前も良いとこだ。同盟関係って言っても、セイバーはまだしも俺自身は遠坂の力になれるかは分からない。それに桜と遠坂がどんな関係だったか本当の所を察したりも出来ない。上手い言葉で慰めたりも無理だ」

そこで一旦言葉を切って目を閉じる。目を閉じた衛宮君は悩んでいるように見えた。

少しの間、カチカチと時計の音だけが響いた。

「だけど話を聞くとくらいなら俺でも出来る。だからそんなに無理をしないでくれ」
目を開いた衛宮君はそんな言葉を言ってきた。

魔術師の癖に他の魔術師に魔術が強化しか出来ない事を平然と言い、役に立つか怪しいと自ら言う。その癖、話を聞くとくらいは出来るなんて、私を氣遣うような事を言ってくる。桜と私の関係を察したり出来ないって言う癖に、間桐邸を跡にしてからずっと私を優しく扱って——。

「なんで、あんたは……」

「と、遠坂!? 悪い。余計な事を」

「うるさいっ！ 話を聞くとて言うなら、ちゃんと聞きなさいよー」

「ああ、分かった。ちゃんと聞く。だから今は」

すっかり泣いとけ——と、優しい声が耳に届いた。

年甲斐もなく泣いてしまったけれど、泣き終わるとすっきりした気分だった。

そして顔を上げたら自然とタオルを渡され、お茶を新しく注いでくれて、温かいお茶を飲んで深く息を吐いてから衛宮君を見ると、柔らかな眼差しで見られている事に気づ

く。

「弱つてる相手に優しくして籠絡するなんて、衛宮君って女たらしなのね」

「べ、別にそんなつもりだったわけじゃ」

「冗談よ」

顔を赤くして慌てた彼を見てつい笑ってしまう。なんだかすつかり衛宮君に心許してしまっているみたいだ。自分で言った事がそのまま今の自分に当て嵌ってしまっているのは癪だが、元々嫌いじゃなかったから仕方ない気もする。

衛宮君が夕暮れの校庭で、何度も何度も一人で飛び超えられない走り高飛びに挑んでいたのを見た時から気になっていた。これも運命なのかしらね。そんな風に思う自分をらしくないと思う。

顔を赤くしたままの衛宮君に、私達を微笑んで見ているセイバー、そして念話で繋がっているアーチャーへ向けてゆつくりと口を開く。

「妹、だったのよ」

「妹？」

「ええ、妹、だったのよ」

誰が、かはお互いに言わない。

衛宮君は何故間桐の家人が遠坂の私の妹なのか聞きたいでしょうに、疑問を口に出す

事無くしつかり私が話すのを待ってくれた。

「簡単に説明するわね。遠坂と間桐、それとアインツベルンって国外の魔術師の家系。この3つの家は協力して聖杯戦争のシステムを作り上げた。その関係で遠坂と間桐には昔からの付き合いがあったの」

前提とする関係を軽く説明する。聖杯戦争については説明済みだけど、遠坂や間桐について説明はしていなかった。これについても聞きたい事はあるでしょうに、口を挟まず真剣な目をして言葉を待ってくれている。

「元々間桐は外国の魔術師の家系で、冬木の聖杯のシステムを作るのを機に日本に移り住んだの。でも冬木の土地が合わなかったのか、徐々に魔術師として衰退していった。そして慎二の代で魔術師としての間桐は廃れた。彼には魔術回路がないのよ。だからあいつがマスターだとは露ほども思わなかったんだけど、つと、話が逸れたわね」

私が優等生らしくなく慎二と呼び捨てにしても、衛宮君は一切変化がない。泣いている所を見たんだから、今更その程度は気にしないのだろうか。私も素で話せるので気が楽だけど、そう思う事が少し気恥ずかしい。

「そんな状況を憂いた間桐の当主から、先代の遠坂の当主へ打診があつたの。娘を一人養子に出来ないかってね」

「それが桜だつたって訳か」

「ええ。廃れた間桐に遠坂の血を入れ魔術師の家として再興させる為、桜は養子に行ったの。だからその時から私と桜は姉妹ではなくなっただけ……」

「養子に行ったかどうかなんて関係ないだろ。桜が間桐桜になっただとしても、遠坂凜とは姉妹じゃないか」

魔術師の家と言うのは代々伝わる魔術を他家に漏らさず、たとえ同じ家系の者でも後継者とその他の者では伝えられる魔術には天と地の差がある。それが家を出た者となれば、敵とは言わずとも自家の秘術を守る為縁を切るのは当然の事だ。

だから魔術師の常識では衛宮君の言う事は筋違いだ。だと言うのに私の口からは魔術師らしくない言葉が出ていた。

「……ありがとう」

言ってから自分の頬が真っ赤に染まるのがわかる。先ほど冗談でたらしと言ったが、案外こいつは本当にたらしなのではなからうか。言って欲しい事を言ってくれるし、意外と気が利くし、しかもそれに他意がある訳じゃないから安心できてしまう。

今回の事とは関係ないが、誰にも言えなかった思いが口に出た。自分らしくない感情を誤魔化す為もあつたかもしれない。

「遠坂と聖杯戦争の関係は深いわ。前回の聖杯戦争、第4次聖杯戦争では前当主の父が参加して亡くなったわ。母もその最中に一時行方知れずになって綺礼が、えっと、聖杯

戦争の監督役が見つ付けてくれたんだけど、結局亡くなったわ。残った唯一の家族の桜も……」

家を出た妹を家族と言うのは魔術師としてはやはり正しくない。でも亡くなった今は遠坂も間桐も魔術師の家柄も関係ないわよね。こう考えるのは誰かさんの影響かも知れないけど。

沈黙が部屋を支配する。話し終えて区切りがついた私には、その時間がまるで黙祷をしているようだった。

「俺も、昔家族を失った」

静かな時を衛宮君の声が動かす。その声を聴いて、衛宮君も私が話したように自分の事を話すんだと分かった。

「10年前の大火災で家族を失った。俺も本当はその時に死ぬはずだったけど、助けてくれた人が居てさ。実は衛宮ってのは、その時に助けてくれた人の苗字で、行く当てがなかった俺と一緒に来ないかって言ってくれた。だからその人の養子になったんだ。養父になった親父、切嗣は魔術師の家系だったらしいけど、俺は元々一般家庭で育ったから魔術師としては——」

「待って、衛宮君」

自分の事を話してくれるのは今は嬉しいし、もつと聞いていたいとも思った。しかし

それ以上に伝えなければいけない。真実を知る者として伝えなくてはいけない事を伝える。

「10年前の大火災は、聖杯戦争が原因よ」

「そう……なのか？」

「綺礼が言っていたわ。聖杯にふさわしくないマスターが聖杯に触れた為に起こった大火災だって」

衛宮君が魔術師らしくない理由の一端は分かった。一般家庭で生まれて、本来は魔術に関わりがなかったはずだったからだ。その彼が聖杯戦争が原因で起こった災害で家族を失い、魔術師に救われ、現在マスターとして聖杯戦争に参加している。因縁、なのかしらね。

私の言葉を受けて、衛宮君は厳しい顔をして何かを考えているようだ。災害の当事者であるし、聖杯戦争に対して過去に関わりがあつた事で思う所があるのだろう。

話を聞いていたセイバーも顔を歪めて居た。英霊であるセイバーも聖杯戦争が原因である災害を快く思っていないのだろう。

「聖杯戦争が10年前の火災の原因だと言うなら——」

考えが纏まったのか、衛宮君が話し出した。私とセイバーは彼に視線を向ける。

「それが二度と起こらない様にしたい。それにマスターだから、関係者だからって遠坂

の両親や桜や慎二の爺さんのような犠牲者がこれ以上出ないようにしたい」

衛宮君の決意の言葉に頷きを返す。聖杯自体には興味はなかった。遠坂の魔術師の義務として勝利のみを求めていた。それが間違っていたとは思わない。けれどももう一つ目的が加わる。

「衛宮君、セイバー、それにアーチャー。これ以上犠牲者を出す事無く、私達が聖杯戦争の勝者になるわよ」

幕間 遠坂凜 後編

衛宮邸内の私室として宛がわれた部屋で、アーチャーに持って来るように頼んだ荷物から服を取り出し私服へと着替える。着替え終えたら、荷物の中の秘蔵の宝石をポケットへと仕舞う。

柳洞寺へ攻め込む前の作戦会議。それを行う前に気持ちの切り替えに制服から私服へ。切り札である10の宝石を持つ事で覚悟を決める。

準備を整え、待たせては悪いと急いで居間へと向かったのだが、そこでは不思議な光景が広がっていた。

「ふつ、小僧、貴様が淹れた紅茶よりも此方の方が美味かろう」

「悔しいが、確かに俺の淹れた紅茶よりも深みがある」

「意外ですね、アーチャー。貴方にこのような特技があるとは」

「嗜み程度ではあるのだがね、セイバー。だがその小僧よりはましだと言う自負はあるが」

ティーカップを片手に3人が紅茶の品評会を開いていた。

「何してるのよ、あんたら……」

片手で顔を覆ってため息をついて呆れてしまう。これからキャスターとの戦いの為の作戦会議をしようの、衛宮君はまだしも、アーチャーやセイバーまで何をしているのか。

「作戦を話し合うにしても、飲み物の一つもあつたほうがいいかと思つてさ」

「で、小僧が紅茶を淹れたが、それがあまりにも未熟な出来だったのでつい未熟者と事実を言ったのだが」

「口だけではなく、実際にどちらの淹れた紅茶が美味しいか？　と言う事になり、勝負をしていたのです。ちなみに私は審査員でした」

3人の大真面目な説明にガツクリと肩の力が抜ける。気持ちの切り替えとか覚悟を改めたりしていた私が馬鹿みたいだ。

「さつき偉そうな事を言つたけどさ、思うんだ。半人前の俺が言うのもなんだけど、結局は自分が出る事をやるしかないんじゃないかって」

「それで、今出来る事が紅茶の味勝負ってわけ？」

呆れながら言うのと苦笑を返される。アーチャーは腕を組んでそっぽ向いて居る。セイバーは真つ直ぐ私を見ている。3人の様子にピンときた。これは気を使つてくれているのだ。

夕食時の事を考えれば、衛宮君の家では日本茶を出すのが通例みたいなのに、紅茶を

用意したのは私の好みを考えてくれたのだろう。アーチャーも衛宮君に合わせて今みたいな態度なのだと思う。セイバーは真面目な雰囲気だからよくわからないけど。

涙を見せたのが相当な影響を与えたようだ。まさか衛宮君だけじゃなくアーチャーまで気を使ってくれるとは思わなかった。衛宮君に対して敵対しているような態度だったはずだけど、私の為に器用な振る舞いをしてくれる。それとも念話越しに彼の生い立ちを聞いて、多少は棘が取れたのかしら。

「それじゃあ、折角用意してくれた紅茶を頂きながら作戦会議と行きますか」

努めて軽い調子で言葉を紡ぐ。不器用で半人前なお人好し、器用で素直じゃない皮肉屋、天然っぽい真つ直ぐな剣士。少しだけ軽くなつた胸の内の痛みと共に、彼らの輪の中へ私も入っていった。

「さて、まずは情報を整理しましょう」

3人の視線が私に集まる。皆真剣な色合いが見て取れる。サーヴァントの二人だけではなく、衛宮君もちゃんと心得ているようだ。

一息置いてから、間桐邸で得た情報を言葉にする。

「昨夜間桐、ライダー陣営を襲ったのはキャスターで決まりね。現場に残る強力な魔術

の残滓、それと慎二の話で決定的なんだけど」

「キャストが強襲しライダー陣営が敗れた。だけであつたなら大した問題はなかつたが」

「ええ、問題は慎二が言っていた『ライダーがキャストのサーヴァントにされた』って所ね」

私の言葉をアーチャーが繋ぎ、再び私がそれに答える。と、そこで衛宮君とセイバーが複雑な表情、あえて言うなら納得がいかない顔をしていた。

「衛宮君、キャストの事だけど」

「ん、わかつてる。遠坂が言つてた街中の魔術陣と慎二の話を聞いて、戦わなきゃいけない相手だつて事は」

「ですが凜、私が見たキャストとそのマスターは、言つては何ですが、そのような非道を行う様には思えませんでした」

「セイバーの人物眼を疑う訳じゃないし、葛木先生も含めて私も同じ感想だけど」

あの夜に衛宮邸を訪れたキャストを思い出す。頭を下げて自己紹介をし、アーチャーとセイバーに睨まれ居心地悪そうにお茶を啜っていた。衛宮君の制服を直す姿なんて、魔術を使っていたのに一般人のようだった。同盟をお願いしてきた時の動作と笑顔は、見た目の割りに幼い感じの小動物っぽさ。人畜無害。小市民。そんな言葉が浮

かんでくる。

戦意が減少しかけていた私の思考を遮るように鋭い声が飛んできた。

「残念ながら世の中には呼吸をするように嘘を吐く人間も居る。他には自分でも嘘だと認識せずに偽りを言う存在もだ。セイバー、君も英霊なら自らの名声に擦り寄つて来るその手の人間に、一度や二度は出会つた事が在るだろう？」

アーチャーがセイバーに語りかけるが、おそらく同時に私と衛宮君にも言っているのだろう。目を伏せ黙つたセイバーは、アーチャーの言う事を認めているようだ。アーチャーが他者にこんな風に助言のような事を言うのは珍しい。同じ英霊同士、セイバーに感じ入る事があるのかしら？

「他人の善性を信じるのは美德かもしれん。が、それに酔つて気づけば背中を刺されていた。では笑えんな」

苦言を呈するアーチャーの発言に、衛宮君が顔を顰めた。確かに聞いていて気持ちの良いいい方ではないと思う。

昨日までの私ならアーチャーに一言注意したかもしれないけど、今ならわざと嫌な役を引き受けてくれてるんだとなんとなく分かった。問題はアーチャーの皮肉めいた思ひ遣りが、私以外に通じているかなんだけど。

「アーチャーの言う事も一理あるのかもしれない。けど俺は、キャスターや葛木先生と

直接話して本心を確かめたい」

「ほう？ 知り合いの少女が殺されたと言うのに随分と冷静じゃないか、衛宮士郎」

睨み合う衛宮君とアーチャー。予想通り衛宮君にアーチャーの思い遣りは通じていない。アーチャーの衛宮君個人に向けた発言は、挑発してるみたいだから仕方ないかもしれないが。

「シロウ、私も貴方と同意見です。ですが、やはりアーチャーの言う事も間違っていない。ならば戦いを前提とした作戦も立てておくべきかと」

「……セイバーがそう言うなら」

セイバーに言われ渋々納得する衛宮君に、ほんのちよっぴりイラつとした感情が沸き起こる。

「衛宮君、間桐邸の地下に魔力を吸われた残骸があつたでしょ？ たぶんあれ、魔術師だった間桐の当主よ。使い魔共々魔力を根こそぎ奪われてあんなつたんだと思うの。桜も心臓を抜かれたって事は、魔術回路を引き抜かれたんだと思う」

調べた結果、地下の塵の中に桜の遺体や残骸はなかった。心臓を引き抜くだけではなく遺体を持ち帰った理由は考えたくはない。余計な感傷がぶり返しそうだったので急いで続きを話す。

「サーヴァントのエネルギーである魔力は多ければ多いほど有利になる。だからキャス

ターは敵を倒すと同時に魔力を奪ったんだわ。嫌になるほど合理的ね」

魔術師一人から奪える魔力量は一般人のそれとは比較にならない量だ。間桐の当主と桜が殺され、魔術回路がない慎二が見逃された事から、魔力奪取も目的の一つだったのかもしれない。

「そんなキャスターが街中に吸精の魔術陣を仕掛けている。キャスターがその気になれば冬木は一瞬で死都になるわ」

吸精の効果を発動させていないのは様子見か、それとも別の理由があるのかは分からない。けれど発動されてからでは遅いのだ。衛宮君にその危険性を十二分に説明する。

「キャスターの真名であるギリシャ神話の英霊、裏切りの魔女メデア。逸話を考えると、信用を得て相手を騙すのは得意でしょうね。葛木先生ももしかしたら騙されてるのかも」

逸話の中には身内さえ殺す暴虐性も見受けられる。考えれば考えるほど放置しておくには危険な相手に思えてくる。

「実際のキャスターの行動と逸話から推測する性質を考えて、一刻も早く倒す必要があると思う。だから衛宮君には悪いけど、倒す事を前提で行くわよ」

「……ああ、わかった」

見るからに無理矢理納得したって感じでだけど、衛宮君は頷いてくれた。でもきつと

お人好しの彼の事だから、いざ相対したら話し合いと言うか問い掛けと言うか、戦うよりも本心を知ろうとするんでしょうね。甘いなあと思う。

だけど衛宮君はそれで良いのかもしれない。自然とそう思ってしまった。

深夜、月明かりが照らす中を柳洞寺に向かい歩く。

人気がない静かな夜は心を落ち着かせ、同時に緊張感を高めてくれる。夜の雰囲気身を任せ、内なる闘志を高めながら歩を進める。

気持ちを高めつつ風の音に耳を傾け歩いていると、寂れたガソリンスタンドの跡地前で衛宮君が声をかけてきた。

「なあ遠坂、キャスターと戦う時の作戦で俺に出来る事って他にないのか？」

「ないわよ。衛宮君はセイバーと一緒にライダーの相手をしてもらう。それじゃ不満なの？」

「それってつまり、セイバーが戦うのを見てろって事だろ？ 女の子である遠坂やセイバーが戦うつてのに、見てるだけってのはちよつと」

対キャスター戦の作戦は単純だ。キャスターがサーヴァントを強制的に自らのサーヴァントにする『何か』を使う可能性があるので、サーヴァントの二人は直接戦わず、

アーチャーの援護を受けて私がキャスターと戦う事に決まった。

おそらく前衛としてライダーも出てくるはずなので、対ライダーはセイバーが請け負う事になった。当然セイバーのマスターである衛宮君は、セイバーと共にライダーと対峙する事になるのだが。

「衛宮君、男とか女とか関係なく、英霊であるサーヴァントと戦ったら死ぬわよ」

「でも遠坂はキャスターと戦うつもりじゃないか」

「私だってサーヴァントの相手なんて出来ないわよ」

私の返答に、衛宮君は訳が分からないと言った表情をした。衛宮君ってお人好しではあるけど落ち着いてるって訳じゃなく、感情がすぐに顔に出るわね。ここ数日の付き合いで学校での温厚なブラウニーって評判と違い、実は直情的な事がわかった。

「けど相手が『魔術師』であるキャスターなら、私にだって十分勝機があるのよ」

「それは家でも聞いた。だったらその勝機つてのを教えてくれれば、遠坂じゃなくて俺が戦ってもいいんじゃないのか？」

衛宮君の家でもした問答を繰り返す。私達の様子にアーチャーはやれやれと呆れ、セイバーは不満顔だ。アーチャーは半人前の衛宮君の身の丈に合わない発言に呆れているだけでしょうね。セイバーは女の子扱いされて侮られたとか思ってる居そう。

私としては守る対象の女の子扱いされて悪い気はしない。とは言っても戦いを衛宮

君に譲り、ただ後ろで守られるだけになるつもりはないが。むしろ私が衛宮君を守るつもりだけだ。

「魔術的防備が薄い衛宮君に秘策を教えたら、キャスターに頭の中覗かれてバレちゃうかもしれないじゃない」

「だからって見てるだけってのは」

「ふふつ、男の子としては格好つかない？」

「待て、凜」

こっそり衛宮君との会話を楽しんでいたのだが、急にアーチャーが私の前に出て手を伸ばし歩みを止めた。

「前方から見知らぬサーヴァントらしき気配が近づいてくる。動きに変化がない様子から、あちらはまだ私達に気づいてないようだが、どうする？」

アーチャーの言葉で緊張が走る。まさかキャスター退治に向かう途中で別のサーヴァントに出会う事になるとは思っていなかった。

急いで頭をフル回転させ、どう対応するか考えを巡らす。

「あつちが気づいてないって事は、策敵能力が低いマスターとサーヴァントと考えていいわね？」

「だろうな。ついでに言うと、距離があるにもかかわらず気配が読めたのでアサシンで

はあるまい」

「つて事はライダーかバーサーカーつて訊ね」

ライダーだったら戦った事があるセイバーがわかるんでしようけど、セイバーはサーヴァントの気配を感じていないようだった。感知能力ではアーチャーのほうが優れているのか、私とアーチャーの会話にセイバーは口を挟まない。

私の判断を待つアーチャー。自然体で立っているセイバー。この二人ならサーヴァント一騎相手に勝利は揺るがないと思う。でも今やるべきは見知らぬサーヴァントを倒す事ではない筈だ。だとするならば。

「今夜はキャスター討伐を優先。そのガソリンスタンド跡地の建物に隠れてやり過ぎましょう」

キャスター戦を前に余計な損耗は避けたい。アーチャーが感知したのがライダーならここで倒すのも良いけど、正体が分からないバーサーカーの相手をしたくはない。

衛宮君やセイバーも反論はないようだ。素早く移動して建物内から外の様子を窺った。ガラスが割れて窓枠だけになった窓から柳洞寺に続く道路を監視する。

5分ほど時間が経つと道の先から背の低い少女が歩いてきた。紫の衣服に包まれた銀髪の少女の人形のように整った美しさに思わず目を奪われる。

「あの娘がマスター？」

衛宮君がボソリと疑問を口にしたが、私はそれに答えられなかった。答える言葉がなかった訳でも無視をするつもりがあった訳でもない。見つめる先の少女が立ち止まり此方を真つ直ぐ見ている、その視線で動けなかったからだ。

こっちは建物の中だし、距離もある上に影になつていて見つけるのは困難なはず。暗視等の魔術を使った形跡もない。だから少女が見ているのは偶然荒廃した建物を見ているだけ。そう理性が判断したが、感情は別の答えを出していた。

明らかに私達の所在がバレている。まずい——と感じた瞬間、鈴のように澄んだ声が聞こえた。

「やっちゃえ、バーサーカー」

体を震わす轟音が闇夜に響く。目で見確認するまでもなく、隠れていた建物が破壊された音だと理解する。

「セイバー！」

私を抱え退避したアーチャーが、同じく衛宮君を抱えていたセイバーに彼らしくない声音で呼びかける。含まれていたのは焦りの色。

私と衛宮君を手早く降ろし、二人は剣を構え粉塵が上がる場所へと駆けて行く。二人

の動きに呼応するかのようになり、粉塵の中から筋骨隆々の巨大なサーヴァントが現れた。

「!!!」
 獣の咆哮を思わせる叫びを上げて二人を迎え撃つ謎のサーヴァント。狂気に彩られた赤い双眸には理性が見受けられず、野獣の如き叫びは人が放つには鬼気がありすぎた。あれはきつとバーサーカーに違いない。

瓦礫から飛び出すように向かって来たバーサーカーに対して右からはアーチャーが、左からはセイバーが攻め込む。左右の挟撃に心中でとつた！と思つたのだが。

「なっ!?!」

アーチャーとセイバーの驚きの声が重なる。

バーサーカーはアーチャーの双剣を巨大な斧のような剣の先端を地面に突き刺して耐え防ぎ、セイバーの見えない剣をあらゆる事か斧剣を手放して体を背後に倒す事で回避した。

回避したバーサーカーはバク転し体勢を立て直すと、地を蹴り猛然とアーチャーへ向かって飛び掛つた。それに合わせてアーチャーが双剣を振るが、ここで信じられない光景を目にする。バーサーカーがアーチャーの両の剣を素手で掴んだのだ。

「何っ!?!」

あまりの出来事に一瞬固まったアーチャー。その隙を逃す事無く、バーサーカーが

アーチャーに強烈な蹴りを放った。蹴った瞬間に剣から手を離れたのか、アーチャーは蹴り飛ばされ崖下へと消えていく。

その後バーサーカーはアーチャーを蹴った勢いを殺さずに回転しながら斧剣を手に取り、セイバーへと斬り付けた。セイバーはその攻撃を不可視の剣で防いだのだが……。

咆哮を上げたバーサーカーは斧剣を力任せに振り抜き、防いだはずのセイバーを山林に向かつて吹き飛ばした。

数瞬の攻防。バーサーカーらしい身体能力だけじゃなく、二人の攻撃を回避した技巧。狂化されているとは思えない武技の冴え。

マスターの眼に付与されたサーヴァントの能力を見る魔術が恨めしい。感覚だけでなく、理性でもアレの異常な強さを理解させられた。

「……………」

動く事どころか言葉さえ出せずに居た私と衛宮君へと、バーサーカーがゆつくりと顔を向ける。狂気の宿った眼に捕らえられ、全身をゾクリとした寒気が襲う。

今すぐ口を開き令呪でアーチャーを目の前に呼ばなければ死ぬ。そう理解した私の口から、怒鳴るように言葉が出た。

「衛宮君、逃げなさい！」

「逃げろ！ 遠坂！」

手に持った秘蔵の宝石で、令呪を使う間と衛宮君を逃がす為の時間を稼ごうとしたが、衛宮君の声と行動で動きが止まる。

衛宮君は強化した木刀を構えてバーサーカーへと向かつて行つた。アーチャーの宝具すら素手で掴んだバーサーカーに、強化したからつて木刀が通用する訳がないのに。

このバカ！ 命を捨てるだけの行為に臨む衛宮君と、必死の状況を覆す一手を決定的に出し遅れた自分に心中で罵倒を浴びせる。

眼に映るバーサーカーの剣がゆっくりと動き衛宮君の胸を薙ぐ——その直前、再び透き通る鈴の音のような小さな声がはつきりと聞こえた。

「待ちなさい、バーサーカー」

衛宮君の胸に剣が当たる寸前の体勢で、バーサーカーが動きを止めた。

「ダメじゃない、シロウ。近づいても隠れてるから、てつきり敵かと思つたわ」
硬直したまま、離れた場所に笑顔で立っている少女を見る。

「バーサーカー、シロウが怖がるから戻りなさい」

剣を引き、巨軀とは思えぬ跳躍で少女の横に戻つたバーサーカー。その横に立つ主であらう少女はにこやかに私達を見ていた。敵意も警戒も無く、まるで親しい友人へ向け

るかのような、いえ、それ以上に優しい眼差しで。

「シロウ！ 無事ですか！」

山林に吹き飛ばされたセイバーが戻ってきた。ほとんど同時にアーチャーも戻り、二人並んで私達の前に立つ。前に立つ二人を頼もしく思うが、それでもバーサーカーの脅威が減少した気がしない。

警戒する私達を他所に、バーサーカーのマスターらしき少女がコート裾を掴みお辞儀をする。そして顔を上げると朗らかな笑顔で挨拶を始めた。

「私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。初めまして、エミヤシロウ、トオサカリン。こんばんは、アーチャー」

ここまでではただ不信任に聞いているだけだったが、次の一言で場の空気が変わる。

「久しぶりね、セイバー。前回アインツベルンのサーヴァントだった貴女が、本当に現界してるとは思わなかったわ」

緊張で張り詰めていた空気が緩やかに霧散していく。

要因はイリヤスフィールの言葉を聴いて、警戒する気配が消え構えを解いたセイバーだ。剣を降ろしたセイバーは俯き苦渋を滲ませた声で話し出した。

「イリヤスフィール、私は……」

「勘違いしないでセイバー。別に貴女を責める気はないわ。普通に久しぶりって挨拶しただけよ」

セイバーとは逆に明るい調子のイリヤスフィール。二人の会話から推測するに、どうやら本当に前回の聖杯戦争で御三家の一角であるアインツベルンのサーヴァントとして現界していたらしい。召喚時に現代の知識を聖杯から与えられたにしても馴染みすぎだとは思っていたが、そういう訳か。

それにしても前回味方だった相手と敵対する立場になっただけにしては、セイバーの様子がおかしかった。いつももある覇気が失せて俯いたままだ。

「アーチャー、いけそう?」

「負けるつもりはないが……。正直手に余るな。セイバーと二人でなんとか、と言ったところか」

アーチャーに話しけると厳しい答えが返ってきた。召喚した日に自らを最強と言っていたアーチャーにしては自信なさげな返事だ。けど先程の攻防に佇むだけでも感じるバーサーカーの威圧を考えれば、冷静な分析かもしれない。

「呆れた。まだ私のバーサーカーと戦う気なの?」

「当然でしょ。切り札も出してないうちから負けを認める気はないわ」

「はあ、リンは好戦的なのね」

心底呆れた様子のイリヤスフィールに腹が立つ。好戦的と言われた事も不服だ。反論の言葉を考えていると、私を無視してイリヤスフィールは衛宮君に話しかけた。

「シロウも私と戦いたい？」

「え？ いや、俺は」

急に話を振られた衛宮君が言葉に詰まる。バーサーカーに特攻した緊張が抜けていないようだ。

「シロウが戦いたいって言うなら、戦ってあげてもいいわ。でもセイバーじゃバーサーカーに勝てないし、アーチャーは私を討てないでしょうけど。それでも良いなら少しだけ遊んであげるわ」

イリヤスフィールの全身から魔力が溢れ出る。同時に肌の露出した部分に赤い魔術刻印が見えた。令呪——それも私達のものよりも巨大で内包した魔力も比べ物にならないほど膨大なモノ。サーヴァントだけじゃなくて、マスターも規格外か。

「接近戦で一度競り勝ったくらいで、アーチャーを侮ってくれるわね」

先の攻防では悔しいが負けていた。けれどまだ勝負が決まった訳じゃない。そもそもアーチャーは弓兵だ。その真価を見ずに侮るなど言外に含ませたのだが。

私の言葉にイリヤスフィールは予想外の反応を示した。

「侮る？ 私が？ アーチャーを？ ふふふ、リンは面白い事を言うのね。私がアーチャーを侮る訳が無いのに。ねえ、アーチャー？」

問いかけられたアーチャーは真つ直ぐイリヤスフィールを見たまま答えない。

普通に考えれば、前回自陣營のサーヴァントだったセイバーと違い正体が分からないサーヴァントであるアーチャーを警戒している。そう考えられる。

しかしイリヤスフィールの態度に警戒している様子はない。その証拠に全身から昇つていた魔力の滾りを沈め、魔術刻印の光が消えていったからだ。分かりやすい戦闘態勢の解除。その意図を知る為にイリヤスフィールの言葉を待つ。

「こんな所でシロウに会う予定じゃなかったけど、折角だし聞いておこうかな。シロウ、貴方は何故聖杯戦争に参加しているの？」

ずつと浮かべていた笑顔を消して真剣な雰囲気になる。衛宮君は緊張が解けたのか、急激に変わったイリヤスフィールの雰囲気と臆する事なく、今度はしっかりと応えた。

「聖杯戦争で犠牲者を出さない為。それとセイバーが聖杯を求めているからだ」
「そう。セイバーに聖杯を」

衛宮君の返事を聞くとイリヤスフィールは悲しげな顔をした。マスターやサーヴァントが聖杯を求めるのは当然の事なのに何故？

「俺からも聞きたい事がある」

「うん？ 何？」

「さつきから君は俺達の事を知っているようだけど」

「ああ、その事ね。キヤスターが色々教えてくれたわ」

「イリヤスフィール！ あんた、キヤスターと手を組んでるのね！」

だからキヤスターの根城である柳洞寺の方向から歩いてきた訳か！ 緩んでいた警戒心を一気に引き上げた。……のだが。

「残念ね、リン。私に囁いていたアレの正体を知れたし、他にも色々キヤスターには教えてもらったから感謝はしてるけど、協力する気はないわ。キヤスターも望んでないでしょうしね」

言い終わるとふうと息を吐いた。キヤスターと手を組んでないのは朗報だけれど、気のせいかさつきからずつと衛宮君に対する時に比べ、私に話す時は態度が悪い気がする。

「シロウ、聖杯が欲しければキヤスター達とランサーを倒してから私の所へ来なさい」

そう言うといリヤスフィールはバーサーカーを霊体化させ、無警戒に私達の方へと歩いてくる。アーチャーやセイバーの横も平然と通り過ぎ、衛宮君の前までやってきた。

「手を出して、シロウ。私が居る城までの道のりを教えてあげる」

「ん……」

言われたとおりに手を出した衛宮君は今更だとして、敵意が無くまるで私達つて言うか、衛宮君に協力するかのようないリヤスフィールの発言をどう受け取ればいいのか。

「覚えた？」

「あ、ああ、凄いな」

「ふふ、シロウが来るのをそこで待つてるから」

手を握り何かしらの魔術で衛宮君に自分の拠点を教えたようだ。呪詛とかを植えつけられた気配もないし、まさか本当にただ協力しようとしているのだろうか。

判断に困り面識があるらしいセイバーを見る。すると警戒や困惑もなく、イリヤスフィールの行動を受け入れているようだ。これは後でしっかりと話を聞く必要があるわね。

現れた時の脅威と会話をしてからの謎めいた態度。敵なのか味方なのかわからないイリヤスフィールは、衛宮君の手を離すとそのまま歩き始めた。

「どうして俺達に協力してくれるんだ？」

離れ行く彼女の背中に向けて衛宮君が叫んだ。すると彼女は振り向き、陰のある笑顔を浮かべる。そして何も言わずに背中を向けて歩いて行った。

バーサーカー陣営との邂逅を経て柳洞寺へ。

イリヤスフィールの真意は結局わからなかったが、キャスターを倒す事には変わりがない。むしろ私達以外の陣営ともコンタクトを取っていたキャスターに更なる脅威を感じる。

柳洞寺へ続く石段をゆっくりと登ると、中段に差し掛かった頃、一人のサーヴァントが現れた。

「このような夜分に来客とは。さて、どのように持て成したのか」

着物を羽織った男のサーヴァントが私達を見ている。衛宮君とセイバーからライダーは女性だと聞いた。ならば目の前に現れたこいつは唯一不明だったアサシンだと言う事になる。

「アサシン、でいいのかしら？ 私達が石段を登る前から気配が漏れていたサーヴァントさん」

「如何にも。我が身はアサシンのサーヴァント佐々木小次郎に相違ない。生憎と今の役割は門番でな。存在を誇示するのも——」

「何であんたまで自分で真名をバラすのよ！」

どこかの魔女と同じように、自ら真名を言うアサシンに反射的に文句を言ってしまう。言葉途中で被せて文句を言ったせい、アサシンは眉を寄せた。

「やれやれ、名乗りを咎められるとは。まったく、興の乗らぬ縛りもあつたものよ」

敵ながら聞いていて頭が痛くなる。アーチャーも私と同じ気持ちなのか、訝しい眼でアサシンを見ていた。

呆れて言葉も無いを体現していた私に代わり、セイバーが一步前に出る。聖杯戦争の常識を覆すアサシンの態度に、動揺の一欠けから見せない姿はさすがだ。

「アサシン、名乗られたからには名乗るのが騎士の礼だ。私は——」

「つて、セイバーまで名乗ろうとするんじゃない！」

私や衛宮君にすら真名を明かしてないのに、まさか敵に名乗られて名乗り返そうとするとは思わなかった。生真面目な性格だとは思っていたが、生真面目すぎる。

「しかしリン」

「あくもうっ！ 衛宮君、マスターだったら止めなさい！」

「その、遠坂、セイバーの気持ちもわかるって言うか。いや、遠坂の言いたい事もわかるんだけど……」

どっち着かずの返答をした衛宮君をじくと見つめる。セイバーもマスターの指示を待っているのか衛宮君を見ている。衛宮君は私とセイバーに見つめられ、視線を左右に揺らしながら一歩後ろに下がった。

「アサシン、貴様がここで門番をしていると言う事は、キャスターと手を組んでいると言

う事か?」

「手を組むのとは違うな。キャスターが私のマスター故に従わざるをえん、と言った所よ」

アーチャーにも一言意見を言わせようと思ったのだが、私達3人を放っておいて勝手にアサシンと話し始めた。それに対しアサシンはさらりと答えたが、余りにも重要な情報に思わずアサシンの顔を見た。

どうやらキャスターがサーヴアントを支配下におけるのは決定のようだ。いくら『魔術師』のクラスの英霊とは言え、サーヴアントがサーヴアントを従えるとは。神代の魔術師は伊達ではないって事か。

アーチャーに代わり、今度は板挟みの視線から開放された衛宮君がアサシンへ話しかける。

「アサシン、俺はキャスターに聞きたい事があつて来た。だから柳洞寺にキャスターが居るなら通してくれないか?」

衛宮君が言った事は私達にしてみれば予想通りだ。しかし門番であるアサシンからすれば、キャスターと同盟交渉で決裂している私達は敵に違いない。なので無茶な要求に他ならない……筈なのだが。

「ならば押し通れ。と言いたいが、そうもいかぬか。今キャスターを呼ぶので少々待つ

ておれ」

「は？」

知らず間拔けな声が口から出る。

「ちよ、なんで普通に客を迎えるような対応をしてんのよ！」

念話でもしているのか、小声でぶつぶつ言っているアサシンを怒鳴りつける。聖杯戦争中に他勢力のマスターが訪ねて来たからって、客人として出迎えるのはおかしい。おかしい筈なのに。

「キャスターめに無駄に争うなと念押しされていな。話をしたいと言われては戦う訳にもいかぬのよ」

虚空へ向かって小声で喋っていたアサシンが苦笑しながら説明してきた。本人も不本意な様子から、もしや令呪でも使われたのだろうか。

アサシンの言葉に衛宮君の表情が明るくなる。『無駄に争うな』と言うのは、犠牲者を出したくないと言う衛宮君には嬉しかったのだろう。

私にしてもアサシンと話していて、街中の魔術陣の事や間桐邸で仕入れた情報が間違いない気がしてきた。慎二の奴がライダーを奪われた腹いせに、欺瞞に満ちた情報を言った可能性を考えてしまう。

自分の認識が本当に正しいか考えていると、前方に魔力の揺らぎを感じたので思考を

止めて顔を上げた。上げた先の空間が揺らめくとサーヴァントが現れる。

「ふふふふ、こんな夜分に訪ねて来て、私に聞きたい事とは何かしら？ 坊や」

フードを被り目元が見えないキャスターが、紫色の唇を三日月に形どり嗤っていた。

バカ正直に名乗り、私達を客人として扱ったアサシン。その後、素直に現れたキャスターを見て『もしかして』と言う気持ちが始き起こった。色々な事が勘違いで、実はキャスターが善人なのではないか、と。

しかしその気持ちは裏切られる事になる。

「キャスター、昨日間桐の屋敷に攻め入ったのはあんたなのか？」

「ええ、そうよ」

「……ライダーのマスターに聞いた。その時に妹と祖父が殺されたって。あんたがやったのか？」

キャスターの即答に衛宮君が一瞬黙り込む。すぐに続きを喋りだしたが、敵意とまではいかないが怒りが含まれた衛宮君らしくない言い方だ。

「ああ、なるほど。間桐慎二に聞いたのね」

質問には答えずにキャスターが呟く。少しの間、皆黙って返事を待っていたが一向に

答える気配がない。

「それと街中に設置された魔術陣もあなたの仕業？」

返答のないキャスターに業を煮やし、冬木のセカンドオーナーとしての質問を投げかける。

「それがどうかしたのかしら？」

「あんた！ 冬木を死都にでもするつもり！」

隠す気も無いのか、感情が籠らぬ声で悪びれる風もなく答えたキャスターを睨みつける。

「聖杯戦争に参加し、聖杯を求める我らサーヴァントやマスターならいざ知らず、貴女は無辜の民の犠牲を良しとするのでしょうか？ 答えなさい、キャスター」

セイバーが良く通る鋭い声で問い詰めた。その声を受けてキャスターは手で口を隠し、くぐもった嗤い声を上げる。それを見ていよいよ衛宮君とセイバーの表情が歪んだ。

「そうねえ。最悪の事態を避ける為なら、冬木の人間には死んでもらう事になるでしょうね」

「外道が」

アーチャーが射殺すような視線でキャスターを凝視し、唸るように声を出した。彼が

こんなに感情を露にする姿は初めて見る。

それも当然か。人類の英雄たる英霊なればこそ、無関係な人間の犠牲を、それも万を超える人々の死を自己の為に良しとしたキャスターを許せないのだろう。セイバーもアーチャーに負けぬほどの視線でキャスターを見ている。

味方である私ですらぞつとする視線を物ともせず、キャスターは愉しそうに嗤った。

「うふふふ、あはははは。セイバー、アーチャー、必要なら犠牲を厭わない私を、貴方達が責めるのね。そう、そうね。貴方達はそうじゃなくてはいけないわ」

ころころと嗤い続けるキャスターの姿は本当に楽しそうに見えた。

「貴方達との関係をどうしようか悩んでいたけれど、決めたわ。ええ、必要なものは揃えたけど、後一つ足りなかったのよ」

英霊二人の凄まじい敵意が向けられても、尚も態度を崩さず歓喜の声を上げるキャスター。

「聞きなさい、セイバー、アーチャー。我が願いは世界の変革。神に代わり私を縛る人類からの解放。聖杯を使い今世の破壊こそが我が望み」

手を広げ空を見上げて声高に叫ぶ、歓喜と狂気が入り混じった姿に恐怖を感じた。

キャスターが言う内容は個人の欲望と言うには性質が悪すぎる。何かを得るのでも、何かを成すのでもない。世界の現状が気に入らないから、世界そのものを壊すと言うの

だ。狂ってる。そう思わずにはいられない。

空を見上げていたキャスターが階下の私達へ顔を向けた。

「喜ばなさい、衛宮士郎。貴方の願いは漸く叶う。抗いなさい、遠坂凜。遠坂を継ぐ者として」

キャスターが現れてからずっと黙って立っていたアサシンが、背中の刀を抜いて前に出る。その横にもう一人、女性のサーヴァントが獣のように四つ足の体勢で現れる。

戦闘が始まる気配を察し、此方も臨戦態勢になる。

「さあ天秤の守り手、アラヤの守護者達」

ライダーらしき女性のサーヴァントは予定通りセイバーに任せ、アサシンはアーチャーが対応するように指示を出す。

「世界の敵である私を止めてみなさい」

キャスター達との戦いが始まった。

第七話

破壊と再生を繰り返して、対象の内部を組みかえていく。

横たわる被験者、間桐桜の肉体を私が望む形へと変貌させる。足されたモノ、混ぜたモノを分離させるのは魔術を以ってしても安易な事ではない。

しかし自分でも意外に思うが、治癒や再生といった魔術は私の得手とするところだ。並みの魔術師では不可能な事であっても私ならば可能である。治すのを通り越し数多の権力者の夢である若返りすら行えるが――。

「なるほど、見事ですな」

謀略を行っていた過去を思い出しかけたが、背後から感じる威圧感によつて強制的に治療に集中させられた。私の背後に座する存在が手を抜く事を許さず、彼女自身も魔術に対する造詣が深いので下手を打ったりは絶対に出来ない。

間桐桜を連れ帰ってから数時間後、漆黒の夜が明け朝日が昇り始めた頃に、漸く治療の区切りがたった。

蛇に睨まれた蛙ではないが、長時間の緊張で硬直した足を崩し後ろを振り返る。そして私を監視していた蛇に向かつて、硬くなっていた体をほぐすようにしながら抗議する。

「間桐桜の治療はとりあえず終わったわよ。だから睨むのを止めてもらえるかしら」

私の言葉を聴いてもライダーは背筋を伸ばした正座の姿勢を崩さない。眼帯で閉ざされている視線が、疲労でだらりとしている私を冷たく見ている気がする。

絶世の美女が放つ無言の圧力に屈し、コホンと咳払いをして居住まいを正す。女神アテナに嫉妬されるような美貌の持ち主が放つ威圧は心臓に悪い。

「10年に渡る間桐の影響は小さくないわ。肉体は治したけど精神のほうの問題ね。記憶を弄る手もあるけれど……」

なくしたい記憶ではあるでしょうけど、間桐桜は衛宮士郎と出会い、それすら乗り越え人としての正常な感情を取り戻した。記憶を弄れば矛盾が生じ、今彼女が持ち得ている恋心にも影響があるかもしれない。だから本人に無断で記憶操作は行わなかった。眼が覚めて忘れたいと言えば忘れさせるつもりだけど、そうは言わない気がする。

代わりと言うわけではないが、肉体の方はほぼ全ての治療が終わっている。特徴的だった間桐の青味がかかった髪色は遠坂凜と同じ黒髪になったし、黒き聖杯としての機能も十分に調べた上で取り除いた。後は細かい調整と戻った肉体に馴染むまで数日休め

ば良いだけだ。

軽く説明するとライダーが口を開いた。

「正直、貴女がここまでするとは思っていませんでした。キャスター」

「最初に会った時に約束したでしょう？ 間桐桜を助けたければ、私に協力しなさいと。貴女は約束どおり私と協力関係になったんだから、当然でしょう？」

ライダーと出会った夜に同盟を持ちかけ、彼女は私に協力する事を確約してくれた。なので私が彼女の望みに助力するのは当たり前ではある、が……。

石化の魔眼を使い間桐慎二を逃した後、私が組むに値するか試す為に戦いを仕掛けられたのは忘れられない。空中に逃れてもライダーの跳躍力は凄まじく、何度短剣や杭が刺さるかと思った事か。

既に謝罪は貰っているが、宗一郎様を怪我させた事も忘れていない。ライダー達を柳洞寺に連れて帰ってきた時に宗一郎様自身から「私がキャスターのマスターだと知らなかったのだから仕方あるまい」と、何故か私が諭されたが。

いつの間にか視線を横たわる間桐桜へと移したライダーの唇が、微かに形をかえていた。きつと眼帯の下は聖母のように優しい表情に違いまい。

場を空ける為に立ち上がりながら時計を見た。現在6時30分。もうこんな時間になつていたとは。

「ライダー、私は朝食を作りに行くわね。少ししたら貴女も食卓のある部屋へ来なさい」
返事をせずに私を見たまま首を傾げるライダー。

「表向きは私の友人として貴女を招いているんですから、朝ご飯をちゃんと食べなさいって言ってるのよ」

ライダーは宗一郎様と私の結婚（予定）のお祝いに駆けつけた国外の友人として、柳洞寺の方々には前もって言っている。その方が実体化して活動しやすく何か事があつた時に良いだろうし、眠り姫である間桐桜の世話をするにも良いだろうと考えて。もちろん、間桐桜を連れ込んでいるのは寺の人には内緒。

「とりあえず、お姉さんの御下がりで大切な服なのでしょうけど、その格好で歩き回られると困るわ。着替えを渡しておくわね。あ……貴女の魔眼を忘れてたわ……」

ライダーを仲間に引き込む算段や、柳洞寺で実体化して自由に行動できるようにとは考えていたのに、重要な事を忘れていた。

魔眼封じの眼帯をつけた外人風の美女。怪しすぎる。だからと言って魔眼封じの眼鏡なんて即席では作れない。すぐに思いつく魔眼封じの当てと言えば封印指定の魔術師、人形師の蒼崎橙子くらいか。彼女を探し出す手間や時間を差し引いても、正直微妙な人選な気がする。

うーん、うーんと困っていた私に思わぬ助け舟が。

「眼帯をしていたらまずいのは理解できます。ならば直接封印の魔術を掛ければよいのでは？ 貴女でしたら可能でしょう？」

「あら、良いの？」

「ええ、構いません」

柳洞寺での自由行動の引き換えにするには釣り合わない条件でしょうに。間桐桜を救った事実は、私が考えていた以上にライダーの信頼を得たようだ。

眼帯を外した彼女の瞳に封印の術式を埋め込む。魔眼の力を極力抑えた瞳は水晶のように美しかった。

魔眼の封印をし終え、クロゼットから適当にサイズが合いそうな地味目の洋服を取り出し渡す。ライダーのような美女があんなに扇情的な服を着て歩いていては、お寺の人達に迷惑でしょうからね。

零観さん辺りは煩惱を抑える良い修行だとか言いそうな気もするけど。でも宗一郎様や一成君には紛れもなく目に毒である。宗一郎様に限っては万が一もないと信じてはいますけどね。

理解あるマスターと目の上のたんこぶ小姑を思い出し、今から作る料理に対して自然と闘志が湧いてくる。

「ふ、ふっふっふ。見てなさい、小姑。今日こそ宗一郎様用の昆布出汁の白味噌を使った

お味噌汁を、見事に作って見せるわ！」

「あの、キャスター？」

声をかけてきたライダーが若干引いている気がするが、未婚の彼女には嫁姑問題は理解できないので仕方ない。

「ライダー、貴女に最高の朝食を味わわせてあげるわ」

「は、はあ……？」

今日こそはと決意を秘めて、襖を開け部屋を出た。

無事に朝食が終わり宗一郎様と一成君を送り出し、アサシンにも会心の出来であるお味噌汁付き朝食を食べさせ、自由な時間がやって来た。

友人であるライダーが柳洞寺に来たと言う事で今日はお手伝いはなし。折角ご友人が訪ねて来たのだからと、気を使ってくださるお寺の人達の優しさが嬉しい。

皆様方の気遣いに感謝して、早速自室に籠り必要な作業を開始した。

「外装である人間が壊れる前提の聖杯。最初から無機物としての聖杯を模倣する事も出来たでしょうに、壊れ行く様でも見たかったのかしらね」

聖杯の機能を間桐桜に生ませた子供に継がせ、量産する気だったのかもしれない。人

間をモノ、道具として考えなくては行えない外道な行為。僅かに感じていた間桐臓硯に對する罪過の気持ち薄れていく。

昨夜から続く気持ちが多量軽くなり、改めて前向きに調査を続ける。埋め込まれている術式や魔力回線など様々な事を調べた。

聖杯戦争で鍵となる小聖杯の調査に熱が入った頃に、同室しているライダーが遠慮気味に声をかけてきた。

「……キャスター、出来れば桜から取り出した心臓を持ちながら笑うのは止めてほしいのですが」

「あ、あら？ 私、笑ってたかしら？」

「はい。『ふふふ、全てを解き明かしてあげるわ』や『あはは、そういう事だったのね』といった独り言と共に」

ライダーの言葉に頬が引き曇る。言ったライダーもどこか気まずそうだ。しかしライダーの言葉はそれだけでは終わらず、視線を彷徨わせながら言葉が続く。

「ローブ姿で顔を隠し、口元だけはつきりと笑い、生の心臓を手に持ち魔力を昇らせて一人喋る姿は、その……」

最後まで言わなかったのは同盟者故の配慮だろうか。室内にとっても重い沈黙が広がる。

「ん……」

動けず時が止まった世界に少女の小さな声が響いた。それを合図に持っていた心臓を霊体化させ見えなくし、ローブ姿から現代の私服へと姿を変えた。そして同時に話題変更を行う。

「そう言えば間桐桜の事だけど、学校は暫く病欠と言う事にしてもらうようにマスターに頼んでおいたわ。だから安心して体を治せるわよ」

「そこまでして頂いたとは。貴女とマスターの宗一郎には感謝します」

無理矢理な話の流れではあるがお互いに暗黙の了解の上だ。おかげで先程のどうしようもない空気は霧散し、普通に会話を続けられた。

「貴女から受ける恩が大きすぎる」

「そうかしら」

「恩を返そうとは思いますが、少々気になっている事があります」

ライダーの雰囲気の変化した。ほんの少し、笑顔を浮かべ柔らかい雰囲気だ。

「サーヴァント契約を強制解除して自らのサーヴァントに出来るのだったら、私よりもセイバーやランサー、それかバーサーカーのほうが良かったのでは？」

冗談めかして言っているが、ライダーとしては何か思う所があるのだろう。魔術師の私が組むならライダーよりも強力な前衛と組むほうが安定した戦術を組みやすい。そ

れは確かなのだけれど。

「ランサーは論外ね。セイバーは魅力的だけど、彼女を救えるのは私じゃないもの。救える者の傍に居た方が幸せでしょう？ それとバーサーカーは絶対に嫌よ」

「おや、アルゴ―船で共に戦った方の言葉とは思えませんね」

「どうやらライダーもバーサーカーの正体を知っているようだ。彼女を倒したのがヘラクレスの祖父なので、何か感じるものがあつたのかもしれない。

それはさて置き、勘違いされないように自分の思いをはつきりとライダーへ伝える。「知ってるからこそ嫌なのよ。彼はギリシャの英雄と言つても問題ない大英雄だったわ。当然、人気があつた。女性からもね」

彼自身はそれほど軟派な性格をしていた気はしない。どちらかと言えばイアソンの方が気が多かつた。でもヘラクレスだつて一途だつた訳じゃない。

それに加え筋肉質な男性は私の好みじゃない。イアソンががっしりした体つきだつたからか、自然と拒否反応が出る。

私がメディアという存在だからか同じような体験をしたからかわからないが、私の感性でも気が多いイケメンと筋肉質な人はお断りだ。

「なるほど。貴女が自分のマスターに恋慕しているのは、誠実で一途な男性だからですか」

「な、何を言ってるのかしら?」

ライダーの突然の物言いに動揺を隠しきれない。まだ柳洞寺に来て一日も経っていないのに、私とマスターの関係を考察する時間があつたとは思えない。何を根拠に言っているのかと思えば、回答はすぐに得られた。

「昨日、セイバーと戦った後の偵察の折にアサシンが教えてくれました。『キャスターの傘下に入るなら、間違つても宗一郎に手を出さぬ事だ。女狐の嫉妬に焼かれなくてはならぬ』と、色々詳しく」

あの昼行灯は！ライダーが偵察に来ていた事を報告してないだけじゃなく、何やら余計な事をペラペラ喋つたようね。雉も鳴かずに撃たれまい。この諺はあの男が生きていた時代には無かつたらしい。仕方ないので身をもって私が教えてあげましょう。

心中で小次郎へのお仕置きを考えて嗤い、表ではライダーの誤解を解く為に笑顔で話す。

「ライダー、それは違うわ。私は宗一郎様を人として尊敬しているだけなのよ」

最初は都合の良いマスターを得る為と割り切るつもりだった。しかし葛木宗一郎と言う人は、私が思った以上にずっと誠実で器の大きな人だった。

私に助力すると決めたあの人は、命を失う事になつたとしても私を裏切らない。例え私が街の人間を犠牲にしても必要ならば良しと肯定してくれる。

絶対の信頼と許容。それを与えてくれる親族でもなく友人でもない『赤の他人』。そのような方に好意を持たずに居られようか。

私が宗一郎様に抱く感情は、男女の恋心を越えたもつと素晴らしいものである。そうライダーにしっかりと説明したのだけけれど。

「では私と宗一郎が恋仲になっても問題はないと」

「死にたいの？ ライダー？」

「冗談です。ですが、そのような反応をされると恋心を抱いているとしか思えませんね。好きなら好きとはつきり言った方が周りの為では？」

「そ、そんな事言える訳がないでしょう！」

真つ直ぐ正面から言ってくるライダーから目を逸らす。ライダーの言うように素直に言えればどれだけ楽か。生前の生い立ちの影響で、言いたくても口に出せないのだから。

目を逸らしていると、ライダーが軽い口調で聞き逃せない事を言った。

「アサシンの言うとおりですね」

「……アサシン？」

『策謀を企てる魔女に見えるが、実際はそう見せているだけの初心な女子よ。一度、宗一郎の事だからかってみると良い』。そう言ってみました」

「……………」

ライダーの言葉を聴いて、笑顔でゆつくりと立ち上がる。それから部屋を出る為に襖に手をかけたが、ライダーに言い忘れていた事があったので立ち止まり言う事にした。「セイバーやバーサーカーより、貴女のほうが私と相性がいいから頼りにしてるわよ。幻獣召喚技能や魔術に関する知識、いざと言う時の判断力。アサシンと違って、貴女には最後まで付き合ってもらわ」

言いたい事を言って部屋を出た。後ろ手で襖を閉めた時、自覚するくらいニヤリと嗤ってしまふ。

「鳴いた雉を躑けなくちゃいけないわね。雀は舌を抜かれたのだったかしら？ 燕にはどんなお仕置きが相応しいんでしょうねえ。ふふふ」

お昼ご飯を食べてから間桐桜の様子を診て、うつらうつらと休憩がてら舟を漕いでいると異変が起きた。アサシンに流れる魔力の量がグンと上がり、彼が戦闘を行っていると感じた。

「ライダー、敵が来たわ」

意識を覚醒させ、眠る間桐桜の横で読書をしていたライダーに呼びかける。声を掛け

ると頷き、私と共に霊体化して山門に向かい移動した。

アサシンに念話で呼びかけても返事がない事から、相当の苦戦を強いられていると思われた。日中に敵が来た事も驚きだが、アサシンが返事が出来ないほど苦戦してる事実
に焦ってしまふ。

相手は本気になったランサーか遊戯に来たギルガメッシュか。他の勢力が今の時間
に襲い来るとは思えないので最悪の状況だ。

山門を通過して石段で実体化し、逃げの一手を行うつもりで状況を確認すると、想像
していたのとは違う現実が待ち構えていた。

「どう？ アサシン、私のバーサーカーは強いでしょう？」

「うむ。これほどの御仁と刃を合わせられるとは。もう一勝負といきたいが、構わぬか
？」

「ふふん、バーサーカーの凄さをたつぷり味わうといいわ。やっちゃえ、バーサーカー」
「!!!」

眼下の所々が破壊された石段の中で、少女と巨人と侍が仲良く談笑していた。胡乱な
目で眺めていると、獣の咆哮を上げた巨人と侍が斬り合いを始めた。その更に下では少
女が巨人を応援している。

人払いの魔術が周辺にかかっており人が来る心配はない。ないのだが……。

目に見える光景を受け入れられず、半ば呆然と空中に立体陣を描いていく。魔力により描かれた陣が完成すると手の平を広げ前に伸ばし、力ある言葉を口にした。

「コリユキオン」

私の言葉をキーにして魔術が発動する。破壊の力を秘めた巨大な球体が巨人と侍に向かつて飛んでいった。そして斬り合う二人の間に着弾し噴煙を上げる。

「もう、いきなり何するのよ、キャスター。折角バーサーカーが戦ってたのに」
「まったくだ。興が乗った所での無粋な邪魔立ては感心できんな」

噴煙が晴れるとプンスカと怒ったイリヤスフィールと不承不承と言った体で刀を納めたアサシンが立っていた。バーサーカーは霊体化しようだが、彼も平然としてい
る。傷つけるつもりは無く手加減したとは言え、アサシンとバーサーカーの無事な姿を
見て内心でチツと舌打ちする。

こつちが文句を言いたい気持ちを抑え込み、ぶーぶー煩い2名に向かい半眼で質問を
した。

「貴方達、一体何をしていたの？」

「貴女の言うとおりのモノが存在するのか、大聖杯を確認してきたわ」

イリヤスフィールがおちやらけた態度から小聖杯の魔術師に相応しい貌に変わった。
前に会った時に私の話の真偽を問わなかったのは、大聖杯を直に見て確認するつもり

だったからか。

「聖杯の担い手として、アレの存在を知っている貴女に聞かなくてはならないわ。貴女の願いを。聖杯をどうするつもりなのかを」

幼い外見をしてはいるが、彼女は魔術師の矜持と責任をしつかりと持っている。アインツベルンの姫君、聖杯の担い手に対して相応しい態度で私も返事をしましょう。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、貴女がアインツベルンの魔術師ではなく、ユステイーツア・リズライヒ・フォン・アインツベルンを継ぐ者として問うのなら、私はそれに応えましょう。そして貴女が中立の立場になるのなら、私が失敗した時の後を託します」

私が魔術師として認めるに相応しい威厳を纏う少女を真っ直ぐ見つめる。このまま真剣な話を進めたい気持ちはあった。けれど葛木宗一郎のサーヴァントとして、柳洞寺に住む者として、どうしても先に聞かなくてはいけない事柄があった。

真剣な表情のまま、若干の怒りを乗せて眼下の者達に問うた。

「貴女の用件はわかりました。で、それでどうしてこんな惨状になっているのかしら？」

「門番として客人の力量を測ったまでの事。しかと役割を果たしたまでだが？」

「戦いではなく、話を聞きに来た相手に剣を向けては門番失格ではなくて？」

「そう言われると立つ瀬がないが、強者と一目で分かる異国の武士を前にしては仕方な

かろう？」

「うんうん。アサシンがバーサーカーと戦ってみたいって言うから戦わせてあげたの。ちゃんと気を使って人払いの魔術はかけておいたわ」

腕を組んで楽しそうに笑っているアサシンと、見た目相応の無邪気さで偉いでしょと言わんばかりのイリヤスフィール。二人の返事を聞いて、誰かが山門近くに置き忘れた掃除用の箒を黙って手に取る。

手に持つ箒をぎゅつと握り石段を下りながら、最後の理性で後輩へ助言をしておく。

「イリヤスフィール、貴女も魔術師を自覚するなら無駄な戦いは避けなさい。無為な時間や魔力の消耗は忌むべき事の一つよ」

「え〜」

少女は不満の声をあげるが大目に見ることにした。彼女は年若いし、外の世界に出てもない。遊びたい気持ちも理解できる。代わりに子供を諫めるべき存在へ罰を与えずに、なくては。

「さあ〜さあ〜きい〜、覚悟は出来てるでしょうねえ」

「ま、待て、キャストター。石段ならば魔術で直せるのだろう？ 些か軽い調子で言ったが、バーサーカーの実力を知りたいと言うのも偽らざる本音であってだな」

箒を両手で持って近づくとアサシンがじりじりと後ずさる。言い訳を述べている様

だが聞く耳はもたない。

「石段が魔術で直せる？ ええ、そうね。魔術で直す事は出来るわね」

「な、ならば特に問題は……」

「うふふふふ。直すのに私は魔力を消費するし、直し終わるまでお寺の人達は石段に近づけないし、檀家の方々がお参りに上がれないでしょ！ 実力を知るだけなら、私の念話を無視して二度三度も手合わせをする必要はなかったはずよね！」

「ぐ、確かにそうだが……」

いつもの飄々とした調子ではなく、何かに怯えたように言葉を濁す。私がアサシンに近づいて行く間にライダーがイリヤスフィールを避難させていた。協力者の気遣いのおかげで全力でお仕置きができそうだ。

溜まりに溜まった憤りを爆発させて、アサシンへと一気に迫る。しかし往生際が悪いアサシンは私から距離を取る。

「宗一郎様がお世話になつている柳洞寺の関係者へ迷惑をかけた罪！ 償いなさい！」

佐々木小次郎！

逃げ惑うアサシンを追いかけながら、息が上がるまで箒を振り下ろした。

第八話

電気ポットでお湯が沸くのを待ちながら棚の中のお菓子を探す。あのくらしいの年頃の子はどんなお菓子を喜ぶのか。お茶請けに定番の和菓子より、ケーキのような洋菓子が良いのだろうか？ そもそも和洋の前に、アインツベルンの姫君に出すにはちよつとしたお菓子程度ではダメな気もするが。

悩んでいるとピピッと沸騰を知らせる機械音が鳴ったので、自分なりに手際よくお茶を淹れる。淹れ方はまだまだ上手ではないから最高級の茶葉の力を信じて頼ったりしている。

部屋への案内を任せたライダー共々待たせては悪いので、そろそろ持っていくお菓子を決めなくては。

「和洋折衷で、金平糖やお煎餅とミニロールケーキでも持っていきましょうか」

お盆から湯呑み茶碗を持ち上げイリヤスフィールとライダー、そして自分の前にコトンと置く。それからお菓子類を乗せた菓子皿を中央に置き、自らも腰を下ろして一息つ

いてからイリヤスフィールを見ると、形容しがたい顔で私を見ていた。

「キヤスター、貴女の真名ってメディアアなの？」

その一言には少し驚いた。彼女には私の正体を明かしていなかったから。

「そうよ。よくわかったわね」

さすが小聖杯の魔術師だわ。と、関心しながら湯飲みを手に持ち傾ける。口の中にお茶の味が広がり、同時に予想よりも刺激的な熱さも感じた。慌てて湯飲みを置いて見えないように手で口を覆い、舌を冷やす為にふーふー息を吐く。

「信じられない！ 無関係の一般人に自分の真名を教えているなんて！」

「ふぁい？」

はい？ と言ったはずが熱さから立ち直つてないお口の事情でおかしな返事になつてしまう。それを気にせずイリヤスフィールが可愛らしい不器用な言葉が続けた。

「さつきここに来る途中に、住職代理って人に挨拶されたの」

通りすがりの零観さんに挨拶をされたらしい。今度は言葉を出さずに続きを待つ。

「その時にこう言つてたわ。『メディアアさんのお客なら身内も同然。何かありましたら遠慮なく言つて下さい』って」

丁寧な物言いは住職としての顔で挨拶したからかお堅い感じだけど、内容はとても嬉しいものだった。これは柳洞寺の方々にも認められたと言う事かしら。こつそり魔術

で舌の熱さを癒しつつ嬉しさを嘔み締める。

「マスターどころか魔術師でもない一般人に真名を教えるなんて、何を考えているの？」
ドンツとテーブルを叩いて気持ちを表す。彼女の前の湯飲みが揺れてお茶が零れそうになるが、すかさずライダーが手に持ち零れぬようにし、すぐさま元の位置へと戻していた。

私の真名をイリヤスフィールが知った理由は理解した。彼女が怒るのも、聖杯戦争に参加する魔術師であれば当然のことかもしれない。普通は真名を隠すものだし。でもねえ。

「一緒に住んでる人達にキャスターさんとか言われるのは嫌よ。私には父アイエテスと母エイデュイアより名付けられた、誇るべきメディアという名があるんですもの」

普通に生活している空間で、セオリー通り聖杯戦争のクラス名と呼ばれるのは嫌だった。だからと言って別の偽名を名乗るくらいなら、誇るべき真実の名を名乗りたい。それが宗一郎様を始めとした柳洞寺に住む人達に対する、何も持ちえぬ私のせめてもの敬意だ。

「大体、貴女だってバーサーカーの真名を隠してないでしょ？」

「……む。ん」

私の反論に腕を組み悩む姿すら愛らしい。イリヤスフィールの可愛らしい容姿と動

作は年上に好かれるのではなからうか？ 証拠にライダーが金平糖を手に取り餌付けしようとしていた。

「言われてみればそうね。実力に自信があれば堂々と名乗るべきよね」

金平糖を舐めながらうんうんと首を縦に振っている。彼女の場合は私と違い、自分のサーヴァントであるバーサーカーは大英雄ヘラクレスで凄いのよ！ と自慢したいからの同意であらう。

「あ、それとライダーから聞いたわ。マキリが偽りの聖杯を用意してた事。貴方がそれを使えないようにしたらしいからお礼を言っておくわね」

待っている間にライダーから間桐——マキリの顛末を聞いたらしい。イリヤスフィールは私に頭を下げた後に、視線を横たわる間桐桜へと向ける。

「マキリがここまで歪んでしまうとは思わなかったわ。驕ったものね。聖杯の器が務まるのは私だけなのに」

言葉だけを聴けば、勝手に別の聖杯を生み出そうとしていた間桐を蔑む傲岸不遜と思ふかもしれない。けれど哀愁を帯びた横顔は、同じ役目を押し付けられた間桐桜に同情しているように思えた。

イリヤスフィールの黙祷を待つてから次の話題へと移行する。むしろやつと本題に入ると言うべきか。お互いに踏み込む前の準備が終わり、聖杯の担い手と聖杯を狙う魔術師としての会話を始める。

「さて、イリヤスフィール、今回の聖杯戦争での貴女の立ち位置を明確に教えて欲しいわね。マスターの一人として参戦するのか、それとも……」

目を細め相手の出方を窺う。もし彼女がマスターとして参戦すると言うのなら、私の神殿内に居る今この場で戦うのも辞さない。そんな思いを視線に乗せたのだけど。

「アレがアインツベルンの行いで発生したと知つて、平然とマスターとして参加する事は出来ないわ。私は勝ち上がったマスターの望みを正しく叶えさせる為に行動する。それがアインツベルンの魔術師、何よりも聖杯の担い手としての義務だと思つてるわ」それが当然と言わんばかりのイリヤスフィールの態度に、私は複雑な気持ちになつてしまった。敵対はしないと望んでいた回答ではあるが、既に彼女は自分を犠牲にする覚悟があると知つて。

聖杯の器を身に宿しているのだから、冬木に来る前から覚悟が出来ていたのかもしれないが、実際に本人の口から聞くと悲しさや痛まじさと憤りを感じてしまう。

とは言え、自分の感傷に流される訳にもいかなので魔術師らしい態度で会話を続ける。

「では貴女は最後まで中立と言う事でいいのかしら？」

「ええ」

「仮に、貴女の弟と戦う事になり殺してしまっても？」

さすがにこの質問には即答しなかった。が、思ったよりもすぐに返事が来た。それも逆に私が返事に困る感じで。

「そうね。シロウが死んだとしても貴女と敵対はしないわ。でもキャスター、貴女、シロウを殺す気はないでしょう？」

自分の望みの為には他者を平然と犠牲にするのが魔術師だ。私の時代はそうではなかったが、この時代の魔術師はそうだと言う事を知っている。だからこの会話が始まってからはそれに相応しい空気を纏い、いざとなれば何でもする非情な雰囲気——目を細め鋭くしたり——を演出していたつもりなのだけど……。

「貴方が来るのを待つてる間にライダーの話聞いたけど、ライダーが襲つてた一般人を助けたり、見逃す必要も無いサクラのお兄さんを見逃したり、支配下に置いたライダーを令呪で縛らなかつたり」

イリヤスフィールからライダーの方へ顔を向けると、さつと顔を逸らされた。口止めしていなかったからって間桐の聖杯の事だけではなく、何を何処まで話しているのかこの元女神は。

「そんな貴女がシロウを殺すなんて考えられないもの」

言つてから湯飲みを両手で持ちズズズとお茶を啜っている。彼女は私がそうである事が当たり前のように言うが、ここは正しく訂正しなくてはいけない。私はそこまでお人好しでも善人でもないのだから。

「悪いけど、最悪の事態となれば衛宮士郎には死ぬよりも辛い目に遭つてもらふ事になるわよ。彼だけではなくライダー、貴女もね」

私の事を勘違いしてる二人に冷たく言い放つ。実際に衛宮士郎やライダーには最悪の事態の時、結果死ぬと分かつていてもやつてもらふ事がある。

心の内にある残酷な魔術師としての本音を見せ付けた……のだけれど。

「らしいわよ、ライダー」

「そうですか。その時は仕方ありません。それよりも貴女の方は良いのですか?」

「ん? キャスターが『最悪の事態』つて言うならしょうがないわよ」

気軽な調子で私の言葉を受け入れる二人。解せない。何故この二人はこうも和んでいるのか。イリヤスフィールは中立を宣言したのでまだわかるが、ライダーは直接死刑宣告をしたようなものだと言うのに。

お菓子を取つて世話するライダーと、それを平然と口に入れ美味しそうに食べているイリヤスフィールを見て、自分でもよくわからない敗北感に襲われる。現代の魔術師つ

ぼく振舞っていた私がまるで馬鹿みたいではないか。

私の時代の魔術師と言えば、知恵ある識者や神の代弁者などがいた。民の指導者である彼らは現代の魔術師ほど冷酷ではなかったし、神祕の秘匿も大らかだった。もちろん、月の女神に仕える巫女だった洗脳される前の私も含めてだ。

何かに負けた気分を盛大なため息と共に吐き出し、心中で「よし」と声を出し気持ちを改める。

「イリヤスフィール、立場を明確にした貴女に今度は私が応えます」

赤い瞳が私を射抜く。真剣な眼差しが心地良い。彼女が食べている最中のバリポリと鳴るお煎餅を齧る音が台無しにしているが。

「私はキャスターのクラスで招かれたコルクスの王女メディア。此度の聖杯戦争で聖杯に託す私の願いは——」

話を聞いてイリヤスフィールとライダーの表情が驚きに変わる。その後には怪訝な顔へ。話し終わると呆れた気配を二人から感じた。

「貴女って欲張りなのね」

イリヤスフィールに心底呆れた風に言われてしまう。自分でも強欲かもしれないと思っているの否定はしない。でも私が生きていた時代、神代であつてさえも望外な奇跡である聖杯。それに見合う願ひではないかと思う。私が恨む女神に対する復讐に十

分だと思うくらいには。

マスターの宗一郎様やアシンにも伝えていない私の願いを言ったせいか、体が軽くなった気がした。宗一郎様を大切に思うからこそ伝えられない願い。伝えれば、きっとあの人は私が居なくなっても命を賭けて叶えようとしてしまうから。

アシンは私の願いを知れば予定外の行動に出るかもしれないから伝えていない。教えたら宗一郎様に言いそうな気もするし。

求めていた答えを得られ満足したのか、イリヤスフィールに在った微かな緊張が霧散していく。自らの手でお菓子を選び取る姿は見た目相応に微笑ましい。まるで聖杯戦争とは無縁なただの女の子に見えた。

そうね。折角彼女が柳洞寺に来たのだし、聖杯戦争とは関係ないけどあそこに連れて行きましようか。

「私の方はまだ伝えたい事があるのだけれど、話も一区切りしたし、少し散歩でもどうかしら？ 貴女を連れて行きたい場所があるの」

ライダーと霊体化していたバーサーカーを部屋に残し、イリヤスフィールと二人で柳洞寺の裏手にある墓地へとやって来た。最初は騒がしかった彼女だったが、進むにつれ

口数が減り、ある墓石の前に来るとびたりと口を閉ざした。

道中で私が何処に連れて行こうとしているか悟っていたのだろう。イリヤスフィールは目の前に在る墓石に刻まれた文字を見たまま動かない。私も何か言うでもなく、黙ったままの彼女を静かに見守る。

『衛宮家之墓』

幼き日に別れ、誤解したまま半生を過ごし憎んでいた相手。その憎しみは心からの憎悪ではなく、娘として愛情を求めていたからではないかと思っている。

イリヤスフィールは真つ直ぐ墓石を見ていた。時が止まったかのように動かず、世界から彼女だけが切り取られた光景がそこにあった。

ここに連れてくれば怒るか泣くか、彼女が感情を激しく露にすると思っていた私は段々と不安を感じてきていた。亡くなった父親と対面させるべきだという思いは、私の身勝手な大人の理屈だったのかもしれない。

慙愧の念に堪えない私の耳に小さな声が届いた。

「キリツグ、死んじやつたんだ……」

喋ったと言うよりは零れ出たと言うべきか。本人も言った自覚があるか怪しい。だって彼女は変わらずただ前を見たままだったのだから。

その姿を見て、私は堪らずイリヤスフィールを抱きしめた。立っていた彼女は抵抗ど

ころか反応すら示さずに私の胸の内に収まる。

「イリヤスフィール、こういう時はね、怒っていいのよ。どうして自分に会う前に死んじゃったのつて。そして泣いていいの。また会いたかったと」

言葉をかけても初めは反応はなかった。しかし徐々に腕の中の少女の体が震えていく。そうして少女の嗚咽が聞こえてきて、少しだけ抱きしめる腕に力を入れた。

冬の曇り空の下、暫くの間、涙を流す少女を抱きしめ続けた。

お墓参りを終えて柳洞寺へと戻る道すがら、イリヤスフィールに話しかけた。

「貴女には私が事を成せなかった時の後を託すつもりでいるわ」

私の右手の先に居るイリヤスフィールは、真面目な話だと察して微笑みを消し表情を引き締め私を見上げた。それでもどことなく柔らかな顔ではあったが。

「私を含めたサーヴァント全員の詳細を教えてあげる」

私自身の事も教えるのは、聖杯に潜むモノに私が取り込まれ駒にされた場合に備えてだ。私の宝具『破戒すべき全ての符』は魔術儀式である聖杯戦争において、使い方次第では状況を覆す一手と成り得る危険な宝具。私の奥の手ではあるが、教えない訳にもいかなない。

それとは別に彼女には特に念を押し伝えておかなくてはいけない事がある。

「バーサーカーは強いけれど天敵と言うべきサーヴァントが一人居るわ。受肉を果たし前回の4次から生存する8番目のサーヴァント。もし彼の王、英雄王ギルガメッシュと対峙する事があれば逃げなさい」

言葉に乗せた私の想いを感じたのか、イリヤスフィールはしつかりと頷いた。バーサーカーを最強と信じて疑わない彼女の、その素直すぎる反応をどうとればいいのか。「まあ詳細は戻ってから教えてあげるわ。ライダーやバーサーカーにも教えておきたいし」

ライダーは協力者として。バーサーカーは狂化されているが、それでも彼の理性の芯は残っているはずなので教えておくべきでしょう。女神ヘラすら手を焼いた彼の理性を、人間の魔術師が施した術式ごときで全て奪えるとは思えない。

問題は英雄王に対して臣下の礼をした私は、仮初とは言え彼の臣下に他ならない。その私が英雄王の事を他者に教えるのは裏切りかもしれないが、最古の王がそんな狭量ではないと信じたい。自らの王の偉業や生き様を伝えるのは臣下の務めだと許して欲しいものである。

様々な言い訳を思い浮かべつつ右手の先、手を繋いで歩くイリヤスフィールを見た。

もしイリヤスフィールと英雄王が敵対する事になれば、私はどうするだろうか。単純

な戦闘力ですら圧倒的に劣っているし、神の血を引く私はバーサーカーと同じく『天の鎖』を使われれば為す術がない。だからこそ臣下の礼をとったわけだが——。

「あつ」

小石に躓いたのか、体勢を崩したイリヤスフィールが私の右手をギュつと強く握った。反射的に私も彼女が倒れないようにしっかりと握り返し軽く腕を持ち上げた。

「大丈夫？」

「う、うん。大丈夫」

声を掛けると顔を赤くして俯いてしまった。その反応を見て自然と笑顔になってしまった。

亡き父親のお墓参りの後に、後を託すからと言って真面目な話ばかりでは良くない気がした。私らしくないなあと思いつつも、努めて明るく軽い調子で声を出す。

「そう言えば、私とヘラクレスはアルゴー船で一緒に冒険をした事もあるのだけど——その時の話に興味はあるかしら？」

「あるある。あるわ。バーサーカーの伝承は調べたけど、実際にどうだったかは興味あるわ」

子供そのものとしか見えない、目を輝かせた彼女の姿にクスツと笑ってしまう。私が笑ったのが分かったのか、今度は「む」の不機嫌そうにしたのを見て再び笑ってしまう

た。余計に怒った彼女を宥める為に、望みの話題を提供した。

「ふふ、アルゴ船にはヘラクレスにも負けない英雄達が沢山いたわ。その中でも彼は第一の英雄と言っても過言ではなかったけれど、そんな彼に同じ弓の名手と言う事で絡む困った娘も居たりして——」

彼女も子供好きだったわね。なんて昔を思い出しながら話を進めた。話を聞くイリヤスフィールは本当に楽しそうな笑顔だった。

聖杯戦争とは関係ないヘラクレスの英雄譚やイリヤスフィールの侍女自慢、果ては私の生活の愚痴やライダーの間桐に対する辛辣な悪口等で盛り上がり、気づけばかなり時間が経っていた。

ちゃんと全てのサーヴァントの事も伝えたので問題ないとは思いますが、後から考えると少し心配だ。

イリヤスフィールのセイバーに対する恨みは、アルトリアと言う少女の願いを知って解消出来たのだろうか。義弟の未来であるアーチャーの事を教えたら、色々な物事に対してプンスカ怒っていたが大丈夫だろうか。

その後には帰宅した宗一郎様の「こんな時間だ、良ければ夕食を食べていってもらえば

「どうだ？」と言う発言で、宗一郎様を含めた4人で夕飯を食べた。ライダーやイリヤスフィールが居たからか、気を使い一成君はお寺の人達と食べたようだ。

夕食を終えイリヤスフィールを見送って自室へと戻り、「娘を送り出す母親の心境か」と楽しそうに言ったアサシンへのお仕置きを考えていると、当のアサシンから念話が入った。

『セイバーのマスターがお主に話があるらしい』

昼に箒で躰けた成果として——1発も当たらなかつたが——アサシンがまず連絡してきた事に満足感を得て立ち上がる。

衛宮士郎が話があるとやってきた。敵対した覚えはないが、私の行動の内の何個かはあの正義の味方には耐え難い事だろう。来るのが予想よりも早い、特に問題もありはしない。

時刻は既に夜。ラフな私服からキャスターのサーヴァントに相応しい姿へと変わり、転移の魔術を発動させる。向かう先で待ち受けるのは聖杯戦争と言う名の闘争の場。戦う覚悟を求められるのは坊やか、それとも私か。

転移し石段に出るとアサシンとは別の4つの気配を感じた。眼下に並ぶ少年と少女、彼等を守る様に立つ二人の英雄。

「ふふふふ、こんな夜分に訪ねて来て、私に聞きたい事とは何かしら？ 坊やか」

己が正義を持つ彼等に、冷酷なキャスターの仮面を被り相対した。

第九話

私に向けられる四つの視線。衛宮邸で会った時よりも明らかに険しい眼差し。

宙に浮かび微笑を湛え彼等を見ていると、衛宮士郎が一步前に出た。彼の瞳には力強い意思の光があり、何かしらの覚悟を秘めているようだった。

「キャスター、昨日間桐の屋敷に攻め入ったのはあんたなのか？」

「ええ、そうよ」

「……ライダーのマスターに聞いた。その時に妹と祖父が殺されたって。あんたがやったのか？」

隠す気はさらさらないので間桐に攻め入った事は即答したが、次の質問に言葉が詰まる。何やら詳しい状況まで知っているようなので、どうしたものかと。応えあぐね仕方なくどうでも良い事で間を繋ぐ。

「ああ、なるほど。間桐慎二に聞いたのね」

衛宮士郎が柳洞寺に来た理由は理解した。ライダーを奪われた間桐慎二が、衛宮士郎に助けでも求めたのだろう。口汚く私を悪者にして。

私からしてみれば、衛宮士郎が言う妹——間桐桜——を殺したというのは完全に誤解

だ。誤解故にそれを解くのは簡単ではある。眠りについていて間桐桜を見せて、間桐の家が彼女に何をしたかを詳細に語ればいい。そうすれば衛宮士郎はもちろん、遠坂凜も私の行為に賛同するはず。

しかし間桐桜としては、自分が眠っている間に恋する男に穢れた部分を知られるのは許容できないでしょうね。例え衛宮士郎が受け入れたとしても拭えない傷になる。今は同じ女性として彼女の気持ちがよくわかる。私とて、宗一郎様に知られたくない過去があるのだから。

私の口から間桐桜については話せない。結果として沈黙していたら、遠坂凜が敵意を露に言葉を投げてきた。

「それと街中に設置された魔術陣もあなたの仕業？」

「それがどうかしたのかしら？」

「あんた！ 冬木を死都にでもするつもり！」

間桐の所業と生前の自分の悪行を思い出していたせい、遠坂凜の純粋な怒りの声が心地良い。

「聖杯戦争に参加し、聖杯を求める我らサーヴァントやマスターならいざ知らず、貴女は無辜の民の犠牲を良しとすると言うのですか？ 答えなさい、キャスター」

続くセイバーの廉直な物言いに、堪えきれずに笑いが出てしまう。馬鹿にするのも

呆れるのでもなく、真つ直ぐな彼女が眩しくて羨ましくて。

カムランの丘で国を割ったモードレッドとの死闘を終え、直後に世界に身を売り聖杯を奪い合う醜い争いに参加してもなお、理想を追い続けた騎士王の輝きは色褪せる事なくそこにあつた。

正しさの中にある遠坂凜とセイバーに、ちよつとだけ感じる嫉妬を乗せて返答をした。イリヤスフィールにも言つた内容を。

「そうねえ。最悪の事態を避ける為なら、冬木の人間には死んでもらう事になるでしょうね」

「外道が」

私の言葉を聴いてすぐに敵意を膨れ上がらせたアーチャー。先程まで警戒はしていても敵意までは放つていなかったのに。

守護者の役割に嫌気がさしているはずの彼が、聖杯戦争で犠牲になるかもしれない人の為には憤る。アーチャーは今でも無為な犠牲、いえ、意味がある犠牲であろうと、きつと怒るのでしょね。

どんなに自分を否定しても、英雄に、守護者になど成らなければ良かったと思つていても、アーチャーは正義の味方だった。その事がとても嬉しかった。私の知っているアーチャーが、英雄エミヤが目の前に居る事が。

「うふふふ、あはははは。セイバー、アーチャー、必要なら犠牲を厭わない私を、貴方達が責めるのね。そう、そうね。貴方達はそうじゃなくてはいけないわ」

聖杯の仕組みを知る為のマキリの杯。器を満たす魔力の不足分を補う為の魔力。それらは既に用意した。

「貴方達との関係をどうしようか悩んでいたけれど、決めたわ。ええ、必要なものは揃えたけど、後一つ足りなかったのよ」

根源に届いてしまう奇跡や、世界の在り方を変えてしまう何か。そんなモノを目指せば須らく世界を守る存在に妨害される。

それでも特大の奇跡を望むなら、世界に気づかれずに事を起こす必要がある。手段の一つとして閉じた異界を作り、アラヤやガイアの干渉を最大限に排除する方法。けれどそれは荒耶宗蓮の失敗を考えれば無駄なのかもしれない。

では干渉を排除できないのであれば残す手段は一つ。己が望みを貫き通し、正面からねじ伏せる。過去に世界にとって脅威である魔術——魔法——に辿り着いた存在も居るのだから、決して不可能ではないはず。

しかし此方の方法も問題がある。妨害そのものを感知出来るかが不明である事。目に見えるかも不確かで、下手をすると偶然にしか思えないような事柄で妨害する事もあ

るのだから。

星を害す気が無い私の敵となるのは、人の世を守る存在。阿頼耶識。集合無意識。人類の存続を願う力。その姿が分からぬならば、形を定め写し身を与えてやればいい。

「聞きなさい、セイバー、アーチャー。我が願いは世界の変革。神に代わり私を縛る人類からの解放。聖杯を使い今世の破壊こそが我が望み」

アラヤの守護者であるアーチャー。聖杯の受領を対価に世界に身を売ったセイバー。もし私が聖杯を手にするのを邪魔するならば、手駒である彼等に力を与えるはず。手足である守護者に力を与えるのが最も効率よく干渉する方法でしょうから。

敵対者としてセイバーやアーチャーはこの上なく理想的だ。性格も能力も知っていて、英雄王と違い打倒する事が可能でしょうから。それに万が一ではあるが——彼等であれば負けても良いと思えるから。

「喜びなさい、衛宮士郎。貴方の願いは漸く叶う。抗いなさい、遠坂凜。遠坂を継ぐ者として」

彼等へと宣言する。

「さあ天秤の守り手、アラヤの守護者達。世界の敵である私を止めてみなさい」
私の為の生贄に成れと。

前に立つアサシンとライダーと共に階下の4人を待つ。此方はサーヴァントが3人。どうするつもりなのかと、表面上は余裕を持って見ていた。

補助の魔術をかけつつ、あちらの動きを待っている間にアサシンから念話が届く。

『ふむ、漸くまともな戦いが出来る訳だが』

『言いたい事があるならばつきり言いなさい。私の願いを聞いてやる気がなくなったか
しらふ。』

アサシンには私の願いを伝えていなかった。私が言った内容を簡潔に言えば、人類社会の崩壊を願っていると聞こえたはずだ。アサシンも一応英霊として冬木の地に降臨しているのだから、英霊にあるまじき私の言葉を聴いて見限られたかと思っただけだ。

『そのような事はどうでもよいが』

『どうでもいいって……』

予想外の言葉に思わず力が抜けた。魔術で念話を繋いでいるライダーも驚いたのか、一瞬だけ隣に立つアサシンに顔を向けた。それを気にする事無くアサシンは言葉を続ける。

『今回も相手を死なせてはまずいのだな?』

『ええ』

『ならば死なぬ程度に加減するでしょう』

『ごめんなさい。全力を出せないでしょうけど、そうしてくれると助かるわ』
『気にするな。お主の下で禄を食む身だ。その程度の要望には応えよう』

己の技を思う存分振るえる全力での死闘を望むアサシンに、申し訳なさから謝罪する。彼には召喚当初から、相手のサーヴアントを殺さぬように言つてある。理由は詳細は訳あつて教えていない。それなのに理由を問わず従つてくれる事には感謝したい。

全てを伝えてあるライダーは今更否はないのか黙つたままだ。彼女にしたら、間桐桜が助かつた時点で他の事はどうでもいいのかもしれない。

アサシンとの念話を終えて改めて階下を見る。すると丁度、遠坂凜がおそらく意図的に此方にも聞こえるように指示を出した。

「セイバーはライダーを！ アーチャーはアサシンを！ 私と衛宮君は、あの頭のイカれた懐古趣味のキャスターをやるわよ！」

たぶん、わざと私を怒らせて自分と戦うように仕向ける為に言つたのでしょうけど……。そうとわかつていても、私にとって脅威にならない彼女の言葉に、ほんのちよつぱりムカつときてしまう。

「ふざけた事を言う小娘ね。少しばかり躰が必要かしら」

「お生憎様、そういうのはエセ神父で十分間に合つてるのよ！」

言葉と同時に赤い宝石を投げてきた。籠められた魔術は炎系統だろうか。宙に浮かぶ私の前で爆炎が広がりがけるが。

「サーヴァントを差し置いて、そんなに暴りたいのなら相手をしてあげましょう」

手を振り炎を消し、ついだとばかりに周辺を異界化させ石段に居る全員を私の結界内へと取り込んだ。木や空さえも色が消え灰色に染まっていく光景に、遠坂凜と衛宮士郎が息を呑む。クラススキルの陣地作成や空間操作の魔術やらを使った、擬似固有結界とも言える大魔術なのだから当然よね。

遠坂凜の態度に溜飲が下がり、先の発言でのイラつきが解消される。

「ふふふ、では始めましょうか」

石段の中段辺りで睨み合う私とマスター二人。

大言を吐いたとは言え、さすがにサーヴァント相手に呐喊する気はないのか、まずは様子見のようだ。衛宮士郎の方は、単に宙に浮いている私に手が届かず困っているだけかもしれないけど。

すぐに来ないようなので軽くアサシンとライダーの様子を見てみた。

アサシンは階下でアーチャーと何か喋りながら楽しそうに斬りあっている。剣技で

は圧倒的に勝っているし、アーチャーの能力は伝えているので、『無限の剣製』でも使われない限り負けはしないと思う。しかし私の補助魔術を拒否し、実力だけで戦っているのに一抹の不安はあるわね。信頼はしてるけど。

ライダーとセイバーは石段を外れ、横の山林へと入り戦っている。お互いに障害物がある方が良いと判断したのだろう。或いは山林での再戦のつもりか。ライダーの敏捷性とセイバーの不可視の剣と魔力放出の破壊力。二度目の戦いで、ある程度手の内が分かっている二人。軍配はどちらに上がるか。

「Funf, Dreii, Vierri」

意識を他へ向けていたら、遠坂凛が呪文を唱えていた。てつきりガンドでも撃つてくるとかと思ったら、それなりの魔力を感じる宝石を3個も投じてくる。

「Der Riiese, und brennt, das ein Ende——！」

複数の宝石を使用した炎の魔術の相乗効果かしらね。さつきあつさり炎の魔術を消した事を根に持っているのか、ただの負けず嫌いなのか……両方な気がするわね。

彼女の取って置きだろう魔術を無効化するのは可能だけれど、あえて発動を止めずに魔術障壁で受ける事にした。実際にどの程度の威力の魔術を使えるのか、確認する為だったのだけれど……。発動を止めなかったので宝石の中に箆められた魔力が弾け、その後に予想以上の爆発が目の前に広がる。

無事ではあったが爆炎に驚き、半ば放心して宙から石段へと降りた。晴れていく煙の向こう側では遠坂凜が勝ち鬨を上げていた。

「あら、神代の魔術師と言っても大した事ないのね。さつきから防いでばかりで、実は魔術戦が不得意なのかしら？」

「傷一つ負わせられない癖に、口だけは達者のようね」

先程と違い魔術がしつかり発動したからか、遠坂凜が愉快な口調で話しかけてきた。敵対するとは決めたが、この戦いでセイバーやアーチャーを倒す気はない。理由はいくつかあるけど、何よりも今彼等を倒してしまえば、いざ聖杯に手が届くその時に世界の支援を受けた別の邪魔者が現れるでしょうからね。彼等を打ち倒すにしても、それは最後の最後。

だから今回の戦いは、彼等を追い返すだけで良いのだが――。

「坊や、そんな木の棒でサーヴァントと戦うなんて正気？」

遠坂凜の前に立つ、目の前の衛宮士郎をじっくりと観察する。

強化で硬度をあげた木刀を構え、鋭い目つきで私を見ながら警戒している。真剣な表情には一切の侮りはなく、年不相応な重い覚悟を覗かせていた。

聖杯戦争で犠牲者を出させない。その為であれば自分の命すら投げ打つ。彼の覚悟はそんな所だろうか。憧れの遠坂凜を守るといふ、少年らしい想いも含まれていれ

いだけど。と、これは余計なお世話か。

「あんたこそ正気か？ 冬木に住む人間を犠牲にするつてのは」

「あら？ 冗談に聞こえたの？ そうね、あれは嘘だと言えば、坊やは信じるのかしら？」

「ああ、信じる」

「衛宮君？」

正義の味方に敵対する悪役らしい戯言に想定外の返答がきた。あまりの言葉に私だけでなく、遠坂凜も訝しんで衛宮士郎を見ている。

「あんたが、さっきの言葉は嘘で真意が他にあるつて言うなら信じる」

「ちよ、ちよつと衛宮君、何を言つて」

「悪い、遠坂。俺はどうしてもキャスターが悪人だなんて思えない」

「でも、キャスターは桜や間桐の当主を」

「桜や慎二の爺さんの事は、慎二から聞いただけで見た訳じゃないだろ」

衛宮士郎の言葉に一応の理を認めたのか、口をつぐむ遠坂凜。冬木市の人間に関しては、現状未遂であるからか二人とも言及しないようだ。

それは甘美な誘い。正しい事の中に居る存在からの救いの御手。あるかもしれない未来において、アーチャーとの戦いの最中に自分の在り方が歪だと認めながらも、目指

した理想は間違っていないと言いつ切る強さを持った存在からの誘惑。

この場において最も未熟であろう彼を侮っていた。己の正義を信じ激情に任せ、闇雲に戦うだけの坊やだろうと。それがまさか、何故私を悪人だと思わないのかはわからないが、動揺させられる言葉を投げかけてくるとは。

聖杯を諦め彼と共に歩む。それはそれで幸福な事なんでしょうね。『正義』と言うのは、共にあるだけでも人の心に様々なものを与えてくれるのだから。

けれど私は自分の願いを諦められない。誰かを騙してでも、他人の願いを踏みにじつても、自分の心に嘘を吐き無関係な人間を犠牲にしたとしても。

それに、もう手を汚している私と衛宮士郎の信念は交わらない。既に引き返せぬ道なのだ。最初のマスター、アトラム・ガリアスタを葬った時に賽は投げられたのだから。

断る事に微かな未練と、私を信じようとしてくれた事への感謝からフードを上げて素顔を晒し、木刀を構えたまま私を見る衛宮士郎を真つ直ぐ見返す。

「坊や、間桐臓硯を仕留め、間桐桜を攫ったのは間違いなく私よ。そして私は、必要となれば無関係な人間も犠牲にするでしょうね」

「そう……か。残念だ……」

本当に残念そうに顔を歪めた彼に対し、胸の中にチクリと罪悪感がわく。彼を見続けることが出来ず、つい俯き視線を逸らしてしまう。

今回は敵対を宣言するだけで、後は追い返すだけと考えていた。けれど衛宮士郎の態度に少し考えを改める。

衛宮士郎は今回の聖杯戦争においてジョーカーだ。彼の力は端的であるがサーヴァントに届き得る。私が最も脅威に感じている英雄王に対するカウンターになり得る可能性を秘めている。さらにアーチャーと敵対してくれば、もしかしたら——と、自分に都合の良い妄想は考えるべきではない、か。

後顧を託すイリヤスフィールに対する義理もあるし、彼にはお土産くらいもたせましょう。本当は義理だけではない理由に自嘲しながらそう結論を出すと、遠坂凜が詰問の声を上げた。

「誰かを犠牲にするって事は、当然、自分が同じようにされる覚悟くらいあるんでしょね？ キヤスター」

声に釣られ顔を上げると——視界全てを眩い光が覆う。反射的に目を閉じ一歩後ろに下がると、すぐ傍でダンツと石畳を叩きつける重音と気迫に満ちた声が聞こえる。

「ハッ!!」

遠坂凜の殺気を纏った気配が、私と重なった。

メキリと鳴る体の軋みと重い衝撃を感じ、石段の踊り場から上段へと吹き飛ばされる。視界を奪われていたので見えた訳ではないが、見えなくとも何をされたのかは知識から理解した。魔術ではなく、肉体による直接的な攻撃を喰らったのだと。

遠坂凜の奥の手、兄弟子より授けられた八極拳。まだまだ師である言峰綺礼よりは未熟であるが、身体強化の魔術と組み合わさったそれは凶悪な威力を誇る。

肉体を駆使した武術に拠る攻撃。彼女の手の内を知ってはいたが、私は実際に彼女がそれを行うとは思っていなかったらしい。見事に虚を突かれ一撃を喰らってしまった。

彼女も魔術師であり、私の常識では魔術師と肉体を使った戦闘技術が結びつかなかった事。それと対策を用意していたのと、彼女をまだ高校生の未熟なマスターだと侮っていた驕り。

まさしく油断。彼女程度、どうにでも出来ると考えていた思い上がりから生まれた隙。

「殺った！」

勝利を確信した表情で、上段の私へと飛び掛ってくる遠坂凜。魔術師としては最上の私ではあるが、こと肉弾戦においては最弱である。追撃を喰らえば、彼女の言葉通りに討ち取られていたでしょう。

「フフ……」

「なっ!？」

追撃の拳撃が届く寸前、口から出たのは余裕の笑み。魔力で編まれた肉体を霊体へと移し寸での所で追撃を回避した。私の体が数多の蝶へと変わり飛び去る光景に、遠坂凜が驚きの声を出す。

彼女の奥の手を知っていたので二撃目は避けられた。手の内を知っていたのと、事前に対策を考えていたのが冷静に回避出来た理由だろう。でなければ混乱したまま彼女にやられていたかもしれない。彼女の手札を知ってたのに一撃貫ってしまったので、誇れる事ではないが。

対策として考えていた魔術が回避と同時に発動し、念の為に監視で繋いでいる魔力回線から触媒となる魔力を引き出し、仮初の姿へと肉体を再構築する。

別の世界でセイバーを足止めした魔術。ライダーに化けて、彼女の姿と身体能力を模した鏡像を生み出したもの。その魔術を使い、遠坂凜を相手にするには相応しい人物の血肉と魔力を触媒にしてより実像へと近づける。

飛び散っていた蝶が集まり実体を紡いでいく。本来の私ではなく、別人の姿に。本人の血と魔力を触媒にした影響か、件の人物と成った私は意識せず目の前の敵、遠坂凜へと襲い掛かった。

「くっ！…このっ！」

スーツに身を包んだ私の攻撃を遠坂凜は上手にいなしている。ルーン魔術で強化された両拳の攻撃を化勁を使い捌いている。しかし実力の差は歴然で、徐々に余裕がなくなっているようだだけだ。

別人の中に自分が居るような感覚。姿を模した人物の性格に全て任せていた私は、他人事のように自分と遠坂凜の攻防を見ていた。そして数度の攻防の後に自然と口から言葉が漏れる。

「遅い」

「ぐはっ！…きやあ!?!」

捌ききれなくなったのか、体勢が崩れた遠坂凜の腹部に拳がめり込む。それでも相手が倒れなかったからか、突き刺すような蹴りを放ち、彼女を石段横の樹へと吹き飛ばした。

「う、うう……」

「遠坂!?! くそっ!?!」

樹の根元で唸る遠坂凜に一步近づくと、衛宮士郎が間に入り木刀を振りかざしてくる。けれど彼の攻撃はセイバーやアーチャーどころか、遠坂凜にすら劣る速さ。防ぎも避けもせずに、木刀に向かい拳を振るい粉々に破壊した。

「!?」

「驚いている場合ですか？」

驚愕に目を見開いてる衛宮士郎に呆れた口調で言葉を投げ、躊躇せずに拳を見舞う。反射的に両腕でガードした衛宮士郎を、ガードなど無意味とばかりに遠坂凜と同じ場所へと吹き飛ばした。

吹き飛ばした二人の若者に視線を向け、勝者と敗者がはつきりとわかるように見下ろした。対遠坂凜の近接戦闘用に模した人物はあまりにも無駄がなく、私が思う以上に情け容赦なかった。

見下ろされた遠坂凜は憎々しげに私を睨み、ダメージからか苦しげに声を出した。

「その……姿は……」

「バゼット・フラガ・マクレミッツ。封印指定の執行者と言えますか？ ミス遠坂」

「まさか……今回の聖杯……に……協会から……術師……？」

口から血を流し、息苦しうに途切れ途切れに喋る遠坂凜。魔術での強化があったとしても、2発もの攻撃を受けた彼女は動く事すらできないようだ。

そんな彼女を守る為か、同じ様に倒れている衛宮士郎はダメージが抜けていないでしょうに、必死に起き上がりとしていた。動かぬ体に鞭打ち、自分に言い聞かせるよ

うに言葉を呟いているのが聞こえる。

「守るんだ……遠坂を……」

セイバーとアーチャーは、それぞれライダーとアサシンが抑えている。頼みとするサーヴァントが助けに來れない状況でも衛宮士郎は諦めていなかった。

起き上がれない二人を見ていると私の体が淡く輝き、その後に魔力の粒子が弾け飛びバゼットの姿から本来の私の姿へと戻った。すると自分自身に戻ったせいか、先程までは感じていなかった感情がわいてくる。でもそれは偽善に違いない。

不要な気持ちに蓋をして、手土産の一つとして衛宮士郎にヒントを与える為に魔術の正体を語り聞かせる。苦しげに疑問を口にした遠坂凜に対する返答と言う形で。

「今のは他者の姿や能力を模倣した、実体を持った虚像を生み出す魔術。とは言え、技量をそのままと言う訳にはいかないわね。本人の血と魔力を触媒に使ったけれど、それでも実力の7割か8割の再現と言う所かしら」

「あんた……アサシンのマスターを……」

何やら遠坂凜に誤解されたようだけど、敵対すると決めた今、誤解を解く必要性もないので気にせずに続けた。

「そうね、投影の一種と言えばいいかしら。物ではなく人を写す投影魔術」

「……投……影？」

私の言葉を聴いた衛宮士郎が静かに同じ言葉を紡ぎ、階下で切り結ぶアサシンとアーチャーにチラリと視線を向けた。彼の反応に内心で笑みが零れる。切欠さえあれば彼は自身の力に気づくはずだから。

視線を戻し、ふらつきながらもなんとか立ち上がった衛宮士郎は両目を閉じる。すると彼の両腕に魔力が集まり、放電現象のような閃光を放ちながら剣を実体化させていく。

衛宮士郎にとって初めての宝具の投影。未熟なのは当然で、作成する速さも再現度もアーチャーには劣るのでしようけど、その光景に私は目を奪われた。

神祕の複製。人の手には余る魔術。神の御技と言える奇跡を目にして、生前の時代を思い出し懐かしい気持ちになる。

一方で憎々しさも呼び起こされた。抗えぬ奇跡をもって人心を弄んだ女神を思い出す。その憎しみにあえて身を任せ、魔術行使の痛みで顔を歪めている衛宮士郎の周辺に魔力を流す。

此方の準備が整った頃に、白と黒の夫婦剣を複製した衛宮士郎が雄叫びを上げて斬りかかって来た。

「うおおおおおー！」

殴り飛ばされた身体のダメージと、負担の大きい慣れぬ魔術を使いボロボロの体だと

は思えない力強い踏み込み。左右からの挟撃は素人目に見ても鋭さがあつた。私の身体能力では回避するのはとても危うい攻撃。

衛宮士郎の投影は物の複製だけではなく、対象の宝具を振るつた過去の担い手の技術も読み取り自らの物とする。初の宝具投影で、十全と言えずともその効果が現れていたでしょう。

けれど刃が私に届く寸前、衛宮士郎はピタリと動きを止めた。

「くっ、これは……」

「周辺に拘束用の魔力糸を張っていたのに気づかなかつたかしら？」

「いつの間に……」

「貴方がその剣を作つてる間よ。敵の魔術行使を黙って見ているはずがないでしょう？」

動けないのに闘志を失わず睨んでくる。生前の憎しみを思い出してたせいとか、敵意を向けてくる衛宮士郎をこのまま縊り殺してしまおうかと衝動的に思ってしまう。

益もない八つ当たりの衝動。その気持ち在必死に抑える。彼は憎い女神に連なる者ではないし、私を捨てたイアソンでもない。敵対するように仕組んだのは私自身。

「衛宮……君……」

強張つた顔を手で隠し、衝動を抑え込もうとしてた私の耳にか細い女性の声が聞こえ

た。声の方向に目を向けると、上半身を樹にもたれかかった遠坂凜がポケットから必死に宝石を取り出そうとしていた。

衛宮士郎と遠坂凜。きつとこの二人は最後までお互いを裏切らずに助け合うんでしようね。

憎しみとは別の感情で黒い衝動が膨れ上がる。私には居なかった相手。私の時にはなかった関係に嫉妬してしまう。

苦々しく見てしまった遠坂凜から目を逸らし、動けぬ衛宮士郎の胸に右手を当てた。そのまま魔術で彼の体を探査し、魔術回路の様子を探る。

魔術回路が27本。そのほとんどが長年使われずに眠っていたようだ。通常の神経を擬似回路として使った形跡もあり。今回の投影で眠っていた回路の大部分を開き、足りない分を無理矢理工面したようね。

私が自分の肉体内部に何かしていると気づいたのか、衛宮士郎は急に体内に魔力を流し始めた。肉体内部で行う魔力による力づくの抵抗。そんな事をすれば当然ただでは済むはずがなく。

「ぐうあああああ!?!」

彼は激痛を感じさせる叫び声をあげた。しかしそれでも衛宮士郎は私に屈せず、自身の内部に魔力を流すのを止めようとはしない。

仄暗い感情を振り払おうと衛宮士郎の魔術回路を診ただが……。彼の叫び声が聞こえて余計に沈んでしまう。イリヤスフィールへの義理。未熟な少年への贈り物。もしもの時の英雄王への備え。理由はそれなりにあった。けれど……。

少年の叫び声を聞いたくらいで迷い始めた自分を自覚し、これではまずいと感情を止めてやると決めた行動を機械的に行う。

衛宮士郎の眠っていた魔術回路に私の魔力を流し、閉じぬように強制的にこじ開ける。加えて開いた魔術回路を意識的に使えるように、魔術行使の度に回路を作成する手順を踏まぬように、彼の潜在意識にスイッチを埋め込む。

作業時間は5分もかかっているが、その間に叫び声が聞こえなくなっていた。いつの間やら衛宮士郎は気絶してしまったようだ。両手に持っていた干将・莫耶の夫婦剣も消えていた。

魔力糸に囚われ、首を垂れる衛宮士郎の頬を優しく撫でる。

必要だと思うことは行つたので、後は動けぬマスター二人を盾にセイバーとアーチャーを追い返すだけ。今夜の騒乱も、もうすぐ終わりだと思うと少しだけ気が軽くなる。

ほつと安堵の吐息がでたのも束の間、新たな火種の兆しが目に映る。

吊るされた衛宮士郎の背後に眩い光が発生した。最初は遠坂凜がまた目くらましで

も使ったかと思った。けどその考えをすぐに否定した。膨大な魔力と空間の揺らぎを感じたから。それで何をしたのか悟ってしまふ。

まさか、同じ石段の階下にいるのに！　こんな近距離で令呪による空間転移を行うなんて！

ゾクリとした寒気と死の気配に押され、衛宮士郎の拘束を急いで解き右手で横に突き飛ばした。開いた空間、前に広がる揺らぎの中心に向かって左手を伸ばし魔術を放つ。

全力の魔術は見事に直撃し、揺らいだ空間から現れた相手に当たった。だが――

――左腕が切り飛ばされ宙を舞い、口から大量の血を吹き出し倒れてしまふ。

遠坂凜が令呪を使い転移させた存在。魔術の直撃を受けてか、赤い服が破れ上半身が血だらけのアーチャーが憤怒の表情で私を見下ろしていた。

「あ……………」

倒れ伏した私はアーチャーと言おうとしたが、代わりにコポツと軽い水音がして声が出なかった。どうやら左腕を切り飛ばされただけでなく、喉を切り裂かれたようだ。自分で放った魔術の爆風で半歩後ろに下がっていなければ、首を切断されていたかもしれない。

運よく九死に一生を得たが、だからと言って起き上がる力は湧いてこない。倒れ伏し
たまま霞む視界でアーチャーを捉え続けるのが精一杯だった。

虚ろな視線の先で、アーチャーがゆっくりと黒い剣を振り上げた。

第十話

鬼神の如き相貌のアーチャーが漆黒の刃を振り下ろす。

地に伏す私には避ける事も防ぐ事もできず、断罪の刃を受け入れるしかなかったが——
銀の光がそれを止める。

「やらせんっ！」

月光を反射し煌く日本刀が、黒い刃を受け止めていた。

「退けっ！ アサシン！」

「ふっ、敵に退けと言われて退く筈がなからう。どうしてもキャスターに止めを刺したければ、私を倒してからにするのだな！」

いつもと違い苛立ちが籠ったアサシンの声が、どこか遠くに聞こえた。そんな自分の状況をままずいと感じる。

私を庇うアサシンと殺そうと迫るアーチャーの切り合う姿が徐々にぼやけ、甲高い刃と刃がぶつかる音も段々と小さくなっていく。気づけば苦しかった呼吸の苦しさが息を潜め、失った左腕の苦痛も感じなくなった。

何とかしなければと思い、具体策を考えようとしても考えが纏まらない。そもそも考

えようにも『自分が何を考えなくてはいけないか』が分からない。

『何か』に抗おうと言う気持ちを抱えたまま、眠気に似た感覚に誘われ、私の意識は静かに闇に沈んで行つた——

——コルクスの王女として生まれ、コルクスで育つた私。

不安定だった私の精神を支え助けてくれる女神。コルクスの王として立派に国を治めていた父。人間に恋した、海神の娘である母。私を優しく守ってくれた庇護者達。

王女としての所作に対して厳しくも心根は優しい姉。楽しそうに私の後を付いてきた無邪気な弟。王の子という立場を共にしていた大事な兄弟達。

父王が治めるコルクスの人達は、明るく活気に満ちた生活をしていた。私がたまに町に出ると笑顔を向けてくれる人達ばかりだった。

温かで大切なものが溢れていた場所。

どのような怪物も打倒する英雄達と共するよりも安心できた故郷。

私は戦いなんて望んでいない。

名誉も栄光も求めていない。

ただ、帰りたいと思つた。

旅立ってから、ついに帰る事のできなかつた、あの場所へ――

――キヤス――キヤスター。

遠くから声が聞こえる。少し焦つた女性の声。

ああ、また私がかうつかり失敗して、女神ヘカテーを慌てさせてしまったのだろうか。きっと目覚めたら目の前に虚像の姿で立って怒つてるに違いない。諦めたようなため息をつきながら。

仕方なく意図的に意識を浮上させ、ゆっくり目を開ける。すると目の前に眼帯をした女性の顔があり、ぎよつとしてしまう。

「目覚めましたか。……キヤスター？」

「え？ あ、私は……」

予想していた女神ヘカテーではなく、別の女性が居た事で戸惑っていたが、眼帯の女性も同じ様に驚き戸惑いを見せていた。お互いに困つた感じで見合っていると、楽しそうな男性の声が割つて入る。

「寝ぼけた無垢なお主を堪能したい所だが、生憎とあちらがそれを許してくれそうになくてな。甚だ残念ではあるが、すぐに仮面を付け直すが良い」

横になっていた体を起こし声の方向を向いて男性を見た。着物を着て刀を抜いている男性の後ろ姿を見て頭の中の霧が晴れ、自分が何者で何をしていたかを思い出した。

同時に驚愕する。あのアサシンの傷ついた姿を見て。

「……状況は？」

「左腕と首は処置をしました。ですが、応急処置程度ですの」

眼帯の女性、ライダーに手を引かれ起き上がりながら自分の状況を確認する。

声が出なかつた喉が治り、切り飛ばされた左腕も繋がっている。しかし外見上は完治したように見えても、体内の魔力の流れに乱れを感じた。いつも通りの魔術の行使すら不安を覚え、とても無理が利きそうにはなかつた。

立ち上がった私は階下を睨んだままのアサシンを見た。致命傷は見当たらないが、歌舞いた派手な着物は所々切り裂かれていいる。おそらくライダーが私を治療する間、セイバーとアーチャーを押しえてくれたのだろう。ただ戦うだけならセイバー達を同時に相手にしてもああはなるまい。私のもとへ行かさないように無理をしたのでしょね。

よく見ればライダーも無傷ではなく、脚に傷を負っている。機動力が売りの彼女が、長所を失うような無茶をしてまで守ってくれた事に申し訳ない気持ちと感謝の念が湧いてくる。

軽く周辺を見渡すと、倒されていた場所と違う事に気づく。私が倒れていたのは中段

辺りだったはずだが、今私達3人が居るのは山門のすぐ傍の石段の頂点だった。

いつの間にか境界も消え、空の上には月が浮かんでいた。

月明かりを背にアサシンの横に並び、同じ様に階下に眼を向ける。私が倒れ伏した中段辺りに、敵意が伴った圧力を感じさせるセイバー達が立っていた。

気を失う前と変わらず敵意を向けてくるセイバー達。だが彼等も無傷と言うわけではなかった。

セイバーは左臉を縦に斬られていたし、アーチャーは私の魔術の直撃で上半身傷だらけだ。ついでに二人とも共通で、首筋に何個かの斬り傷があった。

遠坂凜は、意識はあるようだが衛宮士郎に肩を貸してもらい何とか立っている様子。衛宮士郎も外見上は怪我はないが、体内で無茶な抵抗をした後遺症か苦しそうな表情をしている。

無傷な者は存在せず、どちらの陣営も傷つき疲弊しているが戦意は止まず、場には鋭い緊張感が張り詰めていた。互いに引けず睨み合う時間が過ぎていく。

そんな緊張を孕んだ静寂を、澄んだ声が破る。

「マスター、宝具の使用許可を」

セイバーの声が聞こえた。

不可視の剣を構えたセイバーが、後ろに立つ主の返事を待つ。

衛宮士郎は返事をせずにセイバーを見て、その後私達に視線を飛ばす。真剣な眼差しではあったが、意外にも彼の視線は敵意溢れるものではなかった。

主の返事を待つ傍ら、セイバーの不可視の剣から徐々に巻いた風が吹き荒ぶ。

「セイバー……」

「シロウ、彼女は難敵です。今回は五分以上に持ち込めましたが、次に持ち越せば更なる苦戦を強いられる筈です」

セイバーは衛宮士郎の言葉を遮り自分の考えを述べる。その間にも発生する風は強くなっていく。

「時が経てば、彼女はより強大な壁となつて立ちはだかるでしょう。聖杯を求める敵として」

鞘の代用品である『風王結界』が解け始め、黄金の光が漏れ始めた。

「彼女が疲弊している今、宝具を使い決着をつけるべきです」

セイバーの声には覚悟が籠っていた。ここは引かぬと。マスターの返事がどうであれ宝具を使うつもりだと察するほどに。騎士王として数多の戦場を制した戦士としての直感だろうか。今この場で私を討つべきだと確信しているようだ。

そのマスターと反目しても譲る気のない覚悟に、衛宮士郎は頷き小さく返事をした。彼の答えに少しだけ、ほんの少しだけ心が揺れた。

けれどそれ以上に。

「ふ、ふふふ、あはははははは」

セイバーを見て笑いが込み上げてしまう。

今夜の戦いで私は油断などしなかった。セイバーとアーチャーはライダーとアサシンが押さえ、私はマスター二人と軽く手合わせをして終わるつもりだった。

柳洞寺に溜め込んだ魔力のバックアップ、魔力の供給がままならないセイバーの現状やマスター二人の腕前を考えても、勝算は十分すぎた。唯一の不確定要素はアーチャーだったが対策も考えていた。

だと言うのに私は瀕死に陥り、アサシンとライダーも予想以上に疲弊している。情けは掛けていた。セイバーやアーチャーに好感も抱いていた。高校生の二人には先達として教えるような気持ちすらあった。

しかし慢心や油断なんてしていなかった。だって、私は自分が弱い事を知っているのだから。

「ふふふふ、セイバー、貴女はどうしても私を討ちたいのね？」

込み上げる可笑しさを抑え問いかけても返答はなく、代わりに『風王結界』の封印を

完全に開放し、黄金の剣が姿を現した。

十分勝算を見込んだ戦いで死にかけて自分に對して笑いが止まらない。そして今の自分が宝具を使用する危険を理解しながらも私を倒そうとするセイバーに。

まるで運命が、メディアという英霊は第五次聖杯戦争の途中で死ぬべきだと言っているようで可笑しくなる。それにセイバーの今ここで私を倒そうとする思いが『どこ』から来ているのかを考えて、狂ってしまいそうなほど可笑しくなる。

「あはははははは、それが運命だというの？ 私は望みを叶えられず死するのが正しいと？」

いくら足掻こうと見えざる何かが邪魔をすると言うのか。それが決められた運命なのか世界の力なのかはわからない。けれど私の望みを邪魔するのが何者であったとしても、譲る事なんて出来ない。

もし私が道半ばで死ぬのが正しいとしても、受け入れて膝をついてやる訳にはいかない。

セイバーの切り札『約束された勝利の剣』を回避する事は出来る。山門は破壊されアサシンを見捨てる事にはなるだろうが。例えばアサシンを見捨てても、それが最善の一手ではあるだろう。

だけど……………。

「うふふふ、良いでしょう。セイバー、いえ、アルトリア・ペンドラゴン。誉れ高き騎士の王よ。貴女の王としての輝きで、私を試してみなさい」

セイバーの真名を告げるとアーチャーとマスター二人が驚いたが、セイバー自身は微塵の動揺も見せなかった。彼女は真つ直ぐ私を見定めたまま正眼に剣を掲げる。

「よく言った、キャスター。ならば我が宝具の力、受けてみるがいい」

星に鍛えられた神造兵装。それを扱うのは英雄の中の英雄。私の敵としてこれ以上はないくらいに相手。負けるつもりはない。このような所で朽ち果てる我が身なら、所詮そこまで。

理知的とは言い難い決意を固めた私の横にライダーがやって来た。彼女の第一は間桐桜でしようから、自分は退避する旨を告げに来たのだろう。傍から見ればセイバーの宝具を正面から受けるなど、無駄な行為にしか思えないでしょうから。彼女の力を当てるにはしていたが、対等な協力関係なのだから仕方ない。

そう思っていたのだけだ。

「キャスター、何か私が手伝う事はありますか？」

言われた言葉に驚いた。驚いた私に対して、ライダーがどことなく心外だと言う雰囲気を出し出す。

「恩人を見捨てたとあっては、目覚めたサクラに叱られてしまいます。それに、負けるつ

もりなどないのではありませんか？」

逃げるつもりなど毛頭なく、正面から打ち破るのをさも当然かのように言うライダーの言葉に笑顔が零れてしまう。

「明日も早朝から朝餉の支度があるのだろうか？　なかなか楽しい一時であったが、そろそろ幕を下ろす時間よな」

刀を納め山門の方へと下がっていくアサシン。セイバーの宝具に対して自身がやるべき事はないと悟ったのだろう。でもそれは諦めではなく、全てを私に任せてくれる信頼を感じる。明日の朝食の事を言ったのは、彼なりの激励なのかもしれない。私を守る為に全力を尽くしてくれたようだし、今度は私が頑張る番かしらね。

思った以上に頼もしく優しい二人に言葉を返す。

「ええ、ライダー、貴女が協力してくれるのなら負けないわ。ふふ、明日の朝食は期待してなさい、アサシン」

階下に立つセイバーを改めて見る。輝く聖剣に比するように彼女自身も目を引く美しさだった。誇り高い理想に身を捧げ、今も尚祖国の為に戦う救世の英雄。彼女を祝福するように、周囲には輝く光球が浮かび上がる。

此方も急いで準備を始める。

私を持つ宝具。因縁の宝物。裏切ってしまった故郷の国宝を、私が宝具として持って

いるのは皮肉にも感じるが、今は頼ろうと思う。黄金の輝きを放つそれを具現化し、ライダーへ渡した。渡すと何を行うか説明するまでもなくライダーは領きを返してきた。

それから右手を前に掲げ複雑な陣を敷く。神の御業に等しい行いである魔法、それに近い魔術を行使する為の陣。幾重にも重なった立体魔法陣を構築していく。

ライダーが自分の喉を切り裂き吹き出た血で、立体魔法陣に重なるように血の魔法陣を作り上げる。

その最中、私達の周辺にも光の玉が浮かび上がった。騎士王の輝き。世界から認められた英雄を祝福しているような神秘的な光景。

「約束された――」

階下から今まさに聖剣を振り抜かんとするセイバーの声が聞こえる。

ライダーが前に出て魔法陣を起動させ始めた。手に持つ触媒を使い、縁ある対象を具現化する召喚術。私には行使できない魔術。ライダーも自身の血に連なるモノではないので、簡単にはいかないようだ。

ライダーの召喚を後押しする形で魔法陣を組んでいるが、体中が軋み魔力が上手く流れない。不服な運命と敵対する意地で立っていたが、私の限界は予想以上に早かった、

心中に懐かしい人達の顔が浮かぶ。ヘカテー、父、母、姉に弟。走馬灯が見えて私は挫けそうになっていた。手に届かぬ物があると、生前に知っていたから。また届かない

と諦めかけていた。だけど最後にある人の顔が浮かぶ。

「……宗一郎様」

軋む体を鞭打ち、再び全力で魔法陣へと魔力を流す。女神や運命を呪う憎悪や意地ではなくて、別の想いを乗せて。

「勝利の剣!!!」

「ベルレフオーン 騎英の手綱!!!」

光に飲み込まれながら確かに見た。竜に乗った神話の女神を。

崩壊した石段の上段からセイバー達を見下ろす。

あちらも無理をしていたのだろう。セイバーは気を失い、衛宮士郎が抱きとめていた。よほど心配なのか、投げ出された形の遠坂凜が不満そうにしているのに衛宮士郎は気づいていない。

私達も余裕がある訳ではなかった。私はもちろん、無理矢理召喚した上に『騎英の手綱』で強制的に竜を従えたライダーも消耗が激しい。

戦闘行為を継続出来そうなのはアサシンとアーチャーだが、共に既に戦意はないようだ。

大量の魔力を失い気を失ったセイバー。衛宮士郎に守られるように抱かれる姿は、ただの少女のようであった。彼女が本当にただの少女として過ごせたらと、つい余計な思いを抱いてしまう。

今夜の戦いが終焉を迎え、柳洞寺の境内に入る前に騎士王のマスターへ声を掛けた。「衛宮士郎、セイバーへ伝えなさい。貴女は対価を払っていない、と」言葉だけを残し、すぐに石段を後にした。

閑話 冬の日 逢瀬 前編

朝食の片付けを終わらせた私は、誰にも見つからないようにこつそりと柳洞寺内を歩いていた。

離れのさらに奥へと、人目がないか気にしながら静かに歩を進める。そして誰も来ないだろう縁側までやって来て、再度人目がないかを確認し素早く動いた。

「はあく……」

縁側にゴロンと横になって手足を伸ばす。

「あく気持ちいい。でもちよつと寒いわね」

日差しがあつても風が吹くと冬の空気は冷たかった。なので自分の周辺にだけ暖かい空気を維持する魔術を使う。

「ん、ヌクヌクね。ああ温かい縁側で横になると、うとうとしちゃうわねえ」

横を向いて膝を抱え丸くなる。

暖かい日差しにお腹が膨れた幸福感。そこに昨夜の戦いでの疲労感が加わり、怠惰な眠気に誘われる。抗い難い眠気を抵抗することなく受け入れ……。

「なにやら人目を避けてこそこそしているかと思えば」

瞬時に眠気が覚め、ガバツと身を起こし声のした方向へ顔を向けた。

「ああああ」

「ん？ あああああ？」

「アサシンツ!!」

「如何にも」

声の主であるアサシンがにやにやと笑いながら私を見ていた。

はしたない姿を見られていたと知り羞恥で震える私を置いて、アサシンこと佐々木小次郎が聞いてもいない感想を語り始めた。

「縁側でうたた寝する異国の美女と言うのも悪くない。もう少し華やかな着物であればとも思うが。いや、しかし普段張り詰めているお主の素顔を見れたと思えば、十分かもしれぬな」

うんうんとしたり顔で頷くアサシンの言葉に顔が真っ赤になってしまう。誰にも見つかからないようにこっそり隠れてだらけていた様子を見られていたなんて。

「まさか境内を散策中にこのような物を見られるとは。いやはや、日頃の行いと言うのは大事だと言う事か」

「あ、貴方、門番の役目を放棄して」

「日中に少々の時間ならば境内を散策してよいと、お主の了解済みであったはずだが？」

不心得者が来た場合に備えて、なんと云ったか、あのワラワラするのを配備しているのだろうか？」

「竜牙兵よ！ ワラワラって言わないでくれるかしら……」

便利で使いやすいから使っているが、あのワラワラウネウネの動きは苦手だ。集団になったワラワラウネウネは、味方だけどちよつとだけ気持ち悪いと思ったり、思わなかったりする。

監視してるわよ、と言う意味を含め、竜牙兵を一度見せただけなのに的確にワラワラと表現するとは。

「つて、そんな事はどうでもいいのよ。用が済んだのならあつち行つて頂戴」

しつしつと手を振りあつちに行きなさいとアピールする。人目を避けてだらけていた事は開き直った。アサシンに見られた程度で私は逃げ出しません。

自室には間桐桜の面倒を見るライダーが居るし、本堂の方は他の方々が居るし、離れの隅っこでしか淑女の仮面を外せないのだし、逃げ場がないならもう開き直るしかないわよね。

適当な理屈を考え、再び横になり体を丸める。

「(こそ)こそせずに、堂々と自室で休めばよいだろうに」

「煩いわね。ライダーにこんな姿を見せられる訳がないでしょ」

冷血な魔女として立ち振る舞っているからこそ、ライダーと対等に接していられるのだ。彼女の真名は支配者や女王と言った意味もあり、本来ならサーヴァントの枠に収まるような女神ではない。間桐桜のありえた未来、偽りとは言え絶対悪の邪神アンリ・マユの母として可能性にでも引かれたのだろう。

思い返せば私の周りにはそんな存在ばかりだった。アルゴ船の英雄達は、どれもこれも人外過ぎた。そんな彼等を導くには、魔術を修めたちよつと賢い少女では無理だった。期待されたのは深謀を司る魔術師。だから相応しいように振舞っていたが、その成れの果てが昨夜の私か。

「あれの何人かの師であった賢者ケイローンの苦勞が偲ばれるわね。下手に正面から打倒出来ちゃう力があるから、被害を抑える苦勞をどれだけしたか」

「確かに、ぶつぶつと愚痴を吐く姿は見せられんか。見せた所で、今更ライダーの態度が変わるとは思わぬが」

昨夜、傷を負うほどの死闘を行ったというのに、私と違いアサシンは本当にいつも通りだった。不審にうろうろしてた私を見かけ心配して、あえてからかって元気付けてくれているのでしょうか。

三枝由紀香に姿を見られて紳士的に振舞う未来もあるようだから、女子供には案外優しいのかもしれない。優しく気を使われるのは、まあ嬉しくはある、が。

昨夜の事を思い出して気持ちが悪む。

「うゝ、衛宮士郎に本気の敵意を向けられたし、セイバーとアーチャーには絶対に倒すつて殺意さえ向けられたわ。遠坂凜はどうでもいいけど」

邪魔をするなら世界さえも敵に回す。行動を起こした当初から覚悟していたけど、実際にアーチャーやセイバーと敵対してみると思った以上に気持ちが沈む。

私が落ち込んでるのを察したのか、アサシンが諭すような口調で言葉をかけてくる。「時には友とさえも敵対するのは戦の常であろう。自らあのような宣言までしたのだ。後悔ばかりしても先へは進めぬぞ」

分かつてはいる。けど分かつていても、納得して受け入れられるかは別の話。

「後悔なんて生前からしてばかりよ」

「……そうか」

皮肉気に言ったら反論も同意もせずに静かな声で受け止められる。チラツとアサシンのを見ると、精悍な顔で風に揺れる外の木々に顔を向けていた。

彼も自分の過去を思い出しているのだろうか。稀有な剣才を持ちながら、名を馳せる事のなかった剣豪。彼の剣の腕は間違いなく英雄級。だと言うのに、架空の人物の代用品として呼ばれた存在。英雄足り得る力がありながら無名で終わった人生に、彼も後悔があるのだろうか。

ザアアと木々を風ぐ風の音が響く。哀愁漂う侍が立つ冬空の雰囲気と、風の音だけが聞こえるこの場は莊嚴でさえあった。寝転がる私が台無しにしていると自覚するほどに。

「後悔も次へ向かう標となるなら悪くはない、か。だがほどほどにな。余計な後悔まで背負い込みたくなければだが」

珍しい事に真つ当な忠告を残し、哀感漂う孤高の侍は去って行った。寝転がる私をそのままに。

消えた背中へ向けていた視線を戻し、ぼてつと頭を床に置いて力を抜いた。凄い遠まわしにだけど頑張れと言われた気がして、昨夜の死闘で疲弊した気持ちに少しだけ回復した気がする。

両足をぎゅつと抱え込んで猫のように丸くなる。

からかうだけじゃなくて良い所もあるじゃない。なんて笑顔を浮かべて居ると、誰かが近づいてくる気配がした。

この場所にはお寺の人は来ないはずだから、またアサシンかしらとそのままにいると。

「キャスター、頼みたい事があるのだが……」

渋いその声が言葉途中で止まるのを聞いて、我知らず体が硬直した。そして恐怖を抱

えたまま脚をずらし、隙間から窺うように声の主を確認する。

「そ、そ、宗一郎様あ……」

「……」

泣きそうな情けない私の声にも無反応のままこちらを見ている宗一郎様が立っていた。

「まだ午前中のはずですが、どうして……」

現実を受け入れられない私は救いを求めて質問した。今朝、朝食後に宗一郎様と一成君を見送ったのだから、今ここに宗一郎様がいるはずがないのだ。

「今日は日曜日で休校日だ。どうしても早めに済ませたい用事があったので出かけたが、すぐに終わったので帰ってきた」

「あ、そうなのですか……」

前に今の時期は進路関係で忙しいとおっしゃったので、きつとそれ関係の休日出勤だったのですね。一成君は生徒会長だから日曜日でも律儀に顔を出したとかでしょうか？

主婦モドキをやっているのに曜日を忘れるなんて……。ゴミ捨てとかはお寺の方がしてくださるし、曜日関係に縛られる家事をしてないせいかしらね。

リラックスする為に洋服を着崩して縁側に横になっている私。魔術で温かいから、胸

元を軽く開けているはしたない姿。

「アサシンにここに居ると聞いて来たのだが、頼み事は後にするとしよう」

「いえ、今すぐで大丈夫です。何でも仰ってください。宗一郎様」

宗一郎様が去ろうとしたので素早く立ち上がり服を整え、笑顔を浮かべて丁寧な口調で返事をした。なんとなく横になっていた姿のまま、この場を終わらせてはまずいと思つたので。

取り繕つた私を宗一郎様が真つ直ぐ見つめてた。熱が籠つていなくてもドキリとしてしまう視線。この方は嘘がないので色々な意味で緊張してしまう。

私の態度に何かしら納得したのか、宗一郎様は一度頷いてから言葉を発した。

「少し街に用事があつてな。護衛を頼みたい。出来るか？」

「はい、お任せ下さい。マスター」

護衛と言う言葉で、私達は聖杯戦争に臨むマスターとサーヴァントの顔へと変わる。どんな事があつてもマスターである宗一郎様を守る決意を心中で固めて。

もちろん、それが終わつたらアサシンをどうしてくれようか考えながら。

閑話 冬の日 逢瀬 後編

宗一郎様からの命を受けてすぐさま自室へと戻った私は、重大な選択を迫られていた。

「これがいいかしら？ いえ、もっと慎重に選ぶべきね」

大切な選択に悩んでいると、背後からライダーの疑問の声が聞こえた。

「キャスター、何をしているのですか？」

私は背後のライダーへと向き直り、胸を張って答えた。

「宗一郎様の供をする為に、着て行く服を選んでいるのよ！」

「……なるほど。頑張ってください」

持っていた本に目を落とし読書を再開したライダーに、再び背を向け服を選ぶ。

「落ちついた感じがいいけど、周りからおばさんとか思われたくないわね。だからと言つて派手で狙いすぎた服も宗一郎様と釣り合わないし。ああ、悩ましい」

「……………ハア」

マスターに恥をかかさぬように最善の洋服を選ばなくては。

服選びに集中していた私には、ライダーのため息は全く聞こえていなかった。

「宗一郎様、どこへ参りますか？」

バスで新都へとやって来た宗一郎様と私は、駅前ターミナルに立っていた。柳洞寺周辺とは違い、この辺りは人が大勢歩いていて。家族連れがちらほら見受けられるのは日曜日だからだろうか。

「まずは店を何個か回ってみるとしよう」

「はい、わかりました」

懐から取り出した手帳を見て行き先を決めた宗一郎様のやや後ろから、遅れないように付いていく。でしゃばらず、前に出ず、けれどしつかり宗一郎様がわかるように供をする。

そうして少し進むと宗一郎様が振り返った。

「聞くのを忘れていた。どこかお前が行きたい店があればそこへ行こうと思うが」

「気遣いは嬉しく思いますが、マスターのご予定を優先してください。主の予定に割り込んでまで行きたい場所などございません」

「そうか」

「はい」

問答を終えると再びスーツ姿の宗一郎様と一緒に街を歩く。

日曜日の日中、騒がしい街の気配に溶け込むように二人で歩いていると、後ろから宗一郎様を見ていて疑問が湧いた。

冬だと言うのにコートを着ない宗一郎様は寒くないのだろうか。私は白いコートを着ているので寒さを感じないが、宗一郎様のお姿は寒そうに見える。

有名な格言で、心頭滅却すれば火もまた涼しいとはある。宗一郎様ならその心境に達しているような気はする。

でもこう、精神は大丈夫でも肉体が耐えられない事もあるのでは？ お仕事で疲れた時に、いつもより少しだけ寒さに負けたりする事もあるかもしれない。

そう考えるとコートを買うのを薦めるべきかしら？ けど必要なかつたら大きなお世話だし、出すぎた真似はしたくない。だけど曲がり間違つて風邪でも引いてしまったら、勧めなかつた私の責任よね。うーうー。

「どうした？ 何かあるなら遠慮せず言うといい」

「あ、はい、宗一郎様のコートを買うべきかなって、あ」

心の中でどうしようかと悩んでいたら、振り返つた宗一郎様の言葉に対して反射的に内容を口に出してしまった。言つてから失態だと反省し、どうフォローするべきか考えていたら。

「わかった。ではコートが売っている店に行きましょう」

そう言ってくださった宗一郎様は、言葉とは裏腹に私を見たまま動かなかつた。何故私を見たままなのか、すぐにはわからなかつた。

ただどふと先程のお言葉を思い出して、何を言うべきかを悟つた。私はちよつとだけ嬉しくなつた内心を言葉に出した。

「宗一郎様に似合うコートを探したいので、紳士服のお店を回つてもよろしいですか？」
「うむ」

頷いた宗一郎様は私の前を歩き始める。

宗一郎様を知らない人から見たら、行き先を無理矢理私に言わせたように見えたかもしれない。或いはマスターとサーヴァントと言う上下関係を示す会話だつたと取られるかもしれない。

しかし実際は私の事を優先して気遣つてくれたのだ。言葉も少ないし分かり難い態度だつたけれど。

マスターの不器用な優しさに、私はクスリと笑つて後に続いた。

何軒かの紳士服のお店を回りコートを購入すると、今度は宗一郎様が手帳を見ながら

お店を案内してくださいました。

化粧品や女性服のお店。可愛い小物が置いてあるファンシーショップやぬいぐるみの専門店。バッテリーングセンターでは宗一郎様は150キロの速球を見事に打ち返してらした。私はサーヴァントだと言うのに100キロを空振りして赤面してしまった。

それから最近話題らしい恋愛映画を見て、日も暮れ夜になるとホテルの上階にあるレストランで食事をした。料理に合わせたワインを断る時の宗一郎様とソムリエのやり取りは少し面白かった。お酒を断られても、料理に合ったノンアルコール飲料を勧めるのはさすがだなとも思った。

そうやって一通り二人で街を回ってご飯を食べて、星が見える夜の時間になり私達は海岸へ来ていた。

ザアと鳴る波の音が聞こえる海岸で、他にはさくさくと私が歩いて砂を踏む音だけが聞こえる静かな夜。少し離れて私を見ていた宗一郎様に、演技をしていない素の自分发声を掛けた。

「今日、街へ来たのは私の為だったのでね」

「アサシンにお前が気疲れしていると今朝聞いた。マスターなら気晴らしをさせに街にでも連れて行ったらどうだとも言われたのにな」

「そうですか。では今日回ったお店は」

「女性を何処に連れて行けば気晴らしになるのかわからなかったからな。同僚の教師の方に伺った」

宗一郎様の同僚で女性と言うと思いつくのは藤村大河。聞いて納得する。だからデートコースの中にバッティングセンターが入っていたのか。普通の女性なら選ぶ所ではないが、彼女なら喜び勇んで金属バットを持つことだろう。

しかしアサシンも余計な気遣いをしてくれる。セイバー達との戦いで、私がそんなに疲弊してたように見えたのかしら。……見えたのでしようね。

「お気遣いありがとうございます。マスター」

「気にするな。最初に約束しただろう。助けると」

宗一郎様の返答に足を止め苦笑してしまう。聖杯戦争について何一つ知らなかった時の、約束とも言えない一番最初に交わした言葉を律儀に守ってくださいっている。それはとても嬉しくて、そして望んでいない事だった。

「宗一郎様、おそらく貴方は、私が敗れ居なくなつたとしても聖杯戦争を戦ってしまうの
でしようね」

「……」

無言で応えない宗一郎様へ向かい砂の上を歩いていく。

「私が心の中で望んでいる『幸せだった故郷へ帰りたい』という想いを叶える為に」

私の言葉に、微かだが宗一郎様が表情を変えた。

マスターとサーヴァントは魔力回線で繋がっており、記憶や深層意識が夢と言う形で相手に流れることがある。私と宗一郎様は現界する為の楔としての繋がりがりしかないが、それでもパスは通っている。

だから私の無意識の望みを宗一郎様は知っているのかもしれない。そう考えていた。そして先程の宗一郎様の態度で私の望みを夢に見たのだと確信する。

でもそれは無意識の望み。私が本当に望む物ではない。

「宗一郎様、それはダメなのです。聖杯の力なら、幸せだったあの頃の故郷に私は帰れるでしょう。同時に過去を変えて別の道筋を歩む事もできるのでしょう。ですが」

真つ直ぐ私を見る宗一郎様の頬を両手で包み込む。

「奇跡に縋り過去を変えては、私はまた奇跡を求めてしまいます。不幸な出来事がある度に、こんなのは嫌だと、不幸な過去など要らないと、一度は叶った奇跡に救いを求めて。もし奇跡に届かなかつたとしたら、今度は悲嘆にくれて過ごすでしょう」

宗一郎様の頬から手を離し、波打つ海辺へと進んで行く。

「奇跡で過去を変えた。それを成してしまえば人は無限に過去を変え、未来へと進めなくなります。どんなに過去を変えても不条理な出来事は起こります。悲しい思いもするでしょう。私達が居るこの世界は、非情で理不尽なのですから」

ザアアと一際大きな波が起こり足元まで届いた。それを無視して、私は風に吹かれ乱れた髪を押さえながら振り返る。

「私は過去の改変を聖杯に望んでいません。聖杯の力を使い故郷へ帰ろうとも思っておりません。私の願いは、私が自分で聖杯を使い叶えなくては意味が無いものです」

髪を押さえるのをやめ、真つ直ぐ宗一郎様を見つめて言う。

「だから約束してください。私が居なくなったら、貴方は日常に帰ると」

返事はなかった。宗一郎様は真つ直ぐ私を見たままだし、私もその目を見続けた。この場には波の音のみが聞こえ、時間だけが経っていく。

そうして暫くした後、短い言葉を宗一郎様より受けとった。

柳洞寺の自室に戻った私はライダーに声を掛けた。

聖杯を諦める気はないが、道半ばで破れる事もあるだろう。今日一日の宗一郎様との逢瀬で思い知った。後悔は出来る限り残して逝きたくない。

「目覚めた間桐桜に会えなくなるかも知れないけど、協力して欲しいの」

ライダーは声かけた私から横たわる間桐桜へと眼を向けた。彼女が今一番優先したのは、間桐桜がちゃんと意識を取り戻すかの確認だろう。間桐桜が意識を取り戻し、

問題がない事がわかって初めて私との協力関係になると言ってもいい。

つまりそれまでは本当ならライダーが私の頼みで命を賭ける義理はないのだが。

「わかりました。それで敵は誰に？」

ライダーは立ち上がると眼帯をしたサーヴァントの姿へと変わった。そういう反応をしてくれると思っていたが、やる気に溢れた彼女の態度に嬉しくなる。感謝の印にライダーに笑顔を向ける。

それから一旦深呼吸をして笑顔を消し気持ちを引き締めた。自分の内に覚悟があるか問い掛け、強い気持ちがあるのを確認し、決意をこめて言葉にする。

「敵はランサーとそのマスター。それと最強のサーヴァント、英雄王ギルガメッシュよ」

第十一話

星が舞う夜空の下、私とライダーは敵地へとやって来た。

夜の静寂に彩られ、物音一つしない教会の敷地をゆっくり歩く。冬だからとは言え、敷地内の空気は冷えすぎているように感じた。迷える者を迎え入れる教会にしては、こは死の匂いがあり過ぎる。

十二分に警戒しながら、物音一つしない中を進んでいく。

英雄王その人はもちろんだが、今回の聖杯戦争の黒幕とも言える言峰綺礼と彼に従うランサーも油断のできる相手ではない。

ランサーに関して言うまでもないが、マスターの言峰綺礼は教会の元代行者で、その実力は聖典を貸し与えられる候補者にも選ばれたほどのはずだ。全盛期ではあの不死者の第七位代行者に近しい実力だったとすれば、衰えた今とて油断はできない。

敵の厄介さに不安を覚え、つい後ろにライダーが居るかを確認してしまふ。頼もしいことに彼女は既に短剣を手に持ち臨戦態勢だ。

ライダーが居る安心感で油断しないように、カツンカツンと石畳の上を警戒して進んでいくと、気づけば教会の扉まで何事もなく辿り着いた。

「敷地に入った段階で歓迎されると思っていたのに、誰も出てこないわね」

「出来ればランサーを仕留めてから中の搜索をしたかったのですが、残念ですな」

剣呑なライダーに返答が思いつかず困った顔を向けてしまう。

いざとなればランサーを討つのもやぶさかではないが、最初からランサーを討つ気の彼女をどうしたものかしら。今聖杯に『質の高い英霊の魔力』を供給されたくはないのだけだ。

でも私のこの気持ちは遠坂凜風に言えば心の贅肉かもしれない。理想を追って覚悟を決めきれない甘さ。愛憎どちらかだけに心を置けなかった過去の私。サーヴァントとなつた今も中途半端なんでしょうね。

「行くわよ。ライダー」

自嘲の笑みを消して教会の扉を開けた。思ったよりも古いのか、蝶番が軋むギキイと鳴る大きな音が教会内に鳴り響く。

誰も居ない教会内は立派な柱に多くの座席があるが、その質の良さに比べ寂寥感漂う様子だった。前に来た時には感じなかったが、主が不在故の物寂しさだろうか。それとも正しく神に仕える存在が10年前からいないからか。

礼拝堂の中を半ばまで進み全体を見渡してみた。誰かが居たような残滓は感じるが、少なくとも今現在隠れ潜む存在は感じない。

魔術的な監視も無いのを確認したので手を振り魔術を発動させる。すると私の前にふらふらと輝き浮かぶウイスプのような光球が浮かび上がった。

「油断せずに進みましよう。これが魔力を感知して案内してくれるわ」

ライダーは私の言葉に黙って頷いた。敷地に入ってから未だに何も無い事にかなり警戒しているようだ。

私達は光球に導かれ奥へと進んで行った。生きた存在の魔力を追う光球。何処に居るかわからぬ存在を探すのには便利だが。

「着いた先に言峰綺礼が居れば、おそらく英雄王かランサーのどちらか、或いは両方がいるはずよ。その時にはライダー」

「わかっています。私が二人を抑えているうちに」

「ええ、何とかしてみせるわ」

中庭に沿った通路で改めて対応を確認した。囿になるライダーがどれくらいの時間を稼げるかはわからない。残念ながら英雄王が本気になれば、5秒にも満たない時間で私共々殺されるだろう。

だが例え殺されたとしても後悔だけはしない。私が死ぬのは必ず事を成してからだ。

「ハイ、ね」

光球が地下へ降りる階段の前で止まった。

下る階段は先が見えず暗闇が広がっている。仄かに夜を照らす月明かりもハデスの領域は照らせないようだ。神の家に冥府の領域が広がっているのは皮肉なものね。

先の見えぬ階段を降り進む。暗闇の中の空気は外よりもさらに冷たく凍える。単に地下が寒いだけという訳ではないのでしようね。

手すりも何もない階段を下っていくと広い場所にたよようだ。松明の一つもない場所だったので魔術で明かりを灯す。よく見えるようになったそこは。

「地下礼拝堂？ いえ、聖櫃の安置所かしら」

簡素で無駄がない清涼な装飾ばかりの部屋だ。けれど微かに感じる。部屋の雰囲気とは反対の悪意を。

光球がゆらゆらと揺れて安置所を彷徨い、ある一点で静止した。先には壁しかない行き止まり。静止したまま動かない光球を挟み壁と対峙する。どうやらここが目的の場所のようだ。

「キャスター、来たようです」

憎々しげに睨んでいるとライダーが警戒を促してくる。背中からジャラリと鎖の音が聞こえ、彼女が既に戦闘体勢だとわかった。私も壁から目を離し、先ほど自分が降りてきた階段の方へと向き直った。いつでも魔術を放てる心構えで。

前衛として前に立つライダーと共に最大限の迎撃体制を整えていると、私達に比べ随

分と軽い調子の声が聞こえてきた。

「待って待って、こっちは戦う気はねえよ。あんたらがここで何をするのか、興味があるから来ただけだ」

闇から現れたのは両手を軽く挙げた青い槍兵。敵意がない事を示す為かゲイ・ボルグを持つておらず、無手の状態で立っている。

「そのような戯言を信じろと？」

完全にやる気になっているライダーは、ランサーの言葉に耳を貸す気がないらしい。脚に力が入り何時でも飛びかかれる状態だ。それに対してランサーはと言うと。

「まあそうなるか。やるならやるでかまわねえが、一応言っておくぜ。こっちは雇い主にあんたらを監視するように言われててな。監視できない地下に入られたから仕方なく来たって訳だ。だから特にやる気はないんだが」

言葉とは裏腹に両手を下ろし赤い魔槍を手に持った。それからニヤリと不敵に笑い、ライダーにさあ来いと言っているように見えた。

そんな二人に向かい私は呆れた調子で言ってしまう。

「ライダー、私達が来た目的は戦う事ではないでしょう？ 戦いを避けられるのなら避けるべきよ。それとランサー、貴方は監視が目的なのでしょう？ 無闇に挑発して言峰綺礼の命に背いて良いのかしら？」

睨みあっていた両者が、私の言葉を聞いて徐々に臨戦態勢を崩していく。

ランサーが戦うつもりだったのなら迎え撃てばいいが、出来れば戦いたくはない。彼の『刺し穿つ死棘の槍』はまさしく必殺の宝具。ただ殺す。それだけに特化した凶悪な魔槍なのだから。

戦うつもりはなくなったようだが未だ警戒を解いていないライダーを前にして、ランサーはさっさと魔槍の実体化を解き此方に歩いてくる。気軽に話しかけてきながら。

「なんだ、やっぱり俺のマスターが誰か知ってたのか」

「貴方のマスターが自分からばらしたのよ」

「チツ、あの野郎。監視を命じたくせにそういった情報を教えやがらねえ」

凶々しいと言うか馴れ馴れしいと言うか、世間話をする風に近づいてきたランサーは平然とライダーの前までやってきた。しっかりとその手に短剣をもったライダーの前に、だ。

「で、キャスター、結局ここで何をしようとしてんだ？」

正直に言うところという男性は好きになれない。戦う気がないのをアピールする為にならざるに話しかけてきているのでしようけど。

敵意がないのを良しとして、再び壁に向き直った。そのまま背後のランサーへ言葉を投げる。

「貴方のマスターがやっていた事を暴きに來たのよ」

言葉と同時に壁に向かい魔術を放つ。地下の部屋の行き止まりのはずの壁はガラガラと崩れ落ち、隠されていたモノを露にした。それを目にした瞬間、部屋の温度が数度下がった気がする。

「……」これをあいつがやったってのか」

「そうよ」

壁の先にあつたのは植えられたモノ。植木鉢に植えられた植物のようになっていた人だったモノ達。それらは作り物ではなく、小さく聞こえる呻き声が彼等が生きている事を訴える。

英雄王を現界させ続ける為に言峰綺礼が用意した生贄達。魔力炉として、いえ、魔力を垂れ流す物として生かさず殺さず苦悶の声を上げ続けるだけのモノにされた、10年前に孤児となつた子供達。

地獄のような光景にライダーの気配が変わる。ランサーを警戒する気配が潜み、冷め切つた冷たい空気を纏う。何も言葉を発しないが、あえて何も言わないのだろう。ここへ来る目的として事前に教えていたのだから。実際に目にして憤りだけは隠せないよ
うだけだ。

「これを見て貴方はどう思うのかしら？ 秘密主義のマスターに反旗を翻そうとか思っ

たりするんじゃない？」

本来のマスターであるバゼットから不意打ちでマスター権を奪われ、本気の戦いが出来ない望まぬ偵察を申し付けられた彼なら、自主的に私に協力してくれるかもしれない。そう思ったのだけだ。

「このガキ共が何故こうなってるのかは知らねえが、碌な理由じゃないってのはなんとなくわかる。けどよ、言峰の奴にもそうするだけの理由があつたんだろ」

思つたよりも淡白な言葉に驚いた。彼はもつと正義感溢れる、とまでは言わないが熱血漢だと思つていた。でも考えてみれば彼が子供の犠牲を目にするのは初めてではないのだったわね。赤枝の騎士団の戦士見習いの少年達が、彼の為に戦場に出て全員死んだ時も、彼は仇は討つても復讐はしなかつたのだから。

歴戦の戦士としての観点では、子供だからと言つて不幸も犠牲も免れるわけじゃない。そう知つているし納得しているのかもしれない。そう考えたのだけだ。

「だが気に入らねえな」

はつきりと嫌悪を露にした呟きが耳に入る。

「ふふ、なら言峰綺礼の束縛を解いてあげましょうか？」

『破戒すべき全ての符』を見せて誘惑する甘言を口にする。光の御子を陣営に取り込めれば、戦力の増強は間違いない。例えセイバーとアーチャーが攻めてきても確実に返

り討ちにするだけの戦力が整う。

私の誘いにランサーはすぐに返答してきた。

「本人に問い質しもしねえ内から裏切る訳にはいかねえな」

「そう、残念。主に対する裏切りと、敵でも女を討った事だけはないのだったかしら。そういう生き方も大変ね」

「……なんで知ってやがる」

現界する時に聖杯から過去の英雄達の大まかな逸話を知識として与えられるが、詳細を知るわけじゃないはずなのでランサーは驚いたようだ。むしろ驚いたと言うより、知られたくなかった事なのか苦い顔と言うべきか。

「貴方に聞いたのよ」

波止場で釣りをしながら衛宮士郎に語った話。未来で語るかもしれない話。それを見た事があるだけで、事実をそのまま言ったけれど、冗談と思われたのか溜息一つの返事をされた。

ランサーに誘いを断られたので『破戒すべき全ての符』を消して子供達の方へと歩いていく。幸いなのか不幸なのか、彼等はしっかりと生きている。生きて居るなら体を再生させ記憶を消し、幼い赤子にして改めて幸せな人生をやり直してもらおう。

治療を開始するとライダーも手伝いに来てくれた。ランサーが生前女性を討たな

かったと知って警戒を解いたのかしらね。偶々だったらしいが今もって彼がその矜持を貫いていれば、私達二人は彼に討たれることはないわけだし。

女二人で作業を開始したのをボケツと見ている男が一人。暇そうにしていることですし、声を掛けることにしましょうか。

「ちよつとランサー、貴方もルーン魔術を使えるんだから手伝いなさい」

「ああ？　なんで俺が」

「助けられる子供を助けるのに理由がいるのかしら？」

「はあ、へいへい、わかりましたよ」

渋々な態度だったが、しっかりと手早くルーンを刻み補助をしてくれる。ライダーは結界を張り邪魔な干渉がないようにしつつ、場の魔力を整えていた。

二人の行動を見て私も気合を入れなおす。魔力を大量に消費するが、この子達が幸せを掴める様に。

「んで、次は何処へ何しに向かっているのか教えてくれねえのか」

何故かだからだと着いて来るランサーが不満を零す。子供達を助けるのに協力してくれたのはいいのだが、それから平然と着いて来る。

体を治し赤子まで若返らせた子供達は、十分寒さを凌げる様に防寒させて籠に寝かせた状態で市役所の入り口へ置いてきた。幸運を呼び込む護符をそれぞれ一人一人に持たせて。

人生をやり直すからと言って、彼等が幸せになれるかはわからない。所詮これは私のエゴだ。今後の彼等の人生に責任を持たず、救った気になっただけのエゴ。

無駄な事かもしれないが、今日宗一郎様と街を回り吹っ切ったのだ。泡沫の夢なら、夢見てる間は我俣を通して勝手にしよう。万全を期してアーチャーに殺されかけたのも影響しているかしらね。頑張ってもダメな時はダメなら開き直ってしまえってね。

そんな訳で英雄王と敵対するかもしれないが、教会に居た子供達を助けたのだけ。子供達を運ぶ道中にランサーに聞いた話では、言峰綺礼は行方知れずらしい。指示は念話で送ってくるので生きては居るそうだが、英雄王も言峰と共に居ると考えて、彼等が揃って行方不明。嫌な予感しかししないわね。

手遅れかもしれないが念の為に歩きながら魔術を組み上げる。髪を3本ほど抜いて魔力を通し、薄紫色のガラス細工のような鳥を作り上げ空へと飛び立たせた。イリヤスフィールが居る郊外の城へ、メッセージを携えて。

「見た目も絢爛で見事なもんだなあ。キャスターのクラスは伊達じゃないってか」

夜空を見上げイリヤスフィールの無事を祈っていた私の横で、ランサーが茶々を入れ

てくる。この男は……。無駄な事を喋らないライダーを見習って欲しいものだ。わざわざ洋服を買ってあげたのだから。

街中をうろうろするからライダーと私は私服を用意していたが、ランサーは持つてきていなかった。という事は、子供達を運ぶ時に実体化したランサーは、青い戦装束姿で居るしかない訳で。

人避けの魔術を使いながら街中を進むのも憚られた為、仕方なく途中で深夜までやっているお店を探し洋服を買う羽目になった。宗一郎様のコートを選んで買った日に、別の男の服を買うことになるなんて。

苦々しく暇で小うるさいランサーを睨みつけた。

「もう貴方が手伝う事はないから付いて来なくていいわよ」

「まあそう言うなよ。この後どうするのか興味あるしよ」

どうせ追い払っても距離を取ってついてくるのでしょね。彼の今の任務は、私達の監視らしいから。遠くから監視されるのと今みたいに一緒に歩かれるのは、どちらがいいと問われたらどちらも嫌だけど、面倒になったのでこのまま放置する事にした。ライダーは最初からランサーを半ば無視しているし、彼女に習い私もそうする事にしましう。

にやにやとどうでもいい事を話しながらついてきたランサーだが、目的地に近づくと

つれて口数が減っていった。私達3人は喋る事無く寂れた公園内を進んで行く。

夜だから、と言う訳ではなく、ここは人が近寄りがたい雰囲気放っている。木々と所々にベンチがあるだけの公園。広さの割りに人工物が少なく植物も多いと言えない公園内は自然と寂しさを感じ、まるで来るものを拒絶しているようだ。

公園内の丁度真ん中付近に来た所で、私は錫杖を実体化させた。そして空を見上げ、雲の隙間から覗く月へ向かって杖を掲げる。先端が月を表す愛用の杖は月光を受けて淡く光った。

ゆるりと大きく杖を回し、踊るように体ごと幾度も回る。公園内に居る報われぬ怨霊と化した魂達へ、道を示すように大きく振り、天への道を開く。

「……魂送りが。昔似た様なのを見た事がある。その時の場所と同じ様にここも迷って居る奴らが多くいるが、何か曰く付きの場所なのか？」

「……10年前の聖杯戦争。その時の犠牲者達よ。ここら一帯をね、地獄の業火が焼き尽くしたの」

集まる魂達が迷わぬ様に踊りながら答えた。ランサーは私の返答に「そうか」と小さく答えるだけだった。

ライダーとランサーは、この地に囚われた犠牲者達の魂が青い光となつて月光の道を上り、世界へ溶けていくのを黙って見ていた。

不条理な死に憎悪を抱え、災厄の泥に塗れ囚われた魂達。私の周りに集まり怨む声が聞こえる度に、私の体に苦痛が走る。その痛みに耐えながら杖を回し空へ掲げる。

苦痛に耐え只管踊り続けていると、雲の隙間から覗く月明かりが強くなった気がした。実体を保てず自然現象となり意志を失った月の女神だけど、この時代でも見守ってくれてるのだろうか。

どのくらいの時間舞い続けたかわからないが、集まる魂が少なくなった頃には私は立っているのもやつとの状態だった。そして最後の魂を空に導くと、倒れかけた私をライダーが支えてくれる。

「大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ」

眼帯を外し直接顔が見えるライダーは心配そうな顔をしていた。彼女を見て心配した顔も美人ね。なんて場違いな感想が湧いて出る。

悪意の泥で死した人達の苦しみ、苦痛、恐怖、憎悪。声なき声として、それらに耐えるのは思った以上に体力と精神力を必要とした。大丈夫と言ったが変な感想が出る辺り、あまり大丈夫ではないのかもしれない。

「あくあ、こりや付いて来るんじゃないな」

私がライダーに抱かれ支えられているとランサーが話し始めた。

「見た目も性格もやり方も違うが、懐かしいもんを思い出しちゃった。あんたとは完全にやる気がなくなっちゃったよ」

頭を掻きながら言うランサーは、もはや敵意どころか警戒の欠片さえなかった。本当に言葉通りにやる気がないようだ。現代風の服装に身を包んだ槍兵に私も言葉を返す。

「私も貴方とは戦いたくないわね」

「はん、よく言うぜ。邪魔なら排除する気満々だろうが」

「そうね。だから貴方が私の邪魔にならないように祈っておくわ」

「まったく、聖女のようなかと思えば芯の部分は譲る気なしってか。いつの世も女は怖いもんだ」

背を見せ去ろうとするランサーだったが、その背に向かい呼びかけた。彼には手伝わしてもらった借りがある。このまま帰せば借りを返せなくなってしまうかもしれないから。

「ランサー、気をつけなさい。貴方のマスターは前回の聖杯戦争で受肉を果たしたウルクの王、英雄王ギルガメッシュと手を組んでるわ。言峰綺礼は貴方を必要としていない」

私の忠告を聞いてランサーは片手を挙げてひらひらと手を振るだけで、そのまま霊体化して去って行った。彼自身、英雄王の事は知らなくても言峰綺礼が自分を必要として

いない事は知っていたのだろう。今更の忠告で無駄だったのかもしれない。

ランサーを見送り軽く深呼吸をしてからライダーに顔を向けた。

「私達も帰りましょうか、ライダー」

「わかりました」

「ちよ、ライダー!?!」

疲労で動けなかった私はライダーに抱きかかえられてしまう。少し恥ずかしかったが、自力で動く気にもなれず身を任せることにした。そうしてライダーに抱えられたまま夜空を見上げた。

見上げた空には、月明かりを隠す暗雲が広がっていた。

幕間 セイバー 前編

「ここに居たのか、セイバー」

一人静かに黙想をしていると声が聞こえた。その声に応える為、ゆっくり目を開き声のした方向へ顔を向ける。眼を向けた先には、道場の入り口に立ちジツと私を見つめるシロウがいた。

「どうしました？ シロウ」

「え？ 綺麗だなんて、あ」

「シロウ？」

「ち、違うぞ、セイバー！ 姿勢とか佇まいが綺麗だって事で、でもだからってセイバーが綺麗じゃないって意味じゃなくて、つまり、なんて言うか」

立ち上がり、慌て始めたシロウへと歩み寄る。近くまで来た所でそつとシロウの手を握り、目を見ながら諭すように言葉をつむぐ。

「落ち付いてください、シロウ。貴方が私の容姿を貶したいのではないのは、ちゃんと伝わっています」

「そ、そうか」

「それよりも何か用事があったのではありませんか？」

「あ、あく、そうだった。朝飯ができたから探してたんだけ」

朝食ができたので私を呼びにきてくれたのですか。わざわざ母屋から離れた場所にあるここまで探しに来させてしまうとは、いらぬ手間をとらせてしまいましたね。

「食事を用意した上に、余計な手間をかけさせてしまったようで申し訳ありません」

「いや、そのくらい気にしないでくれ」

シロウの作る食事は楽しみだったので、作り立てを食べられるように探してくれたのには本当に感謝したい。その想いを示す為に目礼をすると顔を逸らされた。

「え、えつと、セイバーは道場で何をしてたんだけ？」

「昨夜の戦いについて思い返していました」

「そ、そうか……」

答えるとシロウは顔を逸らしたまま固まる。このままでは折角の食事が冷えてしまうのではと心配になり、さてどうしたものかと悩み始めると控えめな声が聞こえてきた。

「あの、セイバー……さん。そろそろ手を離してくれませんか」

食卓に着き用意された品々を眺めると、今日も美味しそうな物が並んでいた。湯気立つスープを目にし、温かい内にすぐにも味わいたかったのだが。

「遠坂のやつ遅いな。すぐに戻るって言ってたんだけど」

リンが未だに現れず食べ始める事ができなかった。シロウの家では食事は全員が揃ってからが習いのようなので、仕方なく我慢する。

「リンはどこかへ出かけたのですか？」

「ああ、本格的に拠点をうちに移すらしくってさ、必要な物を取りに自宅へ行ってる」
「なるほど」

待つ間の慰めにと疑問を口にしたが、意識を他へ向けようとすると余計に目の前の食べ物に気になってしまう。会話をしつつも視線はあの赤くて美味しそうな粒々した食べ物に。

くつ、シロウを見もせず会話をするなど失礼にもほどがある。そう思い精神を律し、しっかりとシロウを見ました。が、視線をずらす時に見えた焼いた卵の見事さが気になり、チラチラと見てしまう。

「いつ戻るかわからないし、先に食べてても良いと思うぞ」

「いえ、全員揃って食べ始めるのが決まりなのでしよう？　ならば私だけ先に食べるわけにはいきません。それよりもシロウ、今日はタイガは来ないのでですか？」

「藤ねえは何か急用があるとかで、準備とかあつて朝は来れないって連絡があつた」
「それは残念ですね」

「遠坂が居るのを説明したくないから助かつたって気分だけだな。まあ遠坂が居座り続けたら、結局はそのうちバレるんだらうけど」

リンの話を始めると玄関から何者かが入ってきた音がした。その人物は慣れ親しんだかのように自然な気配のまま家内を進み、明るい声と共に居間の戸を開ける。

「おつまたせ、衛宮君、セイバー。どこかの誰かさんが我佻言うから遅くなっちゃったわ」

居間へと笑顔で入ってきたのはリンだった。その後ろには実体化したアーチャーが険しい顔で続く。

「誰が我佻を言った。君が無駄な事をしようとするからだろう」

「ふくん、まだそんなこと言うの。さっさと令呪を使ったほうがいいのかしらね。朝食をちゃんと食べなさいって」

「……………」

道中にアーチャーも朝食に参加するように説得でもして遅くなつたのだろうか。本来は食事が必要としないサーヴァントを、何故リンは朝食に参加させたいのだろうか。

「チームワークなんて柄じゃないんだけどね。そういうのも必要かなって、昨日の戦い

の後思ったのよ。だからまずは朝食を皆で食べましょうって訳よ」
「なるほど、同じ釜の飯を食うを實踐するって事か」

私と同じ様に疑問が顔に出ていたシロウにリンが説明している最中もアーチャーは不機嫌だった。令呪を使うと言うのは冗談でしょうし、シロウの作る食事はサーヴァントであっても味わうだけの価値があると思うので、不機嫌にならずとも良いでしょうに。

「話も纏まったようですし、そろそろ食べ始めましょう。折角のシロウが作ってくれた料理が冷えてしまいます」

「纏まってないのだが……」

私が睨むとアーチャーは言葉途中で黙り口を閉ざした。そんなに驚いた顔をしなくても何もしませんよ、アーチャー。ただ少しだけ、そろそろ我慢の限界できつく睨んでしまっただけです。

「じゃあすぐに遠坂とアーチャーの分も用意するから座っててくれ」

シロウがキッチンへ向かうとリンとアーチャーも席に着いた。

「……ちよつとアーチャー。セイバーが怖いんだけど、あんた何かしたの？」

「……竜の逆鱗に触れてしまったかもしれない」

小声で話し合っている二人を無視して目の前の料理を凝視する。ああ今日のご飯も

とても美味しそうです。

「さて、それじゃあそろそろ始めましょうか」

食後にのんびり座っているとおもむろにリンが話し始めた。突然話し始めたので、片づけを終えたばかりのシロウがきよんとしている。

「遠坂、始めるって何をだ？」

「決まってるでしょ。昨日の反省と今後についての話し合いよ」

リンの言葉を聞いて部屋に緊張が走る。昨夜のキャスター達との戦い。あれはよく言っても引き分けだった。いや、宝具を使っても誰一人倒せなかった事を考えれば、明らかな敗戦。

「セイバー……」

悔しきで歯噛みしているとシロウに名を呼ばれた。彼の声を聞いて思わず顔を俯かせてしまう。宝具を使用したというのに、何も結果を残せなかった情けなさから。

「そんなに落ち込まなくてもいいんじゃない、セイバー。次勝てばいいのよ」

「しかし、いえ、そうですね」

約束された勝利の剣を防がれた事実は私の心に重く押し掛かっていたが、それを言っ

てはただの言い訳になってしまふ。リンの言うように次こそ勝利を手にするがいい。
「で、昨日の反省はこれで終わり」

「……良いのか？ それで」

「良いのよ。終わった事を悩むより、未来へ向けて悩んだほうが建設的でしょ？」

「そうかもしれないけど」

「それよりも、貴方達に聞きたい事があるのよ」

リンがシロウ、アーチャー、私とそれぞれに視線を飛ばし、コホンと咳払いを一つして軽い調子で質問を口にした。

「ねえ、アーチャー。イリヤスフィールが貴方の事を言っていた時の反応がおかしかったと思うのよね。自分がアーチャーを侮る訳がないって。あれについて思い当たる事はある？」

「いや、特にないな。単に見知らぬサーヴァントに対して警戒していただけだろう」

「ふくん、そう」

「凜、その含みがあると云わんばかり返事は何かね？」

「別に何でもないわよ。それとも私の返事が気になるような何か隠し事でもあるのかしら？」

「……そんなものはない」

笑顔でアーチャーを切り伏せ、リンは次に私を見てきた。

「セイバー、貴女の真名ってアーサー王で合ってる?」

「はい。本当の名はアルトリア・ペンドラゴンと言いますが、ブリテン国の王、アーサー王と言うほうがわかりやすいでしょうか」

「はあ、あのアーサー王がまさか女性だったなんて驚きね」

昨夜エクスカリバーを見て私がアーサー王だと確信していたようですが、本人の口から明かされ改めて驚いているようですね。リンは軽くでしたが、シロウは目を見開いて私を見てきます。アーチャーも私を見ていましたが、目を合わせたら逸らされました。

「それともうひとつ、前回の聖杯戦争でアインツベルンのサーヴァントだったって言うのは?」

「事実です。私はアインツベルンの代表として参加した魔術師に召喚されました」

「同じサーヴァントが二度も聖杯戦争に呼び出される、か。そんな偶然もあるのね」

今回の聖杯戦争で敵であるアインツベルンの側に前回居た私に、詰問があるのではないかと思っていたのですが。

「リン、それだけですか?」

「ん? ええ、そうだけど?」

特にそれ以上何かを聞かれる事はなく、私への話は終わりとばかりに今度はシロウへ

と顔を向けるリン。その表情はアーチャーや私の時と違い、笑顔なのに言い知れぬ圧力があつた。

「衛宮君、確か魔術は強化しか使えないって言つてたわよね」

「ああ、その強化も中途半端な半人前だけだな」

アーチャーと私の時とは別物となつている笑顔に気づかないシロウは平然と答えた。鈍感と言うか人が良いと言うか、リンの刺さるような気配に気づかないとは。

予想通り、この後リンの笑顔は剥がれ落ちシロウは苦難を迎えます。

「ふっざけるんじゃないわよ！ 誰が強化しか使えないですつて？ あんたが昨日使つてた剣はアーチャーの宝具よね！ あれは一体どういうことよ！」

「へ？ 待て遠坂！ なんてそんなに怒つてるんだ？」

「はあ？ なんて怒つてるかですつて？ ああああ、もう！ こんの天然！ 百歩譲つて強化以外の魔術が使えたのは良いとして、英霊の宝具を使つたつて意味がわかつてないようね！」

そこからはリンのお説教が始まった。シロウは理解していなかったようですが、現場を見ていない話を聞いただけの私ですら、シロウがアーチャーの宝具を使ったのには驚いた。それを目の前で見たリンからすれば、説明がなければ納得は出来ないのでしょう。

英霊が持つ宝具はただの武具ではない。武具としての特殊性や内包する神秘についてだけではなく、それぞれの英雄の生き様や人生を共に歩いた半身と言える存在なのだから。それを一介の魔術師が使ったと言うなら、下手をすれば使われた英雄から不興を買い殺されかねない。

私人としては、マスターが自衛の手段を持っていたので良しとしています。ですがシロウがもし私の聖剣を使ったら、リンのように問い詰めずには居られなかったでしょう。

「非常識にもほどがあるわよ！ 投影で宝具が作れるわけがないでしょー！」
「いや、でも実際にできた訳で」

わいわいと騒ぐ二人を横目にアーチャーの様子を窺いました。自身の宝具を使われた彼が、どういう反応をするか心配になったから。しかし私の心配は杞憂だったようです。

アーチャーはとても優しく微笑んで二人を見ていました。少しだけ寂しさを感じさせる微笑でしたが、それでもいつも険しい表情の彼らしくない表情。予想外の反応に思わず彼を見続けてしまいました。

ふと、私が見ているのに気づいたアーチャーが笑顔を消してそっぽ向いてしまいました。微笑んでいたのを見られしまったと思ったのか苦々しくしています。私はそんな

彼を見て、初めて素の感情を見せてくれたようで嬉しく思いました。いつも私に対して壁を作っていたように感じていたので尚更に。

一時的な同盟とは言え、共に戦うのだから少しは気を許して欲しい。そんな思いが私の中にあつたのかもしれませんが。ジツと見たままの私に気づいたアーチャーが、余計に顔を顰めたのを見てクスリとしてしまいました。意外と感情が顔に出るのですね。

「まあいいわ。まだまだ言い足りないけど、それが衛宮家の魔術の秘奥だつて言うなら内緒にしたのも仕方ないわよね。むしろ尊敬するわよ」

私がアーチャーの意外な反応を見ている間にリングが納得しシロウへの詰問が終わつた。と思つたのですが。

「秘奥つて訳じゃないな。魔術を教えてくれた爺さん——親父からは投影じゃ使い物にならないから、強化を鍛えたほうが良いつて言われて強化の訓練ばかりしてたし」

「……じゃあ何？ 宝具の投影は衛宮家の秘術でもなんでもなくて、突発的に思いついてやってみたら出来ました。とでも言うの？」

「ああ、キャスターが自分の使つた魔術は投影の一種だつて言うのを聞いて投影魔術の事を思い出して、咄嗟にやってみたんだ」

朗らかに説明するシロウに対し、顔を下に向けふるふると震えるリンを見て、立ち上がりシロウの横からアーチャーの側へとこっそり移動しました。シロウが行ったアー

チャアの宝具の複製が、魔術師であるリンの心をどれほど抉っているかは想像に難くありません。

宝具を複製する等と言う魔術は、あの稀代の魔術師であったマーリンでさえ行えなかった奇跡。かの御仁に可能ならば、私に複製した鞘を授けてくれたはずです。一流と言って差し支えないマーリンすら超える魔術。それが昨夜のシロウが起こした奇跡。それをやってみたらできましたと言われては。

私がアーチャーの横に腰を下ろした丁度その時、リンが顔を上げシロウに襲い掛かりました。

「今後についての話し合いは、暫く出来そうにありませんね」

「そのようだが……。止めなくて良いのかね？」

「英霊の宝具の複製。その意味をシロウはしっかりと自覚する必要がありますから。それよりもアーチャー、宝具を複製された貴方は、シロウに何か思うところがあるのでは？」

「ふん、あのような出来損ないの紛い物に何を思えと」

アーチャーの言うように紛い物で質が高くなかったのかもしれないませんが、それでも彼の度量に感心しました。私が彼の立場なら、もっと心乱されていた気がしたので。

「大人しくしなさい！ キヤスターに何かされてないか調べるだけだから！」

「それは昨日寝る前にしただろ!? 特に問題なしって、遠坂が自分で言ってたぞ!」

リンに組み敷かれながらも抵抗をするシロウ。顔が赤く上気しているので必死だとわかります。それにも関わらずシロウを組み伏せたままのリンは、相当修練を積んでいるようです。

そんな風二人を見ていると隣からため息が。その後アーチャーはキッチンへと向かい、少ししてから戻ってきました。

「食後のお茶を用意した。マスター達のじゃれ合いをただ見ているよりも、茶でも飲んでいたほうが有意義だろうさ」

「ありがとうございます。アーチャー」

リンの気が済みシロウが自覚するまで、アーチャーの用意したお茶を美味しく頂きました。

「ま、待たせたわね」

息を整え衣服を直しながらリンが居住まいを正しています。顔に爪痕が残るシロウも、言葉はありませんでしたが疲れた様子で姿勢を正しました。

シロウは単純に疲労したと言う訳ではなく、事の重大さを知ったのでしよう。リンに

色々と言われ自分の使った魔術の意味を自覚したようで何よりです。

「ふう、それで今後についてなんだけど……。今世の破壊を望む、なんて言うキャスターを放っておく事は出来ないと思うのよね」

「遠坂、その事なんだけど」

「ん、何かしら？ 衛宮君」

リンの話にシロウが割って入ります。顔は真剣で真面目なのはわかるのですが、リンがつけた爪痕が少し残念な印象です。

「昨日戦ってみて、やっぱりキャスターが悪人だなんて思えない。ちゃんと話し合えば何とかなるんじゃないか？」

「……そう思う根拠は何かしら？」

「……なんとなく、だな」

特に根拠を示さなかったシロウを黙って見続けるリン。彼女の気性から考えて、一考の価値がないと思っただのならそのような態度はとらないでしょう。ならばシロウの援護と言う訳でもありませんが、私も今朝方思い返し感じていた事を話しましょう。

「リン、あくまでも私のキャスターに対する印象なのですが、本当に世界の破壊を願っているとは思えません」

「ふむ……。続けて」

「悪逆非道な宣言をしたにもかかわらず、キャスター達は実質1対1の決闘に応じました。彼女達の能力を考えれば、本気で私達を倒す気ならもつと搦め手もあつたはずですよ」

私とアーチャーを押しさえ、その間にマスター達を討ち取る。そうも取れる状況だったが、それにしても詰めが甘い。その場合は如何に素早くシロウとリンを倒すかが肝になるはずが、シロウ達と会話をしたらしいのが解せない。単なる余裕だったのかもしれない。

それに山林で見たキャスターの魔術の腕前から考えれば、私とアーチャーにマスター達を守らせ、そこにライダーとアサシンを切り込ませれば良い。二人とも片手間に戦える相手ではなく、そうなれば私達は簡単に追い詰められたはずですよ。

他にも結界内にマスター達だけを取り込み討ち取る方法もあつたでしょう。シロウとリンがサーヴァント3人を相手に出来る訳がなく、私とアーチャーが外から結界を破壊する間に決着がついていたでしょう。それを避ける為には令呪を使う事になり、戦いの場を整えるだけで確実な消耗を強いられる事になつたでしょうね。

宣言通りに世の破滅を願っているなら、手段など選ばずに私達を殺しにくるのではないのでしょうか。だと言うのにわざわざリンが声に出した作戦通りに、此方の意図に付き合つた。彼女が語つた願いと実際の行動がチグハグな印象を受ける。

「それとライダーとアサシンの態度です。キャスターの考えに賛同してるとしても、キャスターが危機に陥った時の二人の必死さは破滅を願う者達には思えなかった」

「キャスターの命を最優先って、令呪で命令されたのかもしれないわよ」

「私は令呪で命令された以上の必死さを彼等と感じました。アーチャー、貴方はどうですか？」

「……確かに。例えば令呪が使われたとしても、望まぬ命令ならばあのように必死にはならないだろう」

「それは経験談かしら？ アーチャー」

リンの問い掛けに肩を竦めるだけで応じるアーチャー。リンの消えた令呪の一面は望まぬ事に使われたのでしょうか。アーチャーの態度を見るに望まぬ命令をされたようには見えませんが。

と、逸れた思考を戻し再びキャスターについて発言した。

「キャスターが本当に世界の破滅を願っていたとして、それを叶えるか迷っているのではないのでしょうか」

三人が此方を見つめる。自分が感じる違和感を伝える為に、焦らずゆっくりと言葉を重ねた。最もキャスターに対して違和感を覚えた出来事を思い返しながら。

「私が宝具を使おうとした時、キャスターは『私を試してみなさい』と言いました。他者

を省みず破滅を望む者が、自分を試せ等と言うとは思えません」

「なるほどねえ。確かに普通ならセイバーの宝具に正面から挑む理由がないわよね。正体がアーサー王だとわかってて正面から宝具の攻撃を受けるなんて、狂人じゃなければ自殺志願者か断罪を望む罪人くらいか」

リンの言葉にズキリと胸が痛んだ。前回の聖杯戦争で相対した我が友。過ちを犯した己を許せず、私からの断罪がなかったばかりに闇に落ちた騎士の中の騎士。彼を手にかけて感触は今も残っている。前回の聖杯戦争は十年前の出来事だが、私にとつてはつい先日の事なのだから。

「それにさ、俺が無事なのがキャスターが悪人じゃない証明になるんじゃないか？ 昨日キャスターに魔術で何かされたのに無事なんだからな。自慢じゃないが、魔術師の英霊がその気なら何かされて無事で居られる自信はない」

「それ、本当に自慢になつてないわよ」

真面目に情けない事を言うシロウに、私とリンは思わずクスリと笑ってしまう。断罪と言う言葉から思い出して落ち込んだ気持ちも軽くなった。

明るくなった場に沿う様にリンが気軽な調子で結論を語る。

「ん、衛宮君とセイバーの言いたい事はわかったわ。キャスターが破滅を望むただの悪人じゃないかもつてのは。でも街中の魔術刻印に間桐にした事を考えると放置は出

来ないのよね」

「……ん、そうだな」

「衛宮君、今桜の事を考えたでしょ。大丈夫よ。たぶん生きてるから。キャスターは『間桐桜を攫った』って言ったのを覚えてる？ 殺したり魔力炉にでもしたなら、あんな言い方をしないとと思うのよね」

一瞬暗い表情を浮かべたシロウですが、リンの言葉を聞いてすぐに顔を明るくしました。

「とは言え、じゃあなんで攫ったんだって話なんだけど」

「キャスターに聞けばいいんじゃないか？」

「無理よ。あつちに話す気があるなら、昨夜敵対なんてしなかったでしょうね。話し合いにしても今度は門前払いがオチよ」

腕を組み考えに耽るリン。シロウも真剣な表情でリンの考えが纏まるのを待っていた。少して腕を解いたリンは、アーチャーが用意していたお茶を自分で注ぎ一口飲み、ことりと茶碗を置いてから話し始めた。

「何よりもキャスターの行動がちぐはぐで、何をしたいのかわからない。問題はそこよね。本気で敵対するにしろ、和解するにしろ、情報が足りない。でもキャスター本人とは話し合えそうにない。放置も出来ないけれど行っても昨夜の二の舞になりかねない」

リンは一旦言葉を区切り、私達を見渡してから結論を口にした。

「じゃあ知つていそうで敵対していかない相手に聞くしかないわよね」

「つまりどうするんだ？ 遠坂」

「居るでしょう？ キャスターの事を知つていそうで私達、つて言うか衛宮君の味方になりそうな人物が」

リンがどうするつもりかシロウも気づいたようでハツとします。私は少しだけ複雑な思いでリンの言葉を聞いていました。

「バーサーカーのマスター、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンに会いに行くわよ」

幕間 セイバー 中編

「ハアアアアア！」

頭上から迫る斧剣に向けて剣を振り上げる。斧剣を吹き飛ばすつもりで振った剣だったが、武器が交差した瞬間に互いに弾け、私とバーサーカー共に後方に数歩下がってしまう。そして体勢を崩したバーサーカーへとアーチャーの矢が飛来した。しかし結果は。

「無傷ですか」

アーチャーの矢が着弾したのも構わずに、ゆっくりと息を吐いて斧剣を構え直すバーサーカー。その隙に後ろに下がりがアーチャーの横に立ち私も呼吸を整える。

「ただの肉体が宝具級とは、厄介だな」

内容とは裏腹に厄介そうな響が無いアーチャーの言葉。その理由は昨夜に比べ、バーサーカーの発する鬼気が弱いからだろう。相手が本気ではないから戸惑い本気になれずにいるようだ。

アーチャーとは別の理由で私の方も全力が出せなかった。昨日『約束された勝利の剣』を使った影響で魔力が万全とは言い難く全力の戦闘が難しい。それでも手を抜いて

いるとは言えバーサーカー相手に互角以上に戦えているのは、今朝方よりシロウから供給される魔力量が増えて安定したからだ。

それらの事情以上にバーサーカーを含め私達が全力の戦闘を行わないのは、もう一つの戦いの結果を待っているからでしょうが。

油断せず剣を構えつつも、チラリとバーサーカーから視線を外しマスター達を見た。私達の今後を決めるであろう戦いを。

「まったく、お嬢様が帰れと言うのですから、すぐにお引取り願いたいのですけどね」

修道女のような白い装束——アインツベルンの侍女服——を着た女性が言葉と同時に炎を生み出す。魔術で生み出された複数の炎の塊は四方からシロウへと襲い掛かった、が。

「来る必要があるから来たのに、帰れと言われて帰る訳がないでしょう！」

リンが同種の魔術で迎撃し、シロウに届く前に全てが相殺された。

「ふう、こちらが強硬手段に出る前にお帰りになった方が身の為かと思いますが」

先ほど魔術を放った服の胸元が青い侍女の女性が言う、魔術の激突跡の煙を鉄塊が引き裂いた。

「もう強硬手段に出てる気がするんだけどな」

リンを守るように前に出たシロウが煙を引き裂き現れた、見るからに超重量のハルバートを振るう侍女の前に立ちふさがる。そして両手に持った複製したアーチャーの双剣を使い、振るわれるハルバートをいなした。

昨夜のキャスターとの戦闘。それがシロウの技量を大きく上げたようだ。たった一度の戦いとは言え相手は英霊で、アーチャーの宝具の双剣を複製すると言う望外の奇跡まで開眼した。元々鍛えていた下地はあったのでしようが、出会った頃に比べたら別人の如き剣裁きです。

「ご冗談を。お帰りになられる手間が省けるように、炎で火葬か粉々にして森の肥料にしてさしあげようとしているだけです」

魔術師であろう侍女が、ハルバートを振るう侍女を援護する為かシロウに向け魔術を放った。先の再現のようにそれをリンが迎撃する。

「客人への持て成しのつもりかしら？ そんな冗談しか言えないなんて、アインツベルンはメイドの教育がなっていないわね」

リンと魔術師の侍女が睨み合う。

二人の間でシロウともう一人の侍女が攻防を繰り返していた。縦横無尽に振るわれるハルバート。技巧は見られない攻撃ではあったが、尋常ではない膂力での攻撃にシ

ロウの双剣は何度か折られ砕かれ、その度に剣を複製してなんとか耐えている。

イリヤスフィールに会う為にアインツベルンの森に入った私達。結界を解除しながら森の中を進んで少しすると、バーサーカーを連れた二人の侍女達に出会った。彼女達にはイリヤスフィールに会いに来たと伝えたのだが、お嬢様は会う気が無いと返答され戦闘になって今に至る。

マスター達がイリヤスフィールに会うのを諦めなかつたので、私とアーチャーがバーサーカーを引き付け時間を稼いでいるのだが……。

「さっきから聞いてれば偉そうに。メイドだったらメイドらしく、紅茶でもいれてなさいよー!」

「お茶の支度をするだけがメイドの仕事と思われては心外ですね。下賤な輩が主に近づかないようにするのも十分メイドの仕事の範疇です」

イリヤスフィールに会える様に説得しようとしていたマスター達の会話が……と言うかリンと魔術師の侍女の会話が口喧嘩のようになっていった。

「誰が下賤ですって!」

「おや、自覚がおありのようで」

「ふんっ、その下賤な相手を追い返せないメイドを使ってる辺り、ご自慢の主の実力も知れてるわね」

リンの言葉に魔術師の侍女の表情がピキリと固まる。リンは当初は説得してはいたはずなのですが、今は完全に売り言葉に買い言葉を買っていますね。短い付き合いですが、やられたらやり返す性格だとは知っています……。――

侍女の方もリンに負けず劣らず、魔術の行使をそっちのけで会話に応じ始めた。

「他のサーヴァントに勝てないから、お嬢様に助力を求めに来た方がよくも言いますね。どうせ同盟をしてほしいと縋りつきに来たのでしょうか？」

「はっ、お生憎様、同盟なんて欠片も考えてないわよ！ キヤスターの情報を持つてそうだから、冬木のセカンドオーナーとして聞きに来ただけよ。抵抗するなら力尽くで吐かせてやるわ！」

キヤスターに関する話を聞きに来たのは事実ですが、それだけではなく場合によっては同盟を組むのも視野に入れていたはずですよ。なのにリンは自ら同盟なんてありえないと宣言しました。

もはや説得ではなく、完全なる口喧嘩の様相を呈していたリンと侍女の会話に話し合いいでの戦闘の停止は不可能と判断しかけたのですが、ここで変化が訪れました。

「馬脚を現しましたね。話を聞きに来ただのと嘯き、お嬢様を害そうとは。さぁリーゼリット、もはや容赦は必要ありません。すぐにそのゴミを片付けてしまいなさい」

魔術師の侍女がそう言って指示を出す、それに反してハルバートを持った侍女の動

きが止まる。同時にバーサーカーの動きも止まり、場に怪訝な空気が流れた。

「リーゼリット、何をしているのですか。早くお嬢様の敵を叩き潰しなさい」

「ん、待って、セラ」

リーゼリットと呼ばれた侍女は、剣を構え警戒しているシロウを無視してリンに話しかけた。

「セカンドオーナーとして、話をしに来た？」

「そうよ。街中に危険な魔術刻印を張り巡らせているキャスターに関して、この地の管理者として対処しなきゃいけない。だから情報がほしいだけよ」

リンの返事を聞いてリーゼリットは特に何をするでもなく、じつと見つめるだけの対応をした。暫くどちらにも動きが無い時間が過ぎる。そうして時間が過ぎていくと、唐突にリーゼリットがハルバートの石突を地面につけた。

「わかった。イリヤの所まで案内する」

「リーゼリットッ！」

セラと呼ばれた魔術師の侍女が、敵意が無い姿勢を示したリーゼリットを叱責した。しかし振り向いたリーゼリットは意に介さず、平坦な口調で反論を口にする。

「話を聞きに来ただけなら会ってもいい。イリヤがそう言ってる」

「お嬢様が……？」

おそらくイリヤスフィールからの指示なのだろう。それを伝えられるとセラの方は顔を顰めた。リーゼリットの言葉の直後に、私とアーチャーに相對していたバーサーカーが霊体化し消え真実だと確信したはずだが、彼女の表情は変わらなかった。

「たとえばお嬢様がそう仰つても、その男にお会いになるのには賛成しかねます。リーゼリット、その男は『衛宮』なのですよ」

「大丈夫。シロウは良い子」

「何を根拠に」

「自分が死にそうだったのに、私を傷つけないように戦つてた。だからイリヤも傷つけない」

リーゼリットの言った内容は実にシロウらしいと思ひました。話を聞きに来たのだから相手を傷つけない。危うさも感じますが、自らの信念を曲げぬシロウを好ましく思います。

話の中心となつてゐる当のシロウですが、何故『衛宮』だと会うのに反對されるのか疑問を持った様子。私達に都合の良い流れを断ち切つて、聞こうか聞くまいか迷つてゐるようでした。

前回の聖杯戦争でアイリスフィールから聞かされた切嗣の願ひ。アインツベルンとは別の目的で戦つてゐた裏切りがばれてゐたのか、或いは聖杯を手に入れられなかつた

落伍者に対する敵意か。切嗣の事を伝えていないシロウには『衛宮』を敵視する侍女の言葉を理解できなかつたのでしよう。

命を賭け聖杯を求めていた切嗣が最後に令呪で命じた内容。ありえない指示。それが原因で敵視しているのならば、私も侍女達に尋ねたかつた。何故切嗣は聖杯を破壊したのかと。……ですが今はその感情を抑え、シロウの側に向かい小声で声をかけました。

「シロウ、衛宮とアインツベルンの関係は今は」

「セイバー……。そうだな。今はバーサーカーのマスターに会うのが先か」

気持ちを切り替えたシロウは双剣を消して二人の侍女を順番に見ました。それから向けられる敵意を意識的に無視して、普段と変わらぬ声音で彼女達に語りかけ始めました。

「イリヤスフィールって子を傷つける気はない。ただ話を聞きたいだけなんだ。だから会わせてくれないか？」

シロウの言葉を聞いてさらに渋面を作るセラ。それでも主からの命だからなのか、溜息をついてから表情を戻した。シロウに向けられた敵意は隠しきれていなかったが。

かわりにリーゼリットの方はシロウに好意的な態度でした。もしかしたら彼女の後ろに居るイリヤスフィールの影響なのかもしれません。そう思ったのは彼女の次の台

詞からです。

「イリヤでいい」

「ん？ えっと、もしかして呼び方？」

「うん、イリヤって呼んで良いって」

無表情だった彼女の微かな笑顔は、同性の私ですら一瞬ドキリとするほど優しげで眼を惹きました。シロウも同じだったように見惚れた事を隠すように咳払いをして誤魔化しています。隠しきれいていないシロウへ、前後から殺気が膨れ上がりましたがあえて無視したようです。

「わかった。じゃあ改めてお願いしたい。イリヤに会わせてくれ」

シロウの願いを聞いて、リーゼリットがしっかりと頷きました。

深い森の中にそびえるアインツベルンの城。前回の記憶を思い起こされる場所。

壊されたはずの正門は傷一つ無く直されていて、重厚な音をたて開かれていく。門を開き進む侍女達に続き、私達もホールへと足を踏み入れた。複数のシャンデリアに灯された明かりで、夜だというのにホールの中はよく見渡せた。高価だと一目でわかる調度品が壁際に多数並び、さらに奥へと続く階段が見えた。

私達がホールの中ほどに進むと、階段の中層に立つ少女が微笑みながらシロウに言葉を投げかける。

「いらつしやい、シロウ。来るのももう少し先になると思つてたけれど、こんなに早く来てくれて嬉しいわ」

シロウは急に声をかけられて、どう答えてよいかわからず戸惑つていた。そんな彼を微笑ましく見ていたイリヤスフィールは次の相手へと視線を向ける。

「そして古き盟約の友、トオサカの末裔トオサカリン。ようこそ、私の城へ」

シロウに向けるのとは違つた笑みでリンを見る。対するリンは黙して語らず、歓迎の意を表すイリヤスフィールを鋭い眼つきで見ている。リンの態度に何か言うでもなく、少々の間を置いてからイリヤスフィールは挨拶を続ける。

「アーチャー、歓迎するわ。だからそんなに警戒しなくても平気よ。それに警戒した所で無駄だつて、貴方ならよくわかつているでしょう?」

サーヴァントらしく何時でも動けるようにしていたアーチャーに、イリヤスフィールが傲慢とも取れる発言をした。けれど内容とは裏腹に籠められた声音は慈しむような響だった。言われたアーチャーはというと、己のマスター共々厳しい眼つきでイリヤスフィールを見たままだ。

アーチャーへの奇妙な挨拶は気になったが、それよりも次に来るであろうイリヤス

フィールの私への言葉に身構えてしまう。彼女はきつと私を怨んでいるだろう。彼女の母とした守れなかった約束が私の胸を締め付ける。

せめてもの償いに彼女の憎悪を受け止めよう。そう思い真つ直ぐ彼女を見ていたのですが。

「大丈夫よ、セイバー。私は怨んでいないし、イリヤもわかつてくれたわ。貴女が本当に私を守ろうとしてくれた事を。私の方こそごめんなさい。貴女の献身に応えてあげられなくて」

聞こえてくる澄んだ声音と落ちついた口調はイリヤスフィールのものではなかった。喋っていたのはイリヤスフィールだが、聞こえてきた声はまるで。

「アイリス……フィール？」

「私達は繋がっているの。過去に産まれた同胞達。死した後も受け継がれていく。お母様は確かに居なくなってしまったけれど、私の中にちゃんと居るわ」

私の呟きにイリヤスフィールが応える。声音も口調も彼女自身のものに戻り、言った内容を正確には理解できなかった。けれど彼女の伝えたかった想いは伝わってきた。

正式なマスターではなかったが、共に戦場に向かったアイリスフィール。夫と娘の為に懸命だった彼女を思い出していると、イリヤスフィールが侍女達に指示を始めた。

「丁度良い時間だし、話するのは晚餐の後がいいわね。セラ、リズ、シロウ達を部屋に

案内してから準備をしなさい」

侍女達が指示を受けて黙って礼をする。それを見届けイリヤスフィールが背を向け階上へと脚を向けたのだが、一步進みピタリと止まるとすぐに振り返った。振り返った彼女は私達をじつと見て、客人を迎える城主の表情から悪戯を思いついたようなやや人の悪い笑顔へと変わる。

「ああいけない。思わぬ来客で大切な事を確認し忘れてしまったわ。ねえリン、あなたはキャスターの情報を聞く為に来たのだったかしら？」

「そうよ」

「ふふふ、だったら話してあげる分の対価を貰う必要があるわよね」

イリヤスフィールの言葉で場に緊張が走る。価値があればあるほどに払うべき対価も増えるのが道理。ライダーとアサシンを従えている現状最大勢力であり、最も聖杯に近いと思われるキャスターに関する情報が安いはずがない。

どのような要求をされるかわからず、私は緩みかけていた気持ちを引き締めしようとしたのですが、またイリヤスフィールからは予想外の言葉が出てきた。

「対価は晚餐の料理をシロウ……いえ、アーチャーが作る事。セラ、アーチャーのサポートをしてあげなさい」

そう言い切ると背を向け、今度は振り返らずに奥へと去って行った。その間、私達は

黙ったまま見送り、侍女達は礼をしたまま動かなかった。

イリヤスフィールが影に消えると、私はアーチャーとリンへと視線を移した。きつと今の私の視線は訝しげなものだろう。

マスターでもない相手に料理を作れと言われたアーチャー。道理を弁えている彼ら対価を払えと言う魔術師らしいイリヤスフィールの言葉に従うかもしれない。

しかし自身のマスターを第一に考えるサーヴァントらしい態度を貫いていた彼が、何も言わずに別のマスターの言葉にただ従うだろうか？ 従うにしてもリンに裁可を問うのではなからうか？ 無言を通せばイリヤスフィールの言葉に是と答えたのと同じだと理解しているでしょうに。

マスターであるリンの態度もおかしかった。彼女の性質なら対価の要求に納得はしても、自分のサーヴァントが対価の対象にされれば、何かしら言わずに居られないはずだ。

ですがリンもアーチャーも不満どころか一言も発する事なく、侍女達の案内に従い歩き始める。シロウも二人に続き、私も遅れぬように先の疑問を心に留め足を進めた。

見知った城内を歩き進む内に少しだけ胸の鼓動が早くなった気がする。予感がした。イリヤスフィールの不思議な対応。リンとアーチャーのらしくない態度。きつとこの後にキャスターの情報を聞くだけでは終わらない。彼女等が関係するのか、吉事か凶事

か何が起こるのかはわからないが、何かがあるのだと。

ふとアイリスファイルの顔が浮かぶ。この後に何があろうとシロウを守ろう。我が身命に賭けて必ず。

足音だけが響く城内で静かに誓う。果たせなかつた誓いを今度こそ果たす為に。

幕間 セイバー 中編②

晩餐の支度ができるまでと案内された客室。私達が入室し椅子に腰かけると、礼をしたりーゼリットが静かにドアを閉じる。

それからすぐに、シロウが長めのため息を吐いた。

「ふう、なんとか穏便に済みそうではよかった。遠坂が口喧嘩を始めた時はもうだめかと思っただけ」

「ふふ、そうですね」

他の陣営のマスターの本拠地に居る緊張をほぐす為に、わざと軽口をたたいた雰囲気シロウに合わせて微笑んで同意します。気を張りつめすぎるとも良くありませんし、実際リンが口論を始めた時はシロウと同じく私も不安でしたから。

そして軽口の対象にされたリンが文句の一つも言うだろうと彼女を見ると、シロウの言葉を聞いていなかったのか一切の反応を見せず、腕を組んで何事かを考えていました。

「遠坂？」

「ん？ 何かしら？ 衛宮君」

シロウが改めて話しかけると、リンは今初めて声を掛けられたかのように返事をしました。先程のシロウと私のやり取りがまったく聞こえていないほど熟考していたようです。

「あく、そういえばアーチャーはよかったのか？」

本気ではないリンへの批判を二度も言うつもりはなかったのか、シロウはかわりに素直にイリヤスファイルの指示に従ったアーチャーについて質問しました。

それは私も気になっていたのでリンの返答を注視していると。

「仕方ないじゃない。情報の対価がアーチャーの料理だつて言うんだから」

「そうかもしれないけど、自分のサーヴァントが料理をすることを勝手に対価にされて怒ったりしないのか？」

シロウの言う通り主従揃って黙って従ったのには疑問を感じます。自らの生命線であるサーヴァントを、他の魔術師の本拠地で傍から離す。魔術師らしいリンとマスター第一な態度であったアーチャーにしては、あまりにもそぐわない行動です。

「まあ、そう、ねえ……。でもアーチャーがイリヤスファイルの言うことを聞くのは仕方がない？ いえ、逆なのかしら？」

返答というよりは独り言のように言葉を発し、軽く視線を上にあげ腕を組み再び考えに耽るリン。そんな彼女の様子にシロウと私は顔を見合わせます。

疑問は残りましたが、リンの態度で話はいったん区切りを迎えました。丁度良いと思
い、イリヤスフィールとの話し合いの前にシロウに話すべき事を話さねばと、姿勢を正
しシロウに向き直ります。

「セイバー?」

私の真剣な眼差しに気づいたシロウが訝し気に問いかけます。彼の問いに答える前
に、冷静な気持ちを保つように自身を落ち着かせました。これから話す出来事は、私に
とって苦い記憶であつたから。

「シロウ、セラという侍女が『衛宮』を名指して嫌つていた件についてなのですが」

「ああ、イリヤを衛宮には会わせたくない、みたいに言つてたつけ」

「はい、おそらく、その理由は前回の聖杯戦争にあります」

アイリスフィールとの誓いを守れず、友を切り捨て、目の前に顕現していた聖杯すら
手に入れられずに去つた前回。切嗣と私の関係を考えれば、シロウにとつても愉快な話
ではないはずです。

覚悟を決めてそんな前回の聖杯戦争の話を始めようとしたら、横から声が上がりました。
た。

「あ、そつか。セイバーって前回の聖杯戦争で、アインツベルンのサーヴァントだったの
よね。つと、ごめんなさい。続けてくれる?」

言葉を挟んだリンが先を促します。私は黙って頷きを返します。シロウだけではなく、同盟者であるリンにも聞いてほしかったので。

興味を示したリンだけではなく、前回の話をすると察したシロウも、こちらを見つめたまま私の話を聞く態勢になりました。

私を見つめる二人に向け、ゆっくりと口を開きます。

「前回、私はアインツベルンのサーヴァントとして戦いました。そして、アインツベルンの代表として参加したマスターの名は、衛宮切嗣——」

目の前に広がる見事なまでの料理の数々。シロウやリンが作る物とは毛色が違いますが、見るからに美味であろう品々。席に座り感じる香しい匂いだけでも、良質さに思わずため息が出てしまう。

「さて、改めまして、シロウ、リン、セイバー、私の城へようこそ」

料理に目を奪われていたら、イリヤスフィールが宴の始まりを告げる挨拶をしました。聖杯戦争に参加する他の陣営のマスターとサーヴァントに向けるには、彼女の声音は丁寧で優しく、私達を正規の客人として迎えてくれているとわかります。

料理の完成を待つ間にした私の話の後、今回の交渉の矢面に立つのはシロウと決まっ

ていたので、イリヤスフィールの歓迎に対して返礼を行うのはシロウなのですが。

「えーと、話し合いに応じてくれてありがとう。イリヤ」

「どういたしまして、シロウ」

動揺、と言うより戸惑いでしょうか。イリヤスフィールにどう接していいか判断しかねているようです。そのせいでイリヤスフィールにつこり微笑みかけられて照れてしまい、シロウの反対側、私の右隣りに座るリンからシロウに向けて、一瞬敵意のようなものが漏れます。

リンの気配に焦ったシロウはビクツと体を震わせ、慌てて次なる言葉を発しました。

「歓迎してくれるイリヤには申し訳ないんだけど、こういう食事でのマナーは多少知っているだけで、実践したことはないんだ。だからマナー違反をしでかすかもしれない。先に謝っておく」

出来ないことは出来ない、素直に認めるシロウらしい発言です。ホストであるイリヤスフィールへの謝罪の中に、リンへの分も含まれている気がするのは、まめなのか情けないのか判断しかねますね。

軽く頭を下げたシロウに対し、私達の対面に座るイリヤスフィールが笑顔のまま答えます。

「気にしなくていいわ。アーチャーが言つてたもの。リンやセイバーはまだしも、コー

ス形式の正餐のマナーなど、あの小僧は知るまい。ならば最初から盛り付けた料理を大皿で出し、自宅で作っている普段通りに各自好きに取る方が面倒がない。無論、どのようにもてなすかは主催である君が決める事だがって」

アーチャーの声音を真似たイリヤスフィールが胸を張って言います。彼女自身はとても可愛らしく見えました。後ろに赤い弓兵を幻視しそうな物言いでした。隣に座るシロウが、小声であんにやろうと呟いています。

イリヤスフィールの説明で、彼女が何故主催者が座るべき座席ではなく、私達の対面に座っているのかわかりました。シロウの家の食事の時のような、団欒をもって迎えるうとしてくれたのでしょうか。

「あ、そうそう。料理を自分で取りたくなかったり手が届かなかつたら、リズに言つて。彼女が代わりに取るわ」

イリヤスフィールに言われ、一礼したりリーゼリットが我々の後方へと場所を移しました。王族であつた私に対しての気配りでしょうか。どうやらイリヤスフィールは、正規のマナーと団欒を織り交ぜ迎えてくれるようです。

彼女のもてなし方は私には快く感じたのですが、それに異を唱える者が。

「まったく、食事のマナーすら碌に知らないとは。お嬢様に庶民の真似事をさせるなど、さすが衛宮を名乗るだけにはございますね」

イリヤスフィールの後方に立つセラが、呆れと蔑みを隠さずに言い放ちます。思わずムツとして反論しようとしたのですが、言われた内容がシロウ自身が認めた事の為に否定できずに黙っていると。

「いいのよ。セラ。食事のマナーって言うのは、元々同席者や料理人に対する気遣いだもの。それと食材への感謝かしら？ だから決まったルールを守るよりも、感謝を籠めて楽しく美味しく食べるのが正しいのよ」

大らかな言い方でセラを論し、シロウを庇ったのはイリヤスフィールでした。主人に言われ出過ぎた発言だったと思つたのか、セラは礼をしてから侍女らしい佇まいに戻りました。

アインツベルンの主従のやり取りが終わると、傍観者に徹していたリンが「今のどつちに言つたのかしらね」と、誰に言うでもなく不思議な事を言っています。

「さ、折角の料理が冷めないうちに頂きましょう」

この城に来てから、どこかおかしいリンは気になります。が、ホストであるイリヤスフィールの食事の開始の号令。情報提供の交渉を有利にする為にも、ゲストとしては従わざるを得ません。リンも必要な事でしたら、自分から相談してくださるでしょうし。

意識を切り替え、テーブルに並べられた料理をさっと一瞥します。

衛宮家と同様に自由に食べてよいと言われはしました。ならば目につく端から食べ

ればいいかと言えば、否です。より美味しく味わう為には、ある程度の順番を考えねばいけません。

見事な肉料理に目を惹かれますが、まずはスープかサラダと思えば、輝くスープが目に入ります。いや、あれはスープではなく肉の入った煮込み料理？

見慣れぬ料理に目移りしている私に、ホストらしく気を使ったのかイリヤスフィールが声を掛けてきました。

「どうしたのセイバー？」

「……つい、見事な料理なので、どれを取ろうか迷ってしまいました」

「ふーん？　んー、別に遠慮しなくていいのよ。食べたければ全部食べてもいいし」

そう言われても私だけの為の料理ではないので、一人で全部食べるのは憚られます。そう思った私に、イリヤスフィールとリンによる不意の追撃が。

「初めて見る美味しい料理がいっぱいあれば、セイバーは喜ぶだろう。ってアーチャーも言ってたし。って、これは内緒にしなきゃいけないんだっけ」

「あら、それじゃあこの料理ってセイバーの為の料理なのかしら？」

「む、むー。そうね。認めたくはないけど、少なからずセイバーの為なんでしょうね」

「だそーよ。良かったわね、セイバー。衛宮君の家で食べるみたいに、遠慮なく食べなさいな」

リンもイリヤスフィールも揶揄う訳ではなく、私が遠慮しているように見えて気遣ってくれたようです。それは素直に嬉しい。嬉しいのですが……。

まるで私が食べ物に執着する食いしん坊が如く扱われ、羞恥で顔が火照ってしまふ。それもこれも全て……。脳裏にニヒルに笑う赤い弓兵が浮かぶ。

「悔しいけど、凄く美味いぞ。セイバー」

シロウにまで促され進退窮まり、早くこの話題を終わらせようと急いで料理を取ろうとすると、横からスツと料理が乗った皿が目の前に置かれた。

「……ありがとうございます」

見兼ねたリーゼリットが料理を取ってくれたようだ。それも私が一番見ていた煮込んだ肉料理を。こうも周りに気遣われる恥ずかしさを表に出さぬようにして、一口大に切った肉を口に入れる。

「美味しい」

柔らかだが歯ごたえを残した肉は歯に心地よい弾力を伝え、噛むごとに肉の旨味と野菜の旨味が溢れ出る。控えめの塩味が肉と野菜の味を引き立て、飲み込んだ後は柔らかかな旨味だけが舌に残る。

見た目の肉肉しさに比べあっさりと思われられる肉の塊は、気づけばなくなっていた。その時を待っていたかのようにリーゼリットが空いた皿を回収し、次なる料理が乗った

皿を差し出した。

「ほう」

新たな料理を確認し、再びナイフで一口に切り口に入れる。今度は焼いたお肉のようですが、直接中に野菜などが入っているようです。噛みしめる度に感じる複数の食感が面白い。

味はもちろん、香ばしさと歯ごたえが良い肉料理を食べ終え、肉ばかりなのも思っただ矢先——緑の葉野菜を中心に、黄色い柑橘類や白い野菜が乗った皿が置かれた。リーゼリットをちらりと見ると頷きが返ってくる。きっとこれも素晴らしい一品なのだろう。

私とリーゼリットが真摯に料理と向き合っている間、シロウ達の会話も弾んでいた。

「あまり見たことはないけど、これってドイツ料理だよな」

「へえー、よくわかったわね。シロウ」

「ドーナツドイツ料理にしたのも、アーチャーが何か言ったんでしょ」

「ええ、本当は別の料理を頼んだのに、アインツベルンが客人を迎えるならこちらの方が相応しかろうって我がままを言われたわ」

リーゼリットが選ぶ料理をもきゅもきゅと食べつつ、マスター達の会話に耳を傾ける。む、一尾丸ごと焼いた料理とは豪快ですね。うん？ 焼き魚とは違った香ばしき。

焼いたのではなく揚げた物でしたか。

「本当は何をリクエストしたのよ」

「アーチャーが回った土地の料理よ。料理に統一性がなさすぎるとか、他にも色々理由付きでダメって言われたわ」

「なんだ、あいつつてそんな複数の文化圏を跨ぐような英雄なのか」

「……衛宮君、もしかして諸外国に料理修行に行きたいの？」

「唐突だな。遠坂」

野菜を食べ終えると、ポテトを使った料理が置かれ身構えてしまう。とある親類が得意としていた、砕いたポテトを連想する。出されたポテトは丸のまま使っていて、砕かれた様子はなすが。

選んだリーゼリットを信じつつも、おそろおそろの切り分ける。知っている切り応えと違う違和感に、尚のこと慎重に口に運ぶ。すると予想外のクニユリとした歯ごたえと、ツルツとした舌ざわりに驚いた。ポテトの風味や味は感じるのに、上品で柔らかな味わいだ。

噛めばモニュモニュと独特の反発があり、味は控えめだが濃い味の品を食べる合間の口直しに良いかもしれません。これ自体雑に作られた物ではなく、とても美味しいので食べ過ぎてしまいそうです。

「イリヤ、確認したい事があるんだ」

皆が食事を楽しむ温かな雰囲気の中、微かに緊張を含んだシロウの声が聞こえた。何か大事な話をする気配を察して、食べる速度を落とし耳を傾ける。

「イリヤは切嗣の娘、なんだよな？」

私の話を聞いて、シロウとしては確認せずにはいられなかったのでしょう。実の娘と養子のシロウ。聖杯戦争とは別の重大事。血の繋がらぬ相手に対して、イリヤスフィールはなんと返すのか。

「そうよ。だから切嗣の養子であるシロウとは、家族なのかしらね」

心配で見守っていましたが、イリヤスフィールの自然な返しに杞憂だったとわかります。彼女は楽し気な態度を崩さぬまま笑顔で応えました。

ホッと息を吐いたシロウも緊張を解いて笑顔になり、場の空気が再び緩みます。

「そうか、家族……か」

「……もしかしてシロウは私と家族になるのは嫌？」

「そんなことないぞ。むしろこんなに可愛い妹ができて嬉しいくらい……で……」

「妹？」

イリヤスフィールに嫌？　と言われわかりやすく動揺するシロウ。そんな彼を怒りを籠めてセラが睨んでいて、気づいたシロウが笑顔のまま固まる。

自らの従者とシロウとのやり取りに気づいたイリヤスフィールが、笑ってはいたが愁いを帯びた寂しげな表情に変わる。

「本当はね、冬木に来るまではシロウのことを殺しちゃうって思ってたの」

内容とは裏腹に敵意が乗っていない言葉。

「私を迎えに来ないで、他所の人間を子供にして家族ごっこをしている。そんな切嗣が憎かった。でも切嗣は死んじやった。だから代わりに、切嗣の子供になった男の子を苦しめて殺そう。そう思っていたわ」

静かに語られる心の内の告白。

「そう、憎んでた。その筈だったのに、冬木に来てお母様や切嗣……うん、前回の聖杯戦争に参加した魔術師やサーヴァント達が何を思ってたのか。巻き込まれた人々が今をどう生きているか。それらを知ってわからなくなった」

視線を下方に向け俯き気味だったイリヤスフィールが、ふと顔を上げ儚げな笑顔を見せる。

「辛いのは自分だけじゃない。それが当たり前のことだって知って、わからなくなったの……」

悲しそうな印象を受ける彼女に引きずられるように、室内の空気が重くなる。

「知らなかったことを知って、何をしたいのかわからなくなって考えたわ。そして――

——すべきことを見つけた」

するべきことが何かを語らず、静寂が部屋を満たし時が過ぎる。言う気がないのか、或いは言えないのか、どちらかわからない沈黙が続く。

家族故に気安く声を出せないシロウに代わり、沈黙を破つたのは私と同じ傍観者のリ
ンだった。

「で、家族である衛宮君を助けるのがすべき事ってわけ？」

「違うわ。それは私がやりたい事だもの」

「じゃあなんなのよ」

「バカね、リン。言わないんだから教える気がないってわからないの？」

澄まし顔で応えるイリヤスフィール。先程の印象から一転して、余裕をもって人の悪い笑みを浮かべリンを見下している。

「肝心な部分を誤魔化してよく言うわね」

「まあ、人の秘密を聞きたがるなんて、リンって節操なしなのね」

言われたリンも真面目な表情から笑顔へと変わります。笑ってはいませんが朗らかと言うにはほど遠く、明らかに怒っています。

「俺を助けるのがやりたいこと、か。そうだよな。家族だもんな。イリヤが辛かった分、兄貴として俺もイリヤを助けたいと思う」

ある意味空気を読まずに発言したシロウに虚を突かれたのか、リンとイリヤスフィールがぼかんとした顔でシロウを見つめる。

そしていつの間にもやらシロウの背後に移動していたリーゼリットが、頭を抱くように背中から抱きしめ撫でた。

「(ハハハハハ)」

後頭部をリーゼリットの豊富な胸部に埋める形で抱きしめられているシロウを、リンとセラが冷たい視線で射貫く。

リーゼリットに抱きしめられて嬉しいのか顔を赤くさせつつ、リン達から軽蔑の視線を受けて怯え竦む。シロウも若い男性なので、異性にいちいち反応するのはわかりますが、もう少し上手い対応ができないものでしょうか。

若すぎるマスターを憂いて、残りのポテトをはむつと口に含む。美味しい。

「ふっ、ふふ、そうね。シロウがそう思ってくれるのは嬉しいわ。でも——」

シロウの醜態を見て嘖き出したイリヤスフィールが、意図的に言葉を切つて間を置いた。続く言葉は何か、全員で注視していると。

「私、シロウより年上だから姉なんだけど、妹の方がいい？ おにくちゃん？」

につこり微笑み、甘えるような猫なで声での問いかけ。そのように問いかけられれば、当然シロウの反応は予測できる。

「へ？ あ、姉？ イリヤが姉さん!？」

「ええ、そうよ。おにいちちゃん」

甘い声でおにいちちゃんと呼ばれ、混乱の真ただ中に陥るシロウ。妹だと思っていた相手に姉だと言われ、さらには姉なのに妹として可愛らしく振舞われた。混乱するの無理解できません。

シロウの年齢を知らなかったのも、私も二人の関係については具体的に触れずに話したのも、混乱の一端を担っていいそうです。すいません、シロウ。と心の中で謝罪をし、気に入ったポテト料理を追加で取ります。

シロウを家族と認めたイリヤスフィールはもちろん、熱烈な抱擁で歓迎をしているリーゼリット。二人の様子を見て、無事シロウがアインツベルンに受け入れられたようで一安心です。これで料理に集中できる。そう思ったのは早計でした。

和やかな姉と弟の交流を裂いて、悲鳴のような震えた声が室内に轟きます。

「血の繋がらぬ義理の姉を妹扱いし、あまつさえおにちゃん呼びを強要するとは!」
端的にシロウとイリヤスフィールの状況を表したセラの叫び。彼女の言葉を聞くと、シロウが倒錯的なことをしているように聞こえますね。あむあむ。やはりこのポテト料理は美味しい。

「お嬢様! 衛宮云々ではなく、この男自体が危険です! 今すぐにこの世からの排除

を進言いたします！」

「は、排除って」

「望み通り、お嬢様に兄扱いされたのです。悔いなく果てなさい」

「イリヤ、セイバー、遠坂、なんとかしてくれっ！」

魔術を発動させようとするセラに、危機感を抱いたシロウが助けを求めますが、

「申し訳ありません。シロウ。今は少々手が空きそうにありません。あの香ばしいチーズと野菜が乗った料理が気になりますので」

「あ、それピザっぽくて気になってたのよね。セイバー、私の分も取ってくれる？」

「了解です。リン」

にこにこ笑顔で見守るだけのイリヤスフィール。料理を食べるのを優先した私とリン。助けを求めても無駄と悟ったシロウがセラに向き直り、助命を求め始めます。それを横目に私達はのんびり料理を楽しみます。

シロウは混乱したままで気づいていないようですが……。

未だにリーゼリットが背後からシロウを抱きしめているので、セラも本気で魔術を放たないでしょう。それがなくともセラとて、自らの主が認めたシロウを、主の目の前で害するはずがありません。

「さあお覚悟なさい。リーゼリットが離れた時があなたの最期です」

「なら、ずっとシロウにくつついておく？」

「え？ ……それだと助かる……のか？」

「おのれ、お嬢様のみならずリーゼリットまで誑かしましたか！」

戯れるシロウと侍女達を横目に、美味しく料理を頂く。時折、イリヤスフィールが料理の説明をし、リンと共に感想を返す温和な時間が過ぎていった。

こうしてアインツベルン城でのイリヤスフィールとの晚餐は、シロウのおかげで十分に打ち解けられるものとなりました。

幕間 セイバー 後編

思いのほか有意義だった晚餐会も終わり、食後のお茶が並べられ、いよいよ本題に入ろうとしていた。

魔術師同士の会合。感情とは別の立場による振る舞いと、自己の利益を追い求める冷徹な場。貴族同士のやり取りのように、腹の探り合いや虚言が蔓延るに違いありません。本来なら、ですが。

話し合いを始めようという段階になっても、イリヤスフィールの態度は別段変わるわけでもなく、すでに彼女がシロウの味方であるとわかっていきます。気楽に、とはさすがに行きませんが、無用な猜疑心などは持たずに話し合えそうです。

アーチャーは片付けがあるとのこととで途中参加するそうですが、マスターのリンが居るので問題はないでしょう。それに対価の料理は彼が作ってくれたのですから、後は私達が奮闘するのが筋とも言えます。

「シロウ達がここに来た理由は、キャスターの情報欲が欲しい。だったかしら」

紅茶を一口飲み、カップをコトリと置いたイリヤスフィールが口火を切りました。

「ああ、昨夜イリヤに会った後、キャスターのいる柳洞寺に行った。そこでキャスターが

言つてたんだ。自分の望みは『自分を縛る人類からの解放』

「それと『今世の破壊』ね」

シロウの言葉をリンが引継ぎ答える。二人の言葉を聞いたイリヤスフィールは、平然とした態度を崩さぬまま問いを投げかけてきた。

「それで？」

彼女の態度で悟る。キヤスターの望みを既にイリヤスフィールが知っていた、と。昨夜、キヤスターが色々教えてくれたと彼女は言っていたが……。想定はしていたが、やはり知っていたかと言うほど安易な事態ではない。

元々キヤスターのことを詳しく知っているかもしれないと来はしたが、最悪はイリヤスフィールとキヤスターが手を組んでいる。改めてその可能性を示されてリンと私は氣を引き締めたが、そうではない人物が一人居た。

「キヤスターが本当にそんなことを望んでいるか、知つてたら教えてほしい」

シロウが動揺の欠片すら見せずに、イリヤスフィールに話しかけた。

「冬木の間人には死んでもらうことになるかもしれないとも言っていた。それが本気なら放つておけない。イリヤがキヤスターの真意を知つてゐるなら、教えてくれないか？」

「真意、ね。うーん」

緊張をはらまずに、義理の姉弟は食事の時と変わらぬ雰囲気では話をしていた。シロ

ウの顔には姉に対する信頼が窺え、腕を組み唸るイリヤスフィールには弟に応えたい親愛が見受けられた。

どうやら弁が立つリンよりも、シロウを主体で話し合いに臨むという方針は正解だったらしい。

「あなた達、キャスターに会ったのよね？」

シロウと会話をしていたイリヤスフィールが、私とリンに顔を向けて問いかけてきた。

私達が頷くと、今度はシロウを含めたこちらの全員を見て、さらに問いを重ねてくる。「キャスターに会って、彼女の印象はどうだった？」

期せずして衛宮邸で話したような内容を問われ、ちらりとシロウ達と視線を交わす。思いもよらぬ質問に誰から答えたものかと思つたが、リンがすぐに答え始めた。

「私が初めて会ったのは衛宮君の家で、キャスターが訪ねてきたのよね。同盟をしたいつて。その時は自分から真名をばらすし、終始こっちの顔色を窺ってビクビクして、ああはずれクラスって言われるだけあるなああって同情したわ」

リンの言う内容に、心の中で確かにと頷きます。聖杯の望みについて個人的な欲望と答えた彼女に、召喚直後の警戒心もあつて、あの時はつい嘯みついてしまった。キャスターは強気を装ってはいましたが、私のことを怖がっていましたね。

「次に会ったのが昨夜の柳洞寺での戦いで、魔術師らしくどこか狂ってる……って思ってたんだけど、思い返してみると、そうでもないのよね」

ふうと一息入れ、リンが続きを語ります。

「戦闘前こそ狂人のように振舞っていたけれど、戦闘中の会話には律義に応えてきたし、わざわざ自分が使った魔術の説明までしてくれたわ。アレ、もしかしたら教導だったのかしら」

「教導？」

「そ、魔術師なら魔術を使いこなしなさいっていう一例を見せつけられたっていうか、駄目だしされたっていうか。そう考えると狂人どころかお人好しに思えるのよね」

イリヤスフィールの疑問に即座に答えたリンが、げんなりとした顔で肩を落とした。自分は決死の覚悟で挑んだ敵に、実は訓練をつけられていたと思えばリンの態度も仕方ない。

それにしても教導とは。リン達の戦闘の様子を見た訳ではないので判断できないが、聡明なリンがそう考えたのなら、そうであった可能性はあるのだろう。

リンが話し終わり、次は自分の番かと思いい口を開く。

「初見での印象はリンと同じなので省きます。私とシロウが二度目に会ったのは、雑木林でのライダーとの戦闘の後でした。そこにキャスターが突然現れ、ライダーに傷つけ

られた己のマスターの姿を目にして、私達がやったと勘違いされ攻撃を仕掛けられました。……」

あの時は正面からの正々堂々とした戦いを好む珍しい魔術師かと思っただけだが、シロウを助けたいという思いを述べたイリヤスフィールの態度を加味すると。

「誰かを害するよりも、助けるのを優先する人物、でしょうか」

敵意がなかった攻撃は、自分のマスターの救出を最優先にしていたからと考えれば納得がいく。明らかに激昂していたにもかかわらず、そういった優先順位を見失わないのは優しいと評してもいいかもしれません。

イリヤスフィールの態度を見る前であれば、非常に冷静な魔術師とも考えられました。が、きつとリンの言う通りお人好しの優しい人物と考えるべきなのでしょうね。

だからこそ、弟のシロウと敵対して戦ったと知っても、姉であるイリヤスフィールが平然としていられるのでしようから。

私それぞれの所感を言い終わると、皆の目がシロウへと移る。

衛宮邸の会話でもキャスターに悪い印象を持っていなかったシロウのことですから、リンや私と似たようなことを言うと思っていたのですが。

「あく、キャスターの印象……か。……お母さん、かな」

室内がシンと静まる。

シロウの声はしっかりと聞こえたはずが意味を理解しようとする、ん？ と疑問が浮かぶ。今、シロウはなんと言った？

「んんっ、衛宮君、悪いんだけどもう一度言ってくれませんか？」

「……母親みたいだって言ったんだ」

喉の調子を確かめるような仕草をして、聞き間違いかを確認したリンへ、やや赤面したシロウが恥ずかしそうに答えました。

返答を聞いてどういった態度をとるのが正しいかわからず、真面目な表情のまま聞き流した私と違い、リンは口をへの字に曲げどんよりとした目でシロウを見ています。

「違うぞ、遠坂！ あくまでそういうイメージっていうか。最初に会った時に制服を直してもらったり、次に会った時には怪我を治してもらって、後遺症がないかまでしっかり確認されたりとか」

シロウの言葉を聞いているうちに、リンの表情が素に戻っていききました。

「本当ならしなくてもいい心配をしてくれて、もし母親が生きていたらこういう感じだったのかなと思ってさ」

シロウが少しだけ寂しそうに言った。昨夜の戦いを除けば、シロウの中ではキャスターはそういった印象なのですか。

衣服を繕い、治療が問題ないかの心配もする。恩を売るにしては些細な行動です。無

用な心配をついしてしまう。シロウの思う母親像とキャスターの行動が重なったんですね。

「そう、シロウもそう思ったのね。そうよね。あんなことされたら、お母様みたいって思っちゃうわよね。うん、私だけじゃなくて良かったわ」

ずっと泰然としていたイリヤスフィールが、頬を赤くしてぼそぼそと独り言を呟いています。こちらに聞かせる意図がないようで内容はわかりませんが、恥ずかしがっているように見えます。

私達が彼女を見ているのに気づくと元に戻りましたが、彼女が恥ずかしがる要素はなんだったのでしょうか。

「で、私達のキャスターの印象ってこんな感じなんだけど、そっちはどうなのよ。ついでうか、知ってるんでしょ？ 実態がどうなのか」

リンが問いかけます。イリヤスフィールの態度から答えが予想出来てしまうせいでしょうが、あからさまに投げやりな口調です。

「そうね。まあ私も大体貴方達と同じね」

予想に違わぬ返答。それに追加の情報が加わる。

「ちよつとした事情からキャスターのことを知る為に、アサシンやライダーにも同じような質問をしたわ。そしたら二人揃ってこう答えたのよ。『キャスターは箱入りのお嬢

様だ』って。アサシン達が言うには、生前コルクスの王宮でとても大事に愛情をもって育てられ、人としての良識もすっかりと教育されたんだらうですって」

名乗った時の仕草や細かい所作から、王族としての教育をされていたのは窺えました。傍にいてわかるほどの良識もですか。キャスター陣営のサーヴァントからの情報であれば欺瞞の可能性も考えるべきですが、自然と真実なのだろうと受け入れました。

「つまり、キャスターは悪ぶってるだけの良い人ってことなのか？」

「ここまでの話の内容を要約した疑問を、シロウがイリヤスフィールにぶつけると。

「ええ、悪徳を行っていない限り、敵対したって殺されることはない程度には善人ね」

イリヤスフィールの回答を聞いて、肩の力がガクリと抜ける。そうだったのは私だけではなく、隣のリンも同じように深いため息をついていた。

「じゃあなに？ 街中の吸精の刻印や今世の破滅を願うのかもブラフって訳？ なによそれ……。世界の危機かもって思った私がバカみたいじゃない」

リンの言葉がグサリと私の胸を刺す。私も似たような思いで昨夜宝具を使用したけど、その行動が見当違いの危惧からだと思うと恥じ入ってしまう。

見事にキャスターに騙されたと項垂れる私達を置いて、シロウとイリヤスフィールの会話は続きます。

「それじゃあ桜は——あゝ、ライダーのマスターの家族は無事なのか？」

「マキリの事?」

「マキリ?」

「ああ、そうだったわ。確かマトウって名乗っているんだったわね。残念だけど、マトウの当主は魂が歪み人を喰らう魔性と化していたから、キャスターに退治されたわ」

キャスターがライダー陣営を襲ったと思っていた出来事も、真実は人を喰らう化け物退治だったと。だとするなら、リンの妹のサクラの安否は。

「それとサクラは、キャスターに保護されてるわ。……ライダーの依り代にされて魔力を吸われ続けて、治療が必要だったそうよ」

一瞬、イリヤスフィールが口籠ったような? そんな私の些細な疑問もシロウの明るい声にかき消され、すぐに霧散しました。

「そうか、桜は無事なのか。良かったな。遠坂」

「えっ、あ、うん、そうね」

あまりにも自然に笑顔で声をかけられてしまい、珍しくリンの方が動揺しています。妹が無事だとわかった安心感からの隙を突かれたのでしょうか。嬉しさも恥ずかしさも隠せていません。

降って湧いた朗報に嬉しそうにしていたリンだったのですが、突如ピシリと表情が固まり下を向いてしまいます。

「あれ？ 妹を助けてくれた恩人に私、イカれた懐古趣味とか言っちゃった……？」

キャスターに対するリンの罪科が増えた瞬間でした。

「安心するのは早いわよ」

喜んでいた私達に、イリヤスフィールから警告が飛びます。見れば先程まで柔和だった雰囲気が一変し、表情を消して冷たい印象に変わりました。

「貴方達を招いた理由を忘れたの？」

「キャスターの情報を衛宮君に教える為でしょ？」

「違うわ。貴方達が、セカンドオーナーとして話を聞きに来たって言ったからよ」

森でのいざこざをすっかり忘れていたのかリンがハツとします。リンの様子を見てイリヤスフィールが思わずと言った感じのため息を吐き、雰囲気が戻りかけましたが。

「キャスターが善人だからといって誰も恨んでいない。なんてことはないのよ」

感情を消して淡々と語るイリヤスフィールに、シロウもリンも笑顔を消して聞き入りました。もちろん私も。

「彼女が国を追われ、放浪することになった元凶。イアソンに加護を与え、キャスターの心を惑わした女神ヘラに対しては未だに恨んでいるわ」

「それはわからなくもないけど、キャスターがいくらヘラを恨んでいたって、もう現代には神々は居ないんだし、恨みを晴らそうだったってどうしようもないでしょ。それがどう

して冬木に関係するのかしら？」

リンが土地を守る魔術師としての質問をすると、ようやく本題に入れたからかイリヤスフィールはニヤリと笑い応えました。

「私のバーサーカー、真名をヘラクレスって言うんだけど、最期どうなったか知っている？」

生前かなりの勇名を馳せた英霊だろうとは思っていましたが、バーサーカーの正体がギリシヤの大英雄だったとは。どうりであれほどの強さな訳です。

「ヘラクレスって言ったなら、確かヒュドラの毒を受けて不死を手放して亡くなったんだよな」

「ええ、その後オリンポスの神々に認められて神の座に上がったのよね」

二人の言葉を聞いて満足そうに頷いたイリヤスフィール。

ここまでは私も知っていることですし、驚きもありません。ですが次にイリヤスフィールが語った内容は、シロウ達魔術師はもちろん、サーヴァントである私でも脅威を感じる内容でした。

「そう、ヘラクレスはオリンポスの神々の末席に加わることになり、その魂は神々の御座に引き上げられた。それなのに……ねえ、どうして神々の御座に居るはずのヘラクレスが、英霊として召喚できたと思う？」

イリヤスフィールは返答を待たずに続きを語る。

「キヤスターは聖杯戦争に召喚され、ヘラクレスが居るのを知ってこう考えたのよ。神々は黄昏を迎え滅びが確定していた神の御座を捨て、人の英雄の魂が集う英霊の座に移動することで生き永らえているのではないか？ だからこそ、神の御座に魂があるのはずのヘラクレスが、英霊の座より召喚されたのではないか？ って」

キヤスターの想いを乗せてなのだろう。イリヤスフィールの言葉に憎悪が含まれていく。

「私達にとって概念に近い英霊の座への干渉は、キヤスターでも実質不可能。たとえ神々が英霊の座に潜んでいるとしても、どうすることもできない。普通なら、ね」

「そこで聖杯、か」

キヤスターの目的が見えてきて、絞り出すように言ったリンの言葉に我が意を得たりとイリヤスフィールが喜色を示す。

「そう、聖杯を使えば英霊の座にすら干渉が可能でしょうね。隠れ潜む女神ヘラを引きずり墮とすことすらも」

神降ろし。天より神を地上に墮とす行為。ヘラクレスと言う英霊が怨敵の所在を教え、聖杯と言う手段が手の届くところにあった。神であれど目の前に実像として顕現すれば、彼女ほどの魔術師なら害する手段などいくらでもあるのでしよう。

周りからお人好しと評されたキャスターではあるが、復讐に走らずにはいられなかったのだろう。

恨む相手が居なくなっていれば。或いは恨みを晴らす手段がなければ。どちらかでも欠けていればよかつたのですが、この第5次聖杯戦争と言う場が、彼女にとって整い過ぎていた。

「神降ろしなんてしたら、冬木がどうなるかわかつたもんじゃないわね」

リンの言葉が重く響く。

冬木に女神ヘラが降臨しようものなら、神秘の薄いこの時代にどのような影響があるか計り知れない。冗談でもなんでもなく、冬木どころか世界さえも滅ぶかもしれない。

教えられた衝撃的な事実にも口を開けずにいたら、イリヤスフィールの後ろに待機していたセラが突然上を向いてから、すぐに主へと顔を向けた。

「お嬢様、これは」

「ええ、侵入者……いえ……リズ、窓を開けなさい」

指示を受けたリーゼリットが窓を開けると、淡く紫に光る鳥が室内へ入ってきた。それは細やかに作られた芸術的な針金細工のような鳥だった。ただの針金細工が空を飛ばす訳もなく、おそらく誰かしらの使い魔なのだろう。

イリヤスフィールが右腕を軽く上げると、部屋をぐるぐると回っていた使い魔が、彼

女の腕の上にそつと降り立った。

「この術式は、まさか」

「うちの魔術の模倣ね。シュトルヒリッターを真似たものかしら。見せた覚えはないのに、流石ね」

セラとイリヤスフィールが使い魔を見て驚いていた。話から察するにイリヤスフィールは使い魔の主が誰なのかわかっているようだ。

イリヤスフィールの腕にとまった使い魔は、彼女が目を合わせると少しだけ発していた光源が強くなり、そしてそのまま空気に溶けるように消えてしまう。

使い魔が消えた後に数秒ほど虚空を見つめていたイリヤスフィールだったが、目の焦点が戻ると深いため息を吐いた。

その様子に不満を表したのがリンだった。

「ちよつと、一人で納得してないで説明しなさいよ」

話し合いの最中に突然の侵入者。それも高度な魔術で編まれたらしき使い魔。気にならない訳はなく、リンの言葉はシロウと私の代弁でもある。

説明を促されたイリヤスフィールは、私を見てから再度深いため息を吐いた。自分を見てため息を吐かれ、むつとするより困惑した。なぜ私を見てため息を吐くのでしょうか。

「キヤスターからの連絡と警告よ」

「連絡と、警告?」

「そう、警告。それも可能ならセイバーにもって」

「は? 私にですか?」

唐突に名を呼ばれ思わず声が出た。イリヤスフィールとキヤスターに繋がりがあ
るのはもはや周知の事実ではあるが、まさかキヤスターから私宛に警告があるとは思
いも
しなかつた。

予想外の言葉はシロウからからも続きます。

「あ、そういえば昨日の戦いの終わりに、キヤスターからセイバーへ伝言があつた」

「え?」

「確か『貴女は対価を払っていない』だつたっけ。伝えるのが遅くなつて悪い」

「い、いえ」

「そんなことまで言つたの? キヤスターが? セイバーに?」

「ああ、そうだよな? 遠坂」

「ええ」

キヤスターからの伝言を聞いたイリヤスフィールがシロウに再確認をし、何故か口を
ぽかんと開けて驚いています。

私はと言えば、どう反応するべきかもわからず困惑したままでした。イリヤスフィールに託した私への警告も気になりますし、シロウが伝えてくれた伝言の意味もわかりません。

シロウとリンが、どういう意味？ と視線で問いかけてきてはいます。ですが私自身に対価と言われても思い当たる節もありません。

「はあ、なんでセイバーに忠告までしてるの。私が程よく危機感を煽ろうとしたのに台無しじゃない。もしかしてランサーと仲良くなつてたりしないわよね。キャスター、大戦でも起こす気なのかしら」

イリヤスフィールの呆れた声が止めとばかりに、部屋全体に弛緩した空気広がってきます。女神云々で緊張していたはずが、使い魔一つでこうも変わるとは。

「でもそうね。もうすぐ終わると言うなら……彼女が居るうちにやりたかったことを代わりにやるのが、恩返しになるのかな」

呆れていたイリヤスフィールですが、どこか寂しさを含んだ静かな声で呟きました。そして再び私へと視線を向けた彼女が、厳かな響きをもって言ってきます。

「セイバー、いえ、アーサー王。あなたに聞きたいことがあるの」

聞きたいと言った内容を明かされる前に、我々は場所を移していた。私が知っているよりも華やかに彩られた中庭の庭園へと。

忘れもしないその場所に私は立っていた。

この場所に来てから感じる重圧。それは間違いないあの時のことが原因だろうが、それだけではなく、これから起こるであろうことに対する焦燥かもしれない。

庭園の中央には私とイリヤスフィールが向かい合うように立ち、シロウとリンの二人はいつかのアイリスフィールのように下がった位置に佇んでいる。

数分程、無言のまま対面を続けていると、セラがワインボトルと酒杯を載せたワゴンをひいてきた。彼女は一礼をしてから酒杯にワインを注ぎ、私とイリヤスフィールにそれぞれ渡して下がっていった。

手に持つ酒杯に目を落とす。澄んだ夜空の下、黄金の杯に綺麗な色の酒。杯と収まる酒精の質は落ちるだろうが、まるであの時の再現のような状況。

「セイバー」

呼びかけられ思わず体がビクツと震えた。凶らずも自身の反応で、自分が緊張していると思いきらされる。

内心の緊張を抑えつつ、顔を上げ正面を見た。

「誉れ高きブリテンの王、アーサー・ペンドラゴン。この酒杯にて問うわ。あなたにとつての王とは、王道とは？」

問いかけ自体は予期していたものではあつたが、すぐに応えることは出来なかつた。二人の王に否定された我が王道。言葉だけであつたのなら、暴君の戯言と切つて捨てられた。

だが征服王の見せた輝き。王とは孤高にあらざると言い切つた彼の宝具。あの眩い光景を見せられ、何も思わぬところがなかつたかと言えば否であろう。

だとしても。そうだとしても。

一息に杯を呷り、真つすぐにイリヤスフィールを見て宣言する。

「王とは、民と国に身命を捧げ、誰よりも正しくあろうとする者だ。臣民が望む正しき統制、正しき治世を敷くことが、そこを目指すことこそが王の道に他ならない」

そうだ。それこそが私が理想とした王の姿だつた。だからこそ、私は叶えなくてはならない。息を吸い、先ほどよりも声を上げ、ここに居たはずの彼らにも届くように再び決意を露にする。

「故に私は願う。誤つた治世を正し、滅びた故国の救済を！ 万能の願望機をもつてして、滅びゆくブリテンの運命が変わらんことを！」

叫びのような声を発し、自らの願望を吐き出した。

イリヤスフィールは私を見ていただけで言葉を返さず、代わりのように冷たさを感じる風が頬を撫でる。冬風が吹き終わると背後から動揺したシロウの声が聞こえた。

「セイバー……それは……」

振り向かずともわかつてしまう。沈むような響きの中に否定的な思いがあることを。信頼に足るマスターにさえも否定され、耐える為に顔を俯かせてしまう。

「コルキスの王女メディアに代わり、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンがアーサー王に告げる」

シロウにも否定されて、またなのかと俯いていた私に、その声はあまりにも優しく聞こえた。否定や嘲りが一切ない、むしろ喜びを感じているようなイリヤスフィールの声を聞いて、私は自然と顔を上げていた。

「人が、母なるものが自身より我が子を優先し、無償の愛を注ぐのは当然の想い。誰かに、何かに無償の愛を注ぐのは私達女が持つ母性の発露。滅びに瀕した国を憂い、苦しみにあえぐ人々を憂い、我が身を顧みずに救いたいと願った自らの大いなる愛に胸を張りなさい」

私を肯定してくれた彼女の言葉は嬉しく思う。確かに私は国を愛し、そこに住まう人々を愛していた。だからこそ認められないのだ。

「しかし私は！ 私は……！ ……救えなかった！ 理想にはほど遠く、人の心がわか

らぬ王と言われ、結果国を割り滅びを迎えてしまった！ 私が……私が王になったばかりに！」

想いはあった。理想に違わず正しくあろうとした。けれどそうはならなかった。国と人々を救いたいという想いは、ついで遂げられることはなかったのだ。

ならば何が間違っていたに違いない。理想が間違っていたとは思わない。であるならば、体現できなかつた私こそが間違いなのだ。

聖杯を求める私の根本。私の理想を、王としての在り方を認めてくれた相手だからこそ言わずには居られなかつた、己と言う過ちを告発する慟哭。

これに対してイリヤスフィールから、強い口調の反応が返ってくる。

「アーサー王配下の円卓は割れ、確かにブリテンは滅びを迎えた！ アルトリアと言う名の少女の願いは叶えられることはなかつた！ けれど！」

イリヤスフィールはコクリと葡萄酒を一口飲み、さらに力強い声風で言葉を続けた。

「あなたの死後、ブリテンに住む人々はあなたのことをこう呼んだわ！ いずれ蘇りし王と！ この地が危機に瀕した時、再び現れ救ってくれる王だと！ 民を救う王である」と！ アーサー王は民に求められる王であつたのよ！」

ドクンと心臓が跳ねるように鼓動した。

「民だけではないわ。9 偉人。騎士道を体現する偉大なる英雄の一人として、後の貴族

や騎士達にさえも認められている。あなたの在り方こそ、理想の騎士であると多大な影響を与えた」

体から力が抜け、よろめいて半歩下がる。

「あなた亡き後の亡国の地は混乱し、辛い日々を送った人々も大勢いたでしょうね。私欲を満たそうと支配を目論む王侯貴族もいたはずだわ」

いったん目を閉じたイリヤスフィールは大きく息を吸った。それからゆっくり目を開き、穏やかな雰囲気へと変わっていく。

「でも、あなたに続く王も居たわ。王冠の欲望に支配されても、友の言葉で目覚め争いを失くそうとした王が。あなたと同じように私心を捨て、命のやり取りをしたにもかかわらず、宿敵の息子を後継者にした女王が。

そして現在、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国と呼ばれる国は、世界有数の強国として在る。人々が日々を安寧に過ごし、明日への夢を持てる平和な国として」

微笑みをたたえるイリヤスフィールから、目を逸らすことができなかつた。

「ブリテンは滅びた。それでも残るものはあつた。苦難の民が望んだ理想の王の姿。明日を信じる希望。あなたが残したものは、しっかりと今と繋がっている」

手に力が入らず持っていた杯を落としてしまい、カランと乾いた音が響いた。膝も崩

れ倒れそうだったが、必死に足を延ばし立ち続ける。私は聞かなくてはいけないのだから。

「……ブリテンの民は、幸せ、なのですか？」

「ええ。あなたが守ろうとした民の子孫は、平和の中で幸せに暮らしているわ」

「ああ……そうなのですね……」

ぼとり、ぼとりと地面に何かが落ちていく。気づけば私は膝を折り手で顔を覆い涙を流していた。

間違っていないかった。選定の剣を引き抜く時に夢見た理想は、願いは、決して間違いではなかった。王としての在り方も、我ら円卓が駆けた試練の日々も。

いや……。たとえ間違いだっとしても、無駄ではなかった。理想の王であろうとした辛苦も。友との争いも。望まぬ悲劇も。無駄ではなかった。

私達が果たせずとも望みは叶ったのだ。あの日、人であることをやめた少女の願いは、時を越えて叶っていたのだ。

満天の星空の下、騎士の王ではなく一人の人間として涙を流し続けた。悲嘆にくれた嘆きを伴ったものではない、喜びの雫を。